SYMPOSIUM

報告書

まちづくり国際シンポジウム

〈市民による地域経営と国際化〉

(社)山梨県建築士会 青年部
甲府市丸の内1-14-19 TEL0552(33)5414

まちづくり国際シンポジウム報告書

〈市民による地域経営と国際化〉

日時/1991年6月28日㊎
PM1:30〜PM4:30
PM4:40〜 パネラーを囲んでの交流会

場所/甲府・シティプラザ紫玉苑
甲府市飯田1-2-4 TEL0552(24)4422

CONTENTS

はじめに　山梨県建築士会青年部長　久保田　要…… 3
山梨県建築士会　会長　梶原政夫…… 4

1）シンポジウムの記録…… 7
基調講演①　デビット・マーメン…… 10
基調講演②　長谷川　徳之輔…… 16
研究報告①　北村真一…… 28
研究報告②　早田俊広…… 49
研究報告③　久保田　要…… 62
ディスカッション …… 75

2）手づくりの交流 …… 91
それは前日から始まった　進藤哲雄…… 93
クリスティン山梨訪問記　クリスティン・マーメン…… 95
道中記 1　久保田明美…… 98
道中記 2　進藤早苗…… 99
交流会雑感　佐野正秀…… 100

3）みんなの声、それぞれの立場から …… 101

4）今見る、先見るムーブメントへ …… 119

結び　久保田　要…… 149

はじめに

語りつづけることが今は大切かも知れない・・・と肩をたたき合って、あっという間に数年が過ぎた。・・・　私達山梨県建築士会青年部は、２０代、３０代のエネルギーをこんなふうに、パワーを内在化してきた。建築士会の先輩諸氏のあらゆる場での蓄積の上に今日の青年部活動があるのは言うまでもない。

かつて建築の言語が職能的で、市民の言葉にならなかった世代を思えば、今ほど、市民が建築に興味を持ってくれる時代はないのかも知れない。建築行為そのものが、市民と地域と企業と別々に考えるわけにいかない。日常業務の中で絶えず関わってくる問題だからである。

この度『市民による地域経営と国際化』と題して、まちづくり実践の場が得られ、この報告書を作成するに至った。成長々々と右上りのグラフの時代から、ゆるやかな成長をコントロールする時代に入り、個々人のライフスタイル（暮らしぶり）をみつけるために役立てばと願いをこめて作成したものである。

また、生活のクォリティー（質）とアメニティー（快適性）を含んだ地域経営（まちづくり）にはいかなる考え方や、手法があるのだろうか。その今日的なとらえ方や、長期的、国際的な視野に立った方向性を踏まえての場に、この報告書を共有してもらえれば幸いである。

このシンポジウムに参加して下さった方々、当日こられなかった人々、また陰ながら企画に知恵して、汗して下さった方々に心より御礼を申し上げ、ごあいさつにかえさせていただきます。

ARCHITECT NETWORK　山梨県建築士会青年部長　久保田　要

はじめに

去る６月２８日に甲府市紫玉苑において「まちづくり国際シンポジウム」が盛況裡に開催されましたことはまことに喜びに堪えないところであります。

この催しは当会青年部が“市民としての建築士”という視点から、これまでの数々の提案活動から一歩踏み込んだ国際的視点の“まちづくり”を模索する機会として企画されたものであります。

パネラーとして都市計画の世界的権威ディビッド・マーメン氏、土地政策の専門家として著名な長谷川徳之輔氏等を招いてのシンポジウムは、地方都市の抱える諸問題に対して貴重な指針を与えられたものと思います。また、北村山梨大学助教授、早田建設経済研究所研究員、久保田青年部長による研究報告は“まちづくり”に対する考え方に有意義な示唆を与えるものでした。

山梨は今、大きな変貌を余儀なくされるような環境に置かれております。このシンポジウムが刺激となって、地域のビジョンを語り合う場が今後数多く持たれることを期待しております。

この企画を開催にこぎつけるまでの青年部諸君のご努力に対し、心より敬意を表すると共に、“まちづくり”に対するますますの活躍を期待しております。

終わりに、本企画に対して物心両面より多大なご協力を賜わりました県ご当局ならびにご協賛、ご後援を戴きました関係諸団体、諸機関に対し、衷心より感謝を申し上げ、ごあいさつといたします。

山梨県建築士会会長　梶 原　　政 夫

1) シンポジウムの記録

■司会（名取）
大変お待たせいたしました。
それでは、これからシンポジウムに入ります。

■司会（長田）
これより、社団法人山梨県建築士会青年部主催によります、まちづくり国際シンポジウムを『市民による地域経営と国際化』と題しまして行います。
司会は建築士会女性部の名取さん、青年部の長田で務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。
それでは、開会のあいさつを、建築士会青年部長の久保田よりさせていただきます。

■久保田
建築士会の久保田です。
本日はこの暑いなか月末にもかかわらず、私たちの催し物に参画していただきまして、誠にありがとうございます。私たち山梨県建築士会青年部一同、このように数多くの方々が集まられてとても感謝しております。今回に至りました経緯につきまして、軽く述べたいと思います。
私たち山梨県建築士会数々の活動の中で、今年１月下旬ニューヨークの研修に行きました折り、本日の主賓であります Ｍｒ．デービット・マーメンのＩＰＡ、ニューヨーク行政研究所へ訪問しまして、国際都市研究部長でありますマーメンさんと会話をして来ました。その会話の中で、都市問題および成長管理政策を中心に、東京に隣接する山梨について、これからどんなグランドデザインを考えたらいいか、そのような方向性を占うべく語り合う会に恵まれました。その折りに、山梨にぜひ来ていただきまして、現場をぜひ見ていただきまして、私たちの活動の力になっていただければ、ということの願いが本日実現した次第でございます。
これからの山梨の町づくりを国際的な視野で語り合う機会に、今回このような会を含めましてバネに、はかりたいと思います。市民と共に語り合う町づくり国際シンポジウムという位置付けで今回企画してまいりました。広く県民の皆様および商工会の若手の皆様方、および今回参画していただいています協賛および後援くださいました関係出版および諸団体の方々は、取り分け陰ながらバックアップしてくださった市民の皆様方、ジュエリー業界の皆様方に、厚く厚く感謝を述べたいと思います。
また、山梨県には、ふるさとづくり基金のバックアップをいただきまして、この基金を基に私たち勉強を重ねまして、一段の飛躍と市民と共に語り合うような会に向けていきたいと思います。
では、熱きディスカッションを期待しまして、私のあいさつに代えさせていただきます。どうか、皆様よろしくお願いいたします。

ディビット・マーメン●David Mammen
（ニューヨーク行政研究所国際都市研究部長）

1952年生まれ、ペンシルベニア大学都市地域学科卒業。

都市計画を専門とする同氏は、1986年、フルブライト研究員として、10ケ月間日本に滞在した。

1989年3月には数多くの来日経験を基に、研究報告書「世界都市東京の創造」を発表している。

ニューヨーク行政研究所は、「公共事業専門家日米交流計画」の米国側の窓口である。

■司会（長田）

それでは、これよりデビット・マーメンさんより、『成長管理政策とグランドデザイン』というテーマでお話していただきます。

デビット・マーメンさんは現在、公共事業専門家日米交流計画のアメリカ側の窓口であるニューヨーク行政研究所の国際都市研究部長という要職におられ、都市計画の専門家でいらっしゃいます。日本にも度々来日され、１９８９年には『世界都市東京の創造』という研究報告書を発表されていらっしゃいます。なお、通訳をしていただくのは、マーメンさんの通訳や翻訳をはじめ東京における窓口になっていらっしゃる佐藤綾子さんにお願いいたします。佐藤さんには、今回のシンポジウムの開催にあたりまして、建築士会青年部のためにいろいろとご努力をしていただきました。

それでは、マーメンさんよろしくお願いいたします。

■デビット・マーメン

皆様こんにちは。

本日はお招きにあずかりまして誠にありがとうございます。

実は、山梨に来たのは今回が２回目になります。数年前休暇をとり、河口湖のほうへ行ったことがありまして、その時に東京に近いところに、このように美しい自然が残っているところがあるということに感激しました。

そこで、今日のシンポジウムを通じて、今後の山梨の方向を考え、この豊かな自然・資源を保全しつつ、いかに発展を図っていくかを皆様と共に考えてまいりたいと思います。

まず、最初に皆様に実際に甲府というのはどこにあるのか、場所はどうなのかという、ちょっと馬鹿げているかもしれませんが、質問から始めさせていただきたいと思います。

と言いますのは、甲府は地理的に東京に近いということで、東京の外にありながら、東京の内側に段々組み込まれていく、そのような位置的な関係にあると思えるからです。ですから、これから話を進めていくにあたり、甲府ならびに山梨県と東京との関係、首都圏から見た甲府について考えていきたいと思います。

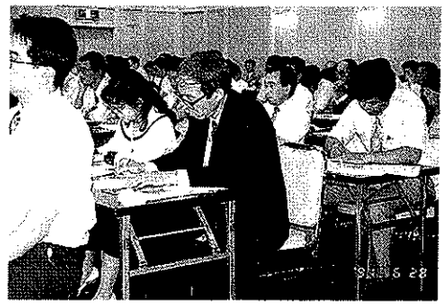
その東京の影響という点については、皆様の間でも非常に意見が分かれているのではないかと思います。理想的にはその東京の発展および成長から利益を受けつつ、山梨固有の様々な文化や自然を保ちながら、微妙なバランスをとっていくというのが一番望ましいことだと思います。

今回の私のスピーチにあたりましては、グランドデザインと成長管理という非常に大きなタイトルをつけていただきましたけれども、今日話しますのはそれほど大風呂敷を広げるといったものではなくて、よりささやかな観点からのお話となるかと思いますが、山梨についてはアウトサイダー、外から見た意見を申し上げたいと思いますし、またアメリカで今いろいろ行われている政策について、皆様のご参考になるものもご紹介したいと思います。

数年前、先ほどのご紹介にもありましたが、私は『世界都市東京』という研究報告書をまとめました。その中では主に都心、特に東京の都心の３区に焦点をあてて研究を進めましたが、ここで目をより東京の外縁部、外のほうに向けてみたいと思います。

アメリカでも大都市の外縁部、周辺部の発展、人口増は大きな問題となっております。最近発表された１９９０年度の国勢調査によりますと、ニューヨーク大都市圏の中の半分では人口の増加が１９８０年～９０年の１０年間にかけて２％であったのに対し、外側の部分では平均で１３％、また地域によっては５０％増という大幅な増加をみせており、都市計画上アメリカでもこれは大きな問題となっています。

来週ニューヨークに戻ったあとで、東京都の都市計画局の方々をお迎えして、マンハッタンから１００キロ圏でどのように都市化が進んでいるかについてお話し合いをする予定です。マンハッタンから１００キロ圏といいますと甲府と似たような状況にあるかと思いますが、そこでもオープンスペースをいかに確保しつつ開発を進めていくか、というのが大きな問題となっているわけです。



アメリカの様々の成長管理等についての例については、後ほど述べることにし、まず、山梨および甲府について、簡単ではありますが、いくつか印象を述べさせていただきたいと思います。

まず、山梨では大変革、大変換といったものへの広い期待がわきおこっているのではないかと思います。様々なビッグプロジェクトの中でも特に、最近決まりましたリニア計画について熱い視線が注がれているかと思います。ここでリニアの環境問題については、私は語る立場にはないかと思いますが、外から見ましたところ、皆さんはリニアの試験線で奇跡が起こることを期待しており、そして、これを本格稼動しまして東京と大阪を結び、あるいは名古屋を結ぶことになりま

すと、またさらなる奇跡が起こることを、何か皆さん期待をなさっているような、そんな印象を受けるわけです。

しかし、私の意見を申し上げるとするならば、これは短期的な、３年ないし４年の視点でなく、より長い視点、２０年、２５年の視点で考えてみられてはどうかと思うわけです。今後変化が起こるにしても、２５年位のスパンで徐々に変わっていく。その長いスパンの中でどのようなチャンスが県にとって、あるいは甲府にとってあり、そしてどのような問題が考えられるか、そういった視点が大事なのじゃないかと思います。

２つ目に申し上げたいことは、歴史的に見て、日本の都市計画に携わる方々というのは、とかく様々な問題を国家的な大プロジェクト、ナショナルプロジェクトと結びつけてお考えになる傾向があるのではないかということです。

数年前に、私は東京の丸の内の再開発計画について研究をしましたが、この小さな地域につきましても、やはり東京ならびに日本の国際化にとってぜひとも必要だから、といったことが強調される嫌いがありました。また、ここでのリニアについても、これは国家的なプロジェクトであると言われています。山梨の地元からの発想というよりも、日本全体にとって、あるいは日本が世界に門を開くために必要なのだという、ちょっと視点が高いところにあるような気がします。

ですから、私としましては、地元からの、もうちょっと低い視点から見ることが必要ではないかと思います。

山梨の問題について国家的な見地から語ると、本当の問題が隠されてしまう、そういった危険性があるのではないでしょうか。地元独自の発想といったものが摘み取られてしまう。それが国家的な問題とすりかわってしまう、そういった危険性もあるのではないかと思います。

ですから、皆様にしても、より地元から視点を捕らえて、より身近な、例えば東京からの影響はどうなるかとか、そうした視点にまず戻る必要があるのではないかと思います。

最後の第３番目のコメントとしましては、リニアは確かに諸刃の剣と言いますか、良い悪いの両面を備えているかと思います。リニアによって地方分権というものが可能になるかもしれません。

しかし、一方でこれはさらに集中を進めてしまうかもしれません。新幹線ができた時もそうでした。新幹線を造った人々の中には、地方の分権化が進む、地方の時代というものがやって来る、といった意見がありましたが、実際にはより東京に集中し、東京を巨大化する結果となってしまったわけです。

数年前にＯＥＣＤの調査団が日本の大都市について調査を行いましたが、その時も新幹線等を通じて、東京がより巨大になってしまったことが述べられております。

私は国土庁の役人の方々と、この点について議論したことがあります。新幹線によって分散化したか、集中化したかについての国土庁の方々の意見は、非常にお役人的にどちらでもない中立的なものだ、というものでありました。しかし、私はその点には非常に懐疑的です。

このリニアを使って東京に通勤する人々が増える。そして、甲府が東京の近郊のようにベッドタウン化をしてしまう、そういった危険性もあるのではないかと思うわけです。

さて、２５年後の甲府あるいは山梨はどうなっているでしょうか。甲府は、リニアを使った東京への通勤の玄関口となってしまっているのでしょうか。それとも、中規模の都市としての独自性を保ちつつ、また歴史的な遺産ですとか、自然といったものを持ち、そして東京から距離を保った都市となるのでしょうか。

現在の観光案内を見ますと、甲府は素晴らしい「山の町」と書かれております。しかし、それが２５年後にはリニアを通じての新宿への玄関口となってしまうかもしれません。この将来を決めるのは、今後数年の間のうちなのではないかと思います。

そして、このリニアあるいは東京の拡大から生じる問題およびチャンスと取り組むために、山梨県および山梨県の中にある市町村に必要なのが、成長管理政策ではないかと思われるわけです。この管理政策は、時間を掛けてじっくりと調査をし、市民の皆さんの間で議論をし、戦わせ、そして市民の皆さんからの協力を得てまた官民が協力する。そういったものでなければならないと思います。

アメリカでは現在都市計画の分野で静かな革命というものが進行中です。この成長管理政策は、華々しい宣伝はなかったわけですが、皆が気が付かない、知らないところで静かに進行しております。そして、アメリカのいくつかの州では非常に野心的な様々な手法や方法が試みられて、かなりの成果を挙げております。

ここで、山梨と非常に似た例として、アメリカの西北部のオレゴン州およびワシントン州について、簡単に述べさせていただきたいと思います。

この２つの州は経済的にも非常に山梨と似ておりまして、観光が大きな産業ですし、また、農業および天然資源、鉱物等、ワインをつくっている、ぶどうも栽培している、そういった面で非常に山梨と似ているところがあるかと思います。

特にオレゴン州は、この成長管理政策における先導的なリーダーとしての立場をとっております。ここでは開発を行いながら、様々な自然・資源を保つというユニークな試みが行われています。

昨日山梨のワインも試飲させていただきましたが、オレゴン州のよりもずっとおいしゅうございました。この点についてはもうちょっと調査をしなければならないと思いますが。

ここでオレゴン州の例について簡単に申し上げたいといいますのは、オレゴン州は最も成功した例として、ほかの全米の１０ないし１５の州のテストケース、モデルケースとされており、都市の成長が最もよく管理されているからです。

１９７０年代にオレゴン州の知事は都市化の問題に非常に懸念を抱きまして、まず最初に、成長の管理をしていくことが是非とも必要だということの市民への教育を始めました。都市化を何とか食止め、そして農地その他のオープンスペースを何とか保全していく、そういったことを市民に教育したわけです。そして、それらを保全していくことが、将来の経済にとってどのような影響があるかについても市民に説きました。そして、市民あるいは産業界の間で幅広いコンセンサスの形成が図られ、そして、成長管理のゴールが設定されたわけです。そして、

開発のゴールが設定されましたけれども、これは市民からも幅広い支持を得られ、皆がそれについて非常によく知っている、教育を受けているという状況でした。産業界も環境保護の団体も、またその他の市民もこれについて広く同意したわけです。細かな規制は、この大きな目標の元につくられました。

このオレゴンの計画の最大の特徴は、都市化が可能な地域の境界線を定めたことでした。将来にわたっても都市化は、この範囲内に抑えなければならない、そして、境界線の外については農業、林業のため、あるいはオープンスペース、レクリエーションのために保全しなければならない、そういったことが定められたわけです。

しかし、そうなりますと、都市化から取り残されてしまったその周辺部の土地の所有者は、開発によって利益が得られないということになってしまいます。そこで、法律が制定され、その周辺部の土地の所有者は、その使わない土地の開発の権利を都市化区域内にいる人々に売ることができるようになりました。つまり権利の移転が可能となり、開発によって利益を得ることができたわけです。

この開発権は、開発業者に売られたものもありますし、また州の政府が買い上げ、土地銀行に委託しておく、そういったことも行われました。それによって、周辺部の土地を持っている人々がその土地を保全しながら、開発利益を受け取るわけです。

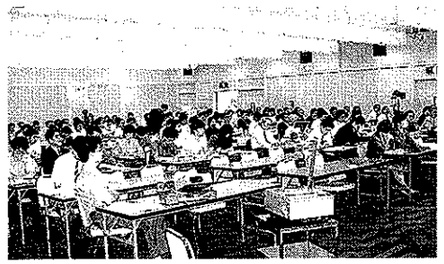
そして、開発が許される境界内においては、より高密度な開発が可能となりました。オレゴン州の最大の都市はポートランドですが、そこでは、市民、建築士、その他の関係の人々により委員会が形成され、新しいビルが建てられる場合あるいはビルが改修される場合は、その計画をこの委員会に提出して、そこでそのビルのデザイン等について検討します。それによって、町の景観を保っていこうといった試みがなされました。

オレゴン州には３６の郡および２５０の市がありまして、それぞれで毎日地元の土地利用について、こういった検討がなされているわけです。当然州政府は、これらを全て規制管理していくことはできません。しかし、先ほども申し上げました幅広いゴールとガイドラインが設定され、実際の土地利用は、全てその範囲内で各自治体によって運営されているのです。

また２番目の特徴として、皆さまも興味を持たれると思いますが、自治体それぞれの土地利用あるいは開発を監視するために、オレゴンの『千人の友』という団体が設立されました。実際には現在では会員は千人以上おりますが、これらの人々は実際の開発、土地利用等を監視して、ゴールおよびガイドラインと抵触するものがある業者による開発、あるいは自治体による開発を摘発して、これを市民に公表し、そのような開発をやめさせていく、そういったいわば監視の役割を果たしているわけです。この千人の友という団体は、全く独立の非営利の機関でして、初代の理事長はオレゴン州の知事、先ほども申し上げました成長管理政策を提唱した知事でありました。

時間もありませんので、このくらいにしたいと思いますが、皆さまも、例えば、このオレゴンでのこういった動きについてお知りになりたい場合には、私が直接いろいろな人をご紹介できるかと思います。特にこの千人の友という非営利団体については、皆様ぜひ研究なさってはいかがでしょうか。この千人の友というものが母体となりまして、ほかの州でも類似の機関がつくられておりますし、また、山梨でも「山梨の千人の友」といった団体を設立することも可能ではないかと思われます。

また、山梨県のアメリカでの姉妹州はアイオワ州ですが、アイオワ州ではそれほど都市化が進展してませんので、こういった成長管理政策というものは試みられていないと思います。しかし、アイオワ州の中国の姉妹州であります四川省の成都では、成長管理政策が実際に適用されておりまして、都市の膨張を防ごうという試みがなされております。と言いますのは、中国では非常に人口も多くて、周辺の農地は中国の多くの人々を養っていくのに非常に大事なわけです。ですから、境界線を設けて何とかその中で都市化を進めていこうという試みがなされておりますので、ぜひ皆様この方面についても研究なされてはいかがでしょうか。



また、最後になりましたが、山梨県でも今後都市の成長を管理して行く上での戦略を形成なさるといいと思います。戦略の策定にあたっては、様々な方面から研究および調査を皆様で行い、そして広く一般で議論をし、幅広い支持を集めて行く、そういったことが必要であるかと思われます。その意味で、このようなシンポジウムも、それに向けての有益な一歩となるのではないかと思います。

日本には『百聞は一見に如かず』という諺があります。これに基づき、成長管理政策を進めて行く上での２つの提案をしたいと思います。

まず、第１の提案としましては、県庁あるいは自治体の仕事に実際に携わっている方々、あるいは建築に携わっている方々、市民の方々でアメリカへの研修旅行をなさってはいかがでしょうか。アメリカの様々な都市を訪ね、そしてそこで現場の方々との交流を深める、意見を交換する、特にアメリカの大都市の周辺にある甲府と似たような都市を選んで、そこでの様々な経験といったものを聞く、そして山梨の経験といったものを向こうに伝える・・・。そういった試みはどうでしょうか。これはお金が必要なことですが、次の第２の提案はそれほどお金が必要でないものです。

第２の提案は、人が来る場合のことです。現在、ニューヨークの周辺のニューヨーク大都市圏は急速に膨張を続けておりまして、この地域を研究する地域計画協会（ＲＰＡ）という組織がニューヨークにあります。ここで今現在第三次の地域計画を今後５年にわたって策定していく予定ですが、その過程において、ＲＰＡはたまたま助成金を得て、日本へ研修といいますか見学に来ることができるようになりました。ですから甲府の皆様、ぜひこのＲＰＡの人々を甲府に招いて、ニューヨーク近郊でのいろいろな話を聞く、そして交流を深める、そういったことも可能ではないかと思います。

山梨の観光ガイドを見ますと、甲府の駅を出たところに武田信玄という山梨を代表する人物の銅像が立っております。武田信玄は甲府の発展のいわば原点とも、シンボルともされている人ですが、今後実際に甲府の将来を担う、甲府の成長および開発を担っていくのは、ここにおられる皆様であるわけです。ですから、皆さまの知恵と皆さまのいろいろなアイデアをもって、甲府および山梨を素晴らしいものにしていく、素晴らしいところにしていく、そして、世界都市東京との独自の関係を築くのです。素晴らしい地域にしていくのはひとえに皆さまの努力にかかっていると思います。

どうもありがとうございました。

「建設、不動産市場の国際化のなかでの
地元まちづくりのかかわりあいについて」

長谷川徳之輔●はせがわ とくのすけ
(財)建設経済研究所常務理事)

1936年、静岡県沼津市生まれ。東北大学法学部卒業。

社会工学を専門とする同氏は、昭和34年建設省入省以来、同省都市局、道路局、経済企画庁、阪神高速道路公団水資源開発公団、日本住宅公団などで調査企画を担当。昭和59年より(財)建設経済研究所主任調査員として、公共投資、住宅建設産業などの調査研究に従事。現在、同研究所常務理事である。名古屋大学工学部非常勤講師。

主な著書 「土地神話の崩壊」、「新聞にみる社会資本整備の歴史的変遷」、「東京の宅地形成史」

■司会（長田）

続きまして、長谷川徳之輔さんより、『建設不動産市場の国際化の中での地元町づくりのかかわりあいについて』と題しまして講演していただきます。

長谷川さんは建設省に入省されまして、調査企画を担当されました。現在は財団法人建設経済研究所常務理事をなされ、名古屋大学工学部の講師もされていらっしゃいます。最近では土地問題についてマスコミに登場されることも多く、皆様もよくご存知かと思います。『土地神話の崩壊』や『東京の宅地形成史』等多くの本をお書きになっていらっしゃいます。

それでは、先生お願いいたします。

■長谷川徳之輔

ご紹介いただきました長谷川と申します。

1．一に食い物、二に女、三よし四よし、五に自然

マーメンさんに続きまして、私のほうは少し軟らかめな話をさせていただきたいと思います。都市づくりにあたって、私の専門は建設とか不動産のマーケットの話でございますので、それを種にしながら少し町づくりについて軟らかめな話をさせていただきたいと思います。お手元にレジュメと２枚のグラフが用意してございますが、それでお話を申し上げます。

のっけから少し脱線して申し訳ないんですが、私はかねてから都市の魅力というのは、あるいは地域の魅力というのは何だろうかと考えておりましたが、端的に言うと、そこに書いてございますとおり、１に食い物、２に女、３なし、４なし、５に自然、こういうことじゃないかと思うんですね。我々が外国旅行をして何だと話す時に、必ずなにを食ったという話がまず第１に出ます。そういう意味では、私は物より人というか、この場合の女というのはちょっと妙な表現でございますが、これはどっちかと言うと、やはりその地域の文化とか感性とか、そういうものの集合体が食べ物だし、それから女性だろうと思うんです。そういう感性とか文化とかそういうものが結実した、実は地域性ということが、私は一番の都市の魅力だろうと思っています。自然も勿論あるでしょう。いろんな社会資本もあるでしょう。しかしベースは私は都市の魅力というのは物も大事ですが、人はもっと大事だという感じをもっております。

実は、先週私はスイスとイタリアに仕事で行っておりました。確かにスイスは素晴らしい景観がございましょうし、確かに素晴らしい場所だと思います。しかし、ホンデュ料理とかなんかあってもあんまりうまくないわけでありまして、それに比べるとイタリーというのは、景色はたいしたことはないし、人は多いし、余り魅力は乏しいように見えますが、実は、大変食い物はおいしいし、人も奇麗だという意味で、どちらがアトラクティブかということになりますと、私は精神構造からすると、スイスに１週間いたら飽きちゃうけどローマに１週間いるなら十分楽しめると、こういうふうな感じでございまして、同じことが、この日本で山梨はどうかというと、やはりスイスに近いんじゃないだろうかと。景色はいいけど食い物はほうとうだけだと、長野もそうでございまして、いろいろ話したけど、長野に行ってグルメを楽しもうというのは余りなくて、信州そばくらいしかないという話であります。

やはり、こういう山地では食べ物というのは、若干シンプルでございますが、イタリア的とは言いませんが、もうちょっと地域に大きくもって地域性というのは必要だと思いますが、あんまり小さな単位でもって、文化を固定化させてしまうとかというのもなんなんで。私は静岡の出身なんですけど、静岡と山梨が一つになれば山海の珍味というのがあるわけでございますので、山梨に行って寿司を食おうとか刺身を食おうと言っても一向に差し支えないわけでありますが、残念ながら、今はそういう状況になっていないということが、私は大変奇妙でございます。

そういう意味で、のっけから脱線して恐縮でありますが、都市の魅力というのに食べ物と女性を加えてほしいというふうに思います。それがイントロダクションでございます。

今日の私のテーマは、建設市場あるいは不動産市場の国際化という問題であります。この問題は、実はこの数年非常に大きな課題になってまいりました。今の日米経済摩擦においても重要なテーマになっております。この中には建築家の方々が大変いらっしゃいますが、かなり商売にも深刻な影響を将来与えてくるはずであります。建築市場も同様でございます。

そういう中で、なぜこういうになっているかということも少し見てみる必要があると思いますので、建設市場の大きさとか動きというものをざっと見ていただいて、その建設市場、不動産市場が国際化する場合に、どういう問題が生ずるかという点を少し考え、なおかつ最後に都市計画という、ちょっと話がずれちゃいますけど、都市計画について、という３つのお話をしたいと思います。

2．建設市場への動向

最初に市場の動向でございますが、お手元の資料のグラフをご覧いただきたいと思いますが、このグラフは円グラフで出ておりますが、これは日本とＥＣとア

メリカと、そのＥＣの中でもイギリスとフランスと西ドイツの建設市場というか、我々の商売の種になっているマーケットはどのくらい大きいかということを示しております。

１９９０年、去年、平成２年の数字を見ていただきますと、日本が真ん中でして、平成２年には日本の市場は８２兆８千億でございます。我々のマーケットは８２兆８千億。これに対してＥＣ１３カ国が集まって６千億ＥＣＵ、９６兆円になります。アメリカは１９９０年には４，３４９億ドルで、６１兆円ということであります。日本を１とするとＥＣが１．２倍位、アメリカは０．７５倍位で、アメリカのマーケットというのは日本の４分の３であります。イギリス・フランス・西ドイツに分けてみますと、これは１０兆円足らずということになれまして、日本のマーケットがいかに巨大かということを示しているはずであります。

人口１人当たりに直しましても、日本の人口は今１億２千万人です。アメリカが２億４千万人、ＥＣが３億２千万人ですから、これを人口で割りますと、日本の建設のマーケットというのは、１人当たり７０万円超えます。アメリカが２０万円、ＥＣが２５万円という数字なんです。

このことを見ても、国民１人当たりを見ても、日本はアメリカの市場の３倍位の投資をしているということであります。フロアーにおいては３倍の投資があるということですね。このことが実は日米建設摩擦、あるいはヨーロッパと日本の関係のベーシックな問題なんです。日本の経済力が非常に巨大に見えるんです。ただ、この問題の背景として、果たして我々はこれだけの量のものを造っているかということはまた問題である。例えば、オフィスのフロアースペースで見ると、あるいは道路の延長で見るとか、あるいは住宅の戸数で見た場合に、果たしてこれだけの量に差があるかというと、これは私は大変疑問でして、実は、このことは何を意味するかというと、日本の建設単価が非常に高いということを意味しているわけでなんです。

３．価格競争力の弱さ

国際化の問題の一番ポイントは、実はその背後にありますのは、日本の国際化で伴う一番の問題は価格の問題です。１戸の住宅を造るのに、今日本では１億円とか２億円とかという馬鹿な値段をとっております。ドイツに行けは数千万円で家が買えます。アメリカでもそんなもんですよ。そういう単価の差というのは、量にしますと、金額にしますとこういうふうな巨大なマーケットを造っている。巨大なマーケットがあるということは、ひるがえって見ると、実は日本の建設市場はかなり非効率だという話だと思います。そういうことは国際化の背景にあります。国際化をして来た場合に、最後に勝負になるのは値段であります。日本市場のクライアントは今のところ日本の国内のマーケットだけですから、建設業者、大手も中小も含めてこれだけの値段だということになれば、それで飲まざるを得ないわけですね。

しかし、これが国際的な市場になった場合に、もっと安くやりますと。例えば、韓国の業者が来て、同じ面積の建物を半分で造りますと、材料は韓国のものを使ってください。労働者も韓国のものを使ってくださいと、こういった時に一体どうなるかということが、実は一番の問題なんです。ここのところについてまだ我々は建設市場の開放、不動産市場の開放に伴う問題を余り理解してないんですね。その背後にはそういう問題がありますが、日本のマーケットが名目的にき

山梨まちづくり国際シンポジウム
――建設、不動産市場の国際化――

都市の魅力、１に食物、２にオンナ、３なし、４なし、５に自然、モノよりヒト
スイスの魅力、景色はいいが食物はマズイ、イタリーの魅力、景色は大したことはないが食物は美味い。スイスは、山梨、長野に近似、イタリアは、――――

１．国際建設市場の動向
・1990年　建設市場規模　日本86兆円、ＥＣ諸国96兆円、米国56兆円
　日本、公共事業主体（33%）、ＥＣ諸国、維持改良主体（33%）、米国住宅主体
・経済成長率と建設市場の伸び、ＥＣ諸国
　1990年まで　建設市場伸率＞経済成長率
　1991年から　建設市場伸率＜経済成長率
　米国、1985年から　建設市場伸率＜経済成長率
・1991年は転機、日本の建設市場、バブル経済の破綻、低金利、節税、低コストで急成長した民間非住宅部門（オフィスビル）の行方

２．建設市場の国際化とは、
・全くの国内市場、地域市場であった。やぶから棒の国際化、あわてふためいている状況。
・ＥＣ諸国、1992年の統合に当って、最大の難問の一つ、建築土木は各国の文化、社会体制そのもの。ロンドン、パリ、ローマの町並の差。
・人の国際化。建築化、技術者の交流、ライセンス、ステータスが異なる。教育体制、社会的機能が異なる。フランスの建築家は芸術者、イギリスのＱＳはビジネスマン。
・物の自由化。資機材の移動の自由。建築基準、技術コードの統一。スライディングドアとスゥイングドア、窓の大きさ、屋根の勾配全て文化自身、ＥＣ諸国、ヨーロッパ基準（基礎構造のみ）
・システム制度の統一。公共事業の入札制度実に多面的、各国の社会体制を反映、ヨーロッパでも、随意契約から一般競争入札まで多面的システム共存。
・日本の現状
　やぶから棒、混乱状況、米国の圧力、経済より政治問題化、システム制度に焦点、日米間で特例事業設定、参入の機会を与えること。文化、社会体制、技術、教育にまで及ぶことに気づいていない。日米間のみならず、日韓、日欧間、さらに外国人労働者問題につながる。

３．都市計画のあり方
・都市づくり、パトロンと都市計画家の独断と偏見の産物が評価、パリ、ワシントン。パトロン、中世は教会、近世は王様、今は団体組織、市民代表、内容より手続、数字でわかるものだけ、哲学思想欠落、ビジネスオリエンテッド。
・例、東京新都庁舎の評価、いいか悪いかでなく、好きか嫌いで評価すべきもの。大衆社会の特性、手続、コストばかりが論じられる。パトロンとしての知事の見識、芸術性の認識が問題。
・建築単位の日本、町全体の西欧、建築家の役割。市民の公共意識の差、制度、計画は守るもの。日本は、いかに脱法するか、うまくやるかを考える。専門家の見識の欠落。

（当日会場にて配布された資料）

わめて大きいというところに一番の原因がある、ということを理解したいただきたいと思います。

ただ、これは日本の建設市場の拡大もこのところフロック的な状況で成長しました。すでに、アメリカやヨーロッパでは９０年代の建設市場というのは、少しオーバービルディングのためにダウンしております。アメリカは今深刻な不動産不況であります。ニューヨークではビルを造っても人が入らないと。日本の企業は一生懸命ビルを買っても、みんなテナントが逃げていってしまうという状況でありまして、言ってみれば、ババぬきのババを引いている状況であります。

ヨーロッパでもイギリスでは、今年、来年あたり建設投資がマイナスに転じております。これもドックランド、その他の開発が進んでおりますが、やはり基本的にはオーバービルディングの状況であります。

我国も１９８５年、昭和６０年から皆さん方の仕事はウハウハであります。建築の注文は山ほどある。設計の注文も山ほどあると。これはウハウハの状況が続いてきました。しかし、これも非常に危うい基盤の上にあるわけでございます。言ってみれば、この間の経営利子、金利が安い。建築物が住むためのものではなくて、あるいは利用するためのものではなくて、財テクの手段に化して、さらに、低コストということがあったわけです。この３つが今消え去ろうとしておるわけでして、高金利、節税手段にならない住宅あるいはオフィス、さらに、この数年建築単価が２倍、３倍に上がってしまったという、そういうマーケットのファンダメンタルな条件をみると、私は９０年代にかなり難しい建設市場になるんではないかというふうに、ひそかに考えています。今年の３月の決算は、建設業は史上最高の増収増益でした。大手の

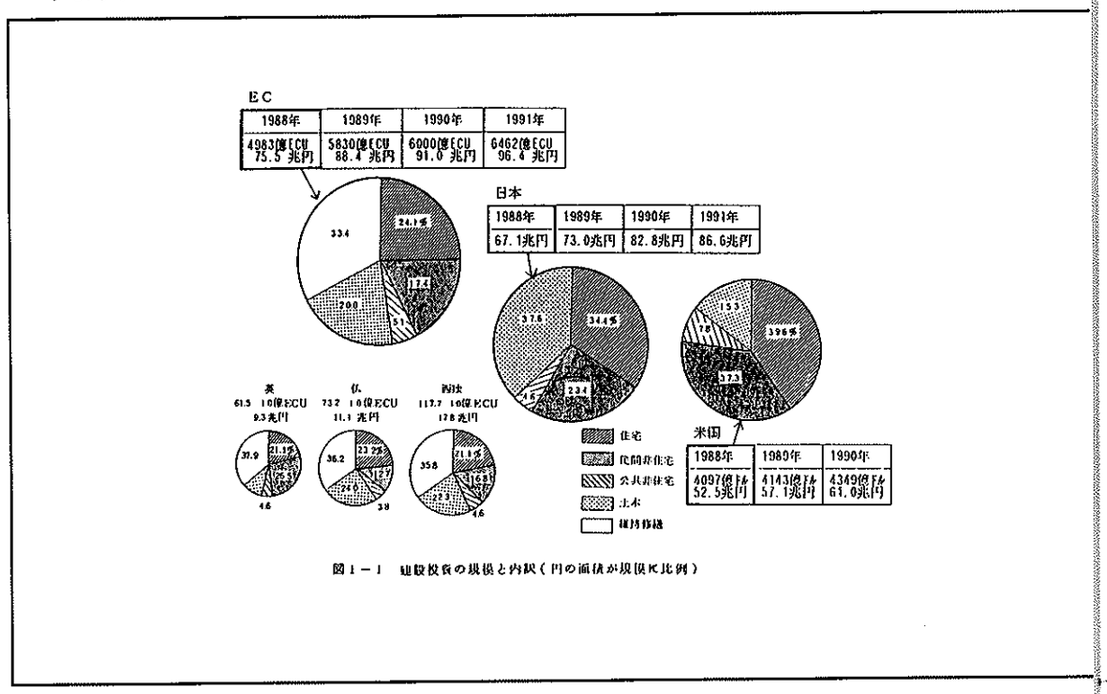


図１－１　建設投資の規模と内訳（円の面積が規模比例）

建設業では受注量で２兆円超えました。つい２、３年前に建設業１兆円時代と、こう言っておりましたが、あっという間に２兆円超えました。多分皆様方のローカルの会社でも、この数年で倍増したところも沢山ございますでしょう。

しかし、この成長がなお９０年代に安定的に続くかどうかということについて、やはりこの際もう少し考えておく必要が私はあろうかと思いますね。

４．転機の国際建設市場

何が建設市場を支えたかということについてみますと、本当の意味での実力、本当の意味の需用、本当の意味での我々の効率ライフを求めるそういう動機が、果たしてこの間の建設のマーケットを支えたかどうか。そういう動機がこれから続くかどうかということになると、私はかなり疑問を持っております。

そういう意味で、今後国際建設市場の転換期にもありますし、日本もちょっと遅れてアメリカの後を追い、ヨーロッパの後を追うんではないかと思っております。アメリカはすでに１９８５年からオーバービルディングの状況で不動産不況が深刻化しております。そこにお人好しの日本が行って一生懸命買ってやったわけでございますが、その後イギリスもフランスも成長が鈍化の過程にあります。そして、この２年先ヨーロッパではＥＣ統合もありましょうし、東西ヨーロッパの統合もありましょう。しかし、基本的にはヨーロッパの人口はもうすでにピークをすぎております。人口が減るということは、経済成長の一番大きなマイナスになるわけでありまして、ヨーロッパの建設市場で一番の問題は人口が減ることであります。特にドイツはそういう傾向が強い。それで東西ドイツの統一によって、マーケットとしての人口低下がマーケットに及ばないというか、そ

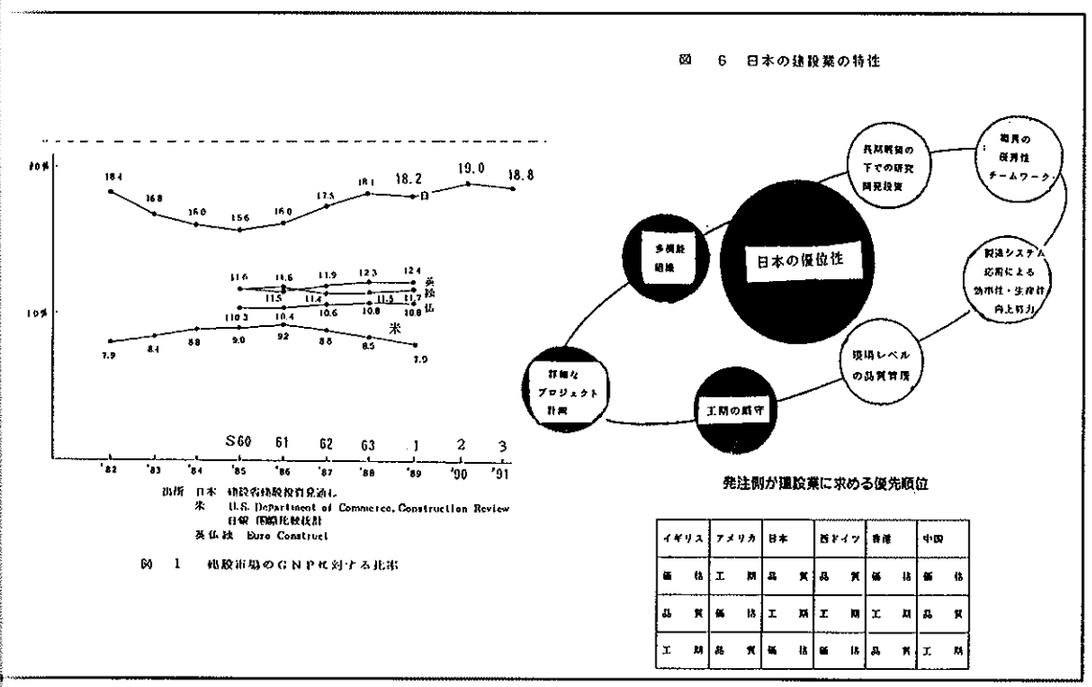


図　1　建設市場のＧＮＰに対する比率

（当日会場にて配布された資料）

ういう期待を実は西ドイツは持っているわけです。しかしながら、日本も１．５人しか産まないと、結婚しない女が３分の１、しても産まない女が３分の１、産んでも１．５人が3分の１と、こういう状況もそんなに先ではないでしょう。その後日本の建設市場のポテンシャルというのは、かなり問題になってくると思うんですね。

そういう意味で、９０年代私はあんまりウハウハの状況ではない。２１世紀にわたってもウハウハの状況ではないというふうに思っています。

そういう中で日本の建設市場が強大なものですから、アメリカもヨーロッパも韓国も日本をずっと見ていると。４３０兆の公共投資も何のために、勿論我々の効率的ライフということもあるでしょうけど、実は日本のマーケットの内需拡大政策にアメリカの経済政策が期待していると。アメリカだけじゃなくて韓国もそうです。それからヨーロッパもそうです。そういう状況にあるというふうにみなければいかんと思いますね。

５．国際化の意義、文化、社会の問題

２番目に、建設市場が国際化するということはどういうことか、ということを少しお考えいただきたいと思いますが、建設市場というのは従来全くの国内市場でした。これは山梨県は山梨県の設計事務所が設計して、山梨県が山梨県の業者に発注するというふうに、９割までが大体山梨の中でマーケットができておったでしょう。４６都道府県ほとんどそうです。ましてや、国内市場はきわめてリジュナルなマーケットでした。それが国際化するというんですから、本当に我々の意識は、薮から棒の注文でびっくりしたというのが正直なところでしょう。今でもこの問題の不動産とか建設市場の国際化の問題について議論しているのは、建設省のごく一部の連中だけです。ほとんどの人は俺には関係ないというように思っております。しかし、そうは行かないんだろうというのが私の考えですね。

実は、これはＥＣの統合でもアメリカの国内でも、建設市場の問題というのは、非常に大きな経済問題の一部なんですね。日本でも建設投資というのは、ＧＮＰの１９％です。ヨーロッパでも１２～１３％、アメリカでも９％くらいのマーケットを持っています。非常に大きなマーケットなんです。しかし、このマーケットがＥＣの場合、ヨーロッパの場合に１９９２年にＥＣの経済統合が進みます。その時に何が一番難しいかというと、１つは為替とか税制の問題がありますが、最も難しい問題の１つが、実は建設市場、土木とか建築の問題なんです。なぜかというと、土木とか建築というのは、考えてみますと、それは社会体制とか文化そのものなんです。これはビジネスというよりむしろ文化の問題なんです。例えば、ロンドンの町とパリの町とローマの町が町が違うということは、そこに支えている建築とか土木が独特の文化と独特の技術、テクノロジーをもって成立しているからです。ニューヨークとか東京はきわめてコスモポリタンで、無国籍な国になっちゃった。それは文化がミックスしていると。ニューヨークの場合には、それぞれの文化が同じ地域の中に共存するんですが、東京のように全部ミックスしてしまって、訳が分かんないベネチア風の窓にローマの風の屋根に何とか風の、というんで、実は無国籍な建物がどんどんできますが、ああいう状況になるかどうかという話だと。基本的には社会形成そのものですから、その国とその国の文化、社会体制、あるいはその建築土木に絶対の自信を持っているわけであります。それでなかなか融合ができないんですね。そこが一番難しいとこ

ろなんですよ。そこのところで、市場の国際化がなかなか進まないということです。

６．人の国際化

それで、市場の国際化を進めるには、まず人の国際化がいるんです。人の国際化というのは、例えば建築家とか土木技術者が交流しなければならない。イギリスの技術者がフランスへ行って仕事ができる。ドイツの設計事務所の人がイタリアに行って仕事ができると、こういう状況でなければいけませんね。

ところが、同じヨーロッパの中でも建築家はライセンスなりステイタスなり、教育によっても違うんです。社会的にも異なるんです。例えば、我々は日本では建築専門家を建築家とは余り言わないんですね、我々は。建築士と言いますけど。要するに、建築家という中には芸術家というニュアンスがあるんですね。だから、日本では非常に曖昧で、建築というのは芸術なんだろうか、ビジネスなんだろうかというと、どっちかというとビジネスの世界なんですね。ところが、フランスでは建築家というのは芸術家なんです。ビジネスマンではないんです。数も非常に少ないんです。これは必ず個人の仕事なんです。団体の仕事ではないんです。だから、いわば弁護士とか医者というのが個人の仕事であるというように建築家も個人の仕事だと。それが組織をつくって、会社に入って、インハウスで設計をするというのはルール違反なんですね。そういうものなんですよ。

ところが、イギリスでは今度逆に言えば、ＱＳという職業人、全くビジネスマンとしての建設技術者がいるわけです。これはゼネコンのマネージャー、要するにコストとかタイムとかを考えているんです。ところが、フランスの芸術家、建築家というのはクオリティーしか考えていないんです。コストとかタイムは関係ないんです。そういういろんな職域があるわけでして、これが一緒になろうというのだから大変なんです。ドイツはドイツで、テクノロジーの分野というのは完全なテクノロジー、技術者というかテクノロジーの分野で、これはアートの分野ではないんですね。こういうものを合わせようというのが一番問題なんです。

こういうトップの問題だけじゃなくて、実は、建設労働者の問題もございます。こういった問題も国際化の中では当然必然的に入ってくる。その建築家ということを１つとっても、数が違う。日本は１級建築士、２級建築士が７０万人近くいる。フランスには１万人足らずしかいない。アメリカにもアーキテクトというのは数万人しかいない。一方、アメリカには７０万弁護士がいる。しかし日本には１万人しか弁護士がいない。両方で交流して同じ近く認めあうということは非常に難しい。だから、今の状況では、経済市場が国際化して、日本からは建築士はお互いに建築家として認めあおうといった時には非常に有利なんですね。しかし絶対にフランスやアメリカはオーケーといわないですよ。それは社会的ステイタスなり社会的機能なりが違うからです。これを一緒にすることは非常に難しいということが理解できると思いますね。

7．モノの自由化、建築基準の問題

そして、物の自由化ということがあると思います。資器材が移動しちゃうわけです。しかしこれは大変また難しい。例えば、日本は建築では全部スライディングドアが主体で、スイングドアというのは数が少ないんです。ほとんどが玄関は横だし、押し入れも横だし、部屋と部屋も横ですね。ホテルに行っても横です。しかし、パリの町へ行ったら町は全てスイングドアです。スライディングドアという概念が非常に乏しいんだと思いますね。その中で、市場の開放をしましょうというのは、お互いに材料は行き来しましょうということですから、スイングドアとスライディングドアをお互いにこっちがいい、あっちがいいと言ったら、実は成り立たないんです。そういうこともあるし、壁の色だって、屋根の勾配だって、同じヨーロッパの中でスカンジナビア諸国とイタリアとは、それは違うでしょう。その時に同じ窓枠をお互いに移動しようとしたって無理な話です。そういうことが背後にあって、物の移動も自由にならないんです。

さらに、そこが一番最大なポイントだったんですが、ヨーロッパでもしょうがないということで、これは妥協の余地はないんですよ。それぞれの文化なり社会体制なりが背景ですから、窓を小さくすると言ったって、北側の人は窓はでかくなければ冬困ると言うし、南の人は窓をでかくすると言ったって夏暑いから窓は小さくなければ困ると言うんですね。それでは妥協のしようがない。そこで、ヨーロッパでは、実は、構造とか基礎とかというものについては、ヨーロッピアンスタンダードを造ってやっと妥協したんです。

さらに加えて、システムが違うんですね。例えば、指名競争入札制度というのは、日本では最大の問題になりつつあるですね。これも単なるシステムのビジネスチャンスの問題だけでなくて、社会体制の違いが背後にあるわけです。日本のように官僚国家とか、官民関係というのがあって、ある程度ハーモナイズしていますけど、官が強いという国の体制で、フランスもそうでしょう。しかしアメリカのように官はどうでもいいと、民間でうまく仕切って官は単なるセレモニーだけやっていろと、こういう国では競争の入札論も違う。アメリカはアメリカのやり方があります。勝負するのはピストルと金でこいと、後は法律のほうで契約でこいと。後がだめなら金とピストルだという国と、なあなあなあ、やあやあやあで話がつく国と、話が違うんですよね。そういう社会体制の違いというのは背後にあるわけです。これを一生懸命統一しなければならないわけですれから。建設市場の統一というのは、我々は単なるアメリカの企業が日本に入って来るだけだろうと、そしてビジネスチャンスを与えればそれで済むんじゃないかと、いまだに建設省の連中はそう思っているわけです。そうやって国同士が交渉しています。しかし、その背後にあるのは、実はもっと大事な社会体制とか、文化とか、芸術とか、そういったものが背後にあるわけです。それがパーソナリティーを持てば持つほど、実は建設市場のマーケットの国際にしにくいわけです。それがまさに文化なんです。

同じことが日本の地域内にもあるんで、山梨が文化を固執すれば固執するほど、市場の開放はできないわけですね。そういうものは、やはり国際問題だけでなく国内でも県域、市域間にありますね。地域の間に。そういうことが問題でしょうね。さらにこの問題はアメリカと日本だけじゃなくて、韓国と日本、ヨーロッパと日本、入り乱れた関係なわけですね。特にコストの面でいったら、日韓

問題というものはこれからの我々の仕事に影響してくると思いますね。安く造る、半分で造りますと言った時に、実は、日本のクライアントは、みんな韓国の業者に造ってもらおうと思います。もし半分できれば。ですから、高いものを造ってそれをクライアントに押し付けるということが国際化が、国際化が進むとできなくなるわけです。それが一番の国際化の問題だというくらいに、私は理解しておりますし、皆さん方も国際化建設市場とか不動産のマーケットが国際化すると、山梨県には関係ないだろう、およそそう思っていますが、実はそうではないんです。その背後にある社会体制とか建築の基準、ビルディング構造の問題とか、あらゆるものがこれから国際化の波にさらされるわけです。日本の伝統的なものを保持することができるかどうか。そういうことが実は大きな問題です。

明治維新の時も、実は日本は大チェンジしました。だから、建築なんていうのはすっかりチェンジしてしまって、着るものも全部違っちゃって、日本人は対応力は非常にあるわけですが、これからも対応力からすれば何て言うことはないと思いますが、やはり、１００年間できた日本の社会構造というか、これがどうやって外国に合わせていくかというところが、実は問題だと私はお思います。

8．独断の都市づくりがベスト、パトロンの存在

以上が国際化の問題ですが、都市計画については、私は都市計画、都市づくりというのは、もともと独裁国家が一番良いと思っているんですね。所詮はパトロンと都市計画家の独断と偏見で造った町が一番評価が高いわけです。パリしかり、ワシントンにしかり、それぞれ我々が良い町だとか、素晴らしい町だというのは、大体パトロンがいて、もう１つプランナーがいて、その２人の独裁と偏見で造った国です。皆が相談して造った国ではありません。

そういう意味では、建築とか土木、都市計画というのは、ずっとパトロンがいたせいだと思うんですよ。中世には教会がパトロンだったんですね。近世は王様がパトロンだったですよ。そのパトロンたる王様と建築家がつくった町がパリ、ナポレオン三世とオースマンが造った町がパリですよ。クリストフォアーレンとジェイムス何世かが造った町がロンドンですよ。

ところが、我々の今の組織というのは、実はパトロンがいない、パトロンは非常にはっきりしない、いわば市役所とか市民とかという、そういうことなんですね。そういう大衆社会になると、都市計画はどういう内容の都市計画をつくるよりも、どういう手続きでやろうかとか、あるいは容積率とか建蔽率とか、数字で分かるものだけが法定される、そういう都市計画になると思う。これは、いわば共通のコンセプトができますから、しかし、本当の意味での町づくりということには、私はなかなかできない。哲学の思想というのは段々欠落して効率性だけが残るわけになります。そうすると、使いかってはいいけど、あるいはビジネスオリエントでいいけど、何となく味気ない、ワンパターンの町ができると思うんですね。それは私は仕方がないというふうに思うんです、いまさら中世、近世の時代に戻してパトロンにやってもらうわけにはいかない。

しかし、自治体というのは、基本的には精神構造としてはパトロンの精神が残っているべきだと思う。実は、日本人の大変面白いところで、今年ですか、新都庁舎というのができました。地方へ行くと、最近の東京の名所というのは、ディズニーランドと都庁舎なんだそうで

すよ。地方から来てどこに行きたいというと、ディズニーランドに行きたい。２番目には新都庁舎に行きたいと。そういうことで、つい数年前間では東京タワーと国会議事堂だったんでしょうけど、今やすっかり変わって、ディズニーランドに行きたい、都庁に行きたい。そのくらい名称になっているわけです。

この新都庁舎の評価ということについて、我々は大衆社会の中では、良いか、悪いかという議論しかしていないですね。その良いか、悪いかということは、発注手続きがどうだとか　税金を使ってコストが高すぎるだとか、そういう議論しかおよそしないんです。

しかし、本当は私は、そういう議論のほかに好きか嫌いかという、そういう議論がいるんですよ。感性の議論が。ところが、感性の議論というのがこういう大衆社会ではすっかり消えてしまって、いわば手続きとか、数字で表われたものしか議論しない。都市づくりとか都市計画というのは、勿論数字というのは非常に大事だと思うんですね。手続きも大事だと思うんです。同時に感性というか、文化性というか、そういったものを忘却してはいけないです。

ところが、日本はそれをすっかり、今の体制では忘却している。大衆社会だから、そういう分からないことはだめ。しかし、その分からないことをもっているのは、都道府県知事であるし、市長さんだと。言ってみれば、市長さんとか知事さんというのは、現在のいわば中世の教会の法王であるし、あるいは近世の王様だと思うんです。問題されるべきは、その王様たちのパトロンの感性とか、芸術性とか、そういったものが大事なんです。そういう点を私たちは忘れてしまっているんじゃないかという感じが特にします。多分、千人委員会を作っても、私は平均的なものしかできないと思いますね。決して突出したものはできないと思います。しかし、それはそれで仕方がないと思いますね。しかし、だから１点くらい、都庁くらい、ミレーの美術館くらいはそういうふうに造ってみろというんですよ。だから、ほとんど９割は平均的なものでいいんですよ。しかし、１点くらい必要なのは感性の問題だし、その感性の問題をうまくやったから、山梨のミレーの博物館はそれなりに評価を受けたんですよ。平均的ではなかったために。平均的でなかったものが、なんだあんなものというのが、１０年経つと良くやったという話になるんだと思いますね。そういうものだと私は思います。

９．ブロック単位の町づくり

最後に、私は本日プロの皆さんが多いわけでございますから、一つ申し上げたいのは、日本の都市計画というのは、建築単体の問題しかやりません。ブロックでものを造るということはしません。土地が小さく分けたら小さく分けたように造ります。鉛筆ビルほど典型です。クライアントに従って、クライアントの利害だけで造ります。建築家がそれを進めます。建築家というのは、同時に町全体を考えているから、ブロックでものを考えるという人がいるんです。日本の町と外国の町の違いは、結局ブロックでできている町か、自分の敷地でできている町かの違いなんです。日本の風景というのは、完全に間口は違うわ、奥行は違うわ、それぞれ皆違った町なんです。それは結局クライアントと建築家が自分のためだけでしか町を使ってないということだと。ブロックで造る概念を失っていることだと思うんですね。

これは、町が永久にシャックの町であることが逃れない、日本の町が貧しいと思う一つの大きな原因です。それは建築家の責任だと思うんですね。

もう１つは、市民の公共意識のためですね。本来制度とか計画というのは守るべきものなんですね。守るのは当然のことなんですよ。そういうことを前提にやれば都市計画は成り立たなかった。ところが、日本は建築プロたちがいかにしてそれを守らないかということを教えるんですよ。税理士はいかに脱税するか教えるし、弁護士はいかにいい加減に訴訟をするか教えるし、建築家はいかに建築基準法を守らないかということを教えるし、その抜け道を教えるんですよ。プロの倫理性だとか論理性が欠落しているところに、実は日本の都市のマイナス面があると、私は兼ねて思っておりました。地価が上がるのも銀行員とか税理士というプロが節税という名の脱税を教えるからなんですよ。町が乱雑になるのを建築家たちが本来の建築基準というものがありながら、それをどうやって逃げるかということだけを、実はビジネスするからですね。非常に正直にいってみますと、そういうとこが日本の都市をだめにする原因であろうと思うわけですね。

あるいは、日本の地価問題を惹起する原因でもある。そういうように、日本人の持っているセコさというか、それをこの際脱却しないと、２１世紀の土地づくりはできないんじゃないかというのが、私の結論であります。

以上です。

■司会（長田）

北村眞一さんは、山梨大学工学部土木環境工学科の助教授でいらっしゃいまして、専門は環境工学でございます。県の景観審議会の委員等を務めておられます。

早田俊広さんは、建設省に入られた後、経済協力開発機構ＯＥＣＤに出向されました。現在は長谷川さんと同じ建設経済研究所に出向されていらっしゃいまして、主に都市政策や公共投資政策の国際比較を担当され、『社会資本の最盛』等の論文を発表されていらっしゃいます。

それから、建築士会青年部長の久保田要でございます。現在県の景観審議会委員やまちづくりアドバイザーとして専門家の立場から活動しております。

コーディネーターは一市民という立場から、美術家の高橋辰雄さんにお願いをいたしました。環境芸術ワークショップの代表として活躍されていらっしゃいまして、東京や山梨を中心に作品を発表されていらっしゃいます。８８年の夏、太田町において建築士会青年部と共に住民参加の野外イベントを行いました。

それでは、高橋さんにこれからの進行をお願いいたしたいと思います。よろしくお願いいたします。

■高橋

コーディネーター役の高橋です。よろしくお願いいたします。

前半の基調講演を受けまして、これから研究報告を３例、続けて発表していただき、それから、パネルディスカッションに移りたいと思います。トータルで約２時間ほどの予定になっております。

それでは、まず最初に、山梨大学助教授の北村眞一さんから、『甲府の都市形成史』をご報告していただきます。お願いいたします。

北村真一●きたむら しんいち
(山梨大学工学部助教授)

1950年、東京都生まれ。東京工業大学大学院卒業。
同大助手を経て現在、山梨大学工学部土木環境工学科助教授。
専門は景観工学。県景観審議会の委員などを務める。

■北村

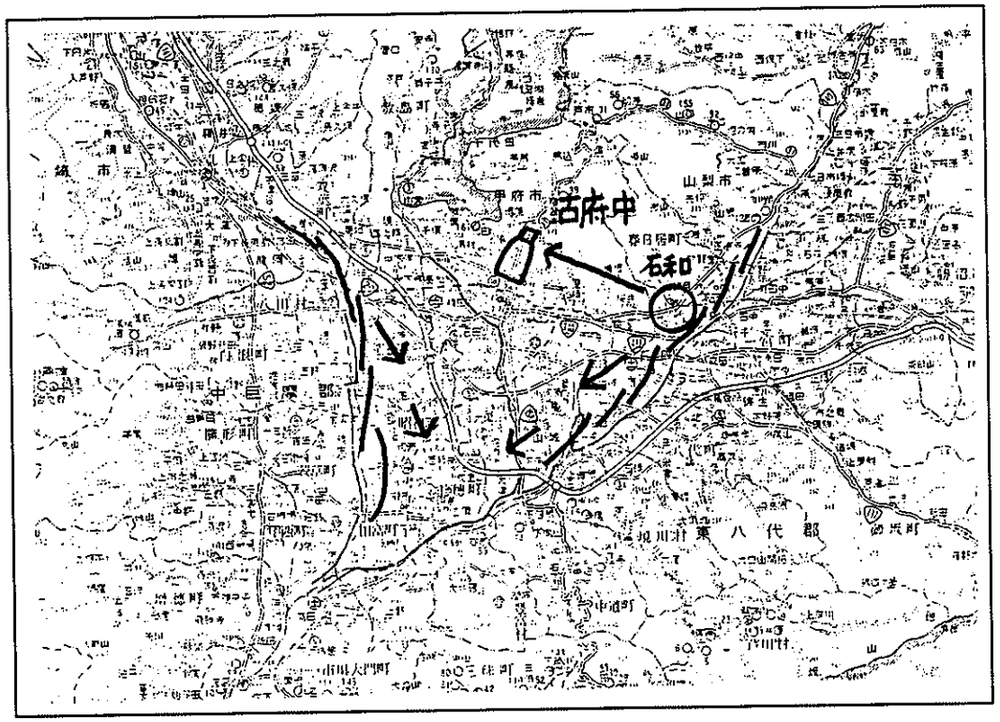
ただいまご紹介いただきました北村でございます。

具体的にオーバーヘッドプロジェクターを使いましてご紹介させていただきたいと思います。

甲府の都市形成は主に４つの期間でなされてきたと思います。

武田信玄の時代では信虎が、石和の笛吹川の水害の常襲地帯に居をかまえていましたが、石和は水害でやられ、石和から古府中へ都市を移したのが甲府の市街地の始まりです。

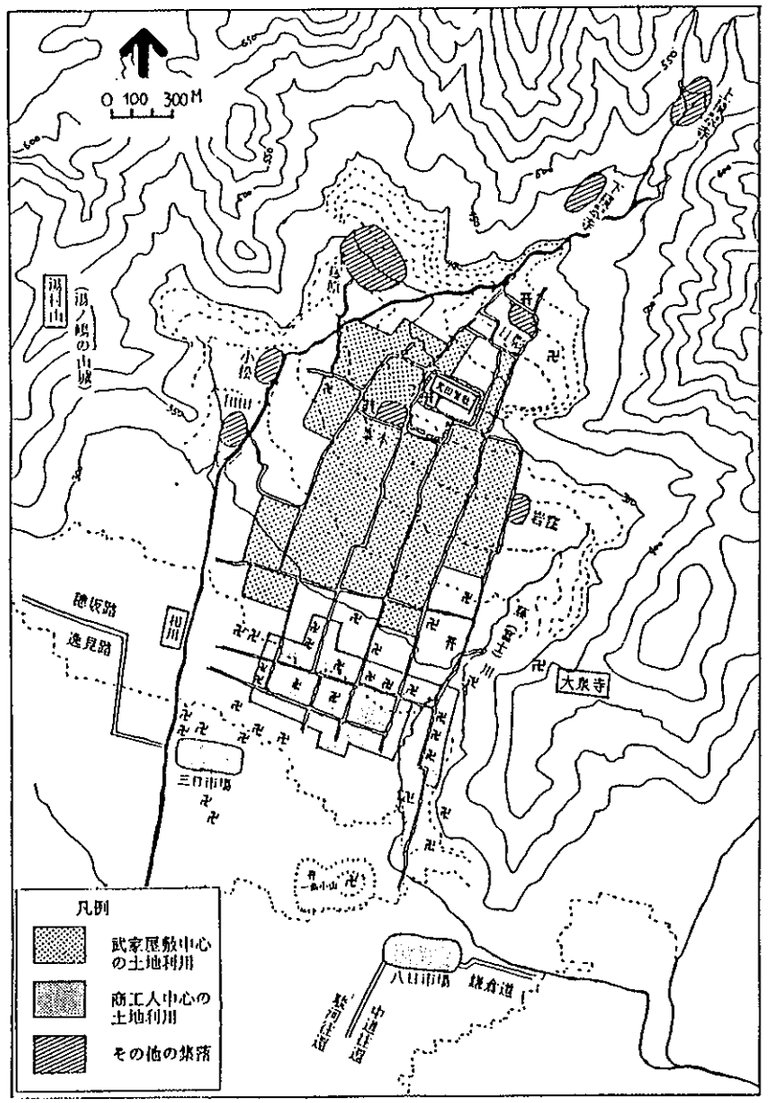
そして、重要な問題は、甲府盆地全体をどのように開発していくかです。水害から盆地を守るということからの地域経営がスタートします。まず、安全な場所へ都市を移します。



石和から古府中へ信虎が都を移す

そして、武田屋敷を中心にして、武士の住い、商工業関係、寺院を配置して、相川の扇状地の奥につくられます。周りが山に囲まれたところです。

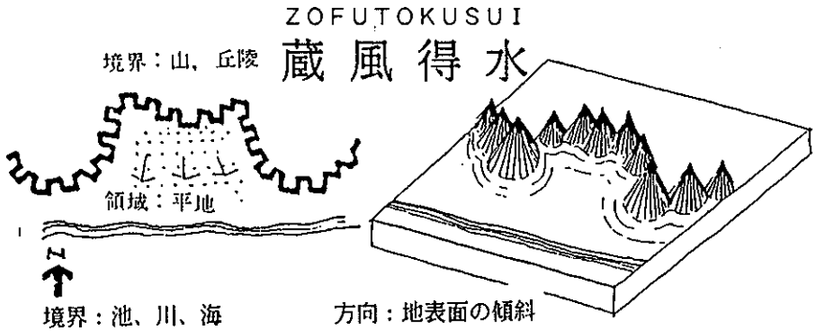
この図面は、飯沼賢司さんという方が、古府中の絵図等を基に復元されたものを基に作成されました。



武田時代の古府中の土地利用と街路網
飯沼賢司、戦国時代の都市“甲府”、甲府市史研究第２号、１９８５にもとづき復元図に寺社、等高線を加えて作成した。

そして、この都市のつくられる原理は、新潟大学の樋口先生は「蔵風得水」と呼んでいます。川や水辺でこの土地（地中）にあります気（生気）が散らないようなところ、そしてさらに風で散らない

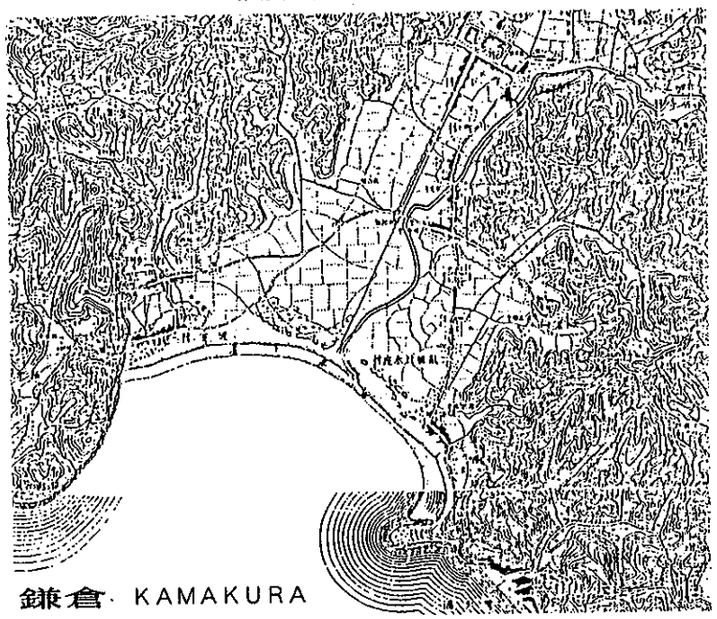
ような山で囲まれたところ、そういうところを理想の地とする、いわゆる風水思想に基づいています。鎌倉が同じ時代の代表的な都市ですが、おそらく、ここに習ってつくられたと考えられます。



方位を青竜（東）、朱雀（南）、白虎（西）、玄武（北）の四方にわけ、山川堂宇などはこれらの動物をあらわすとする。

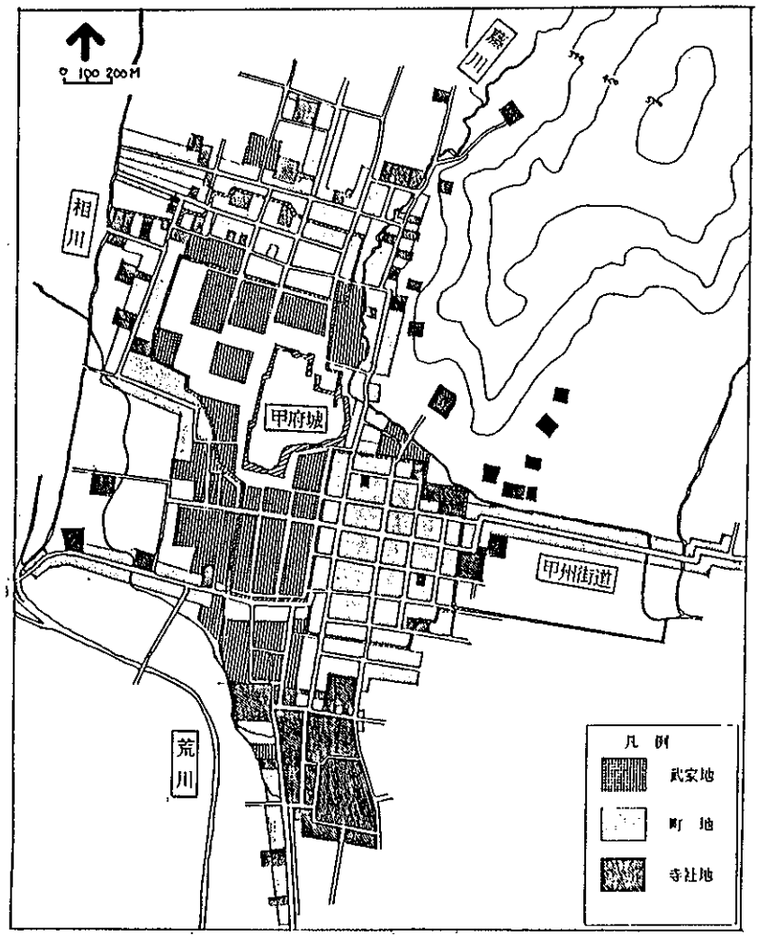
「地中に流通する正気が水によって限られ風によって散らぬ場所」「風を蔵し水を得る」地とは、どのような土地の形勢、

（出典：樋口忠彦、景観の構造、技報堂、１９７５）



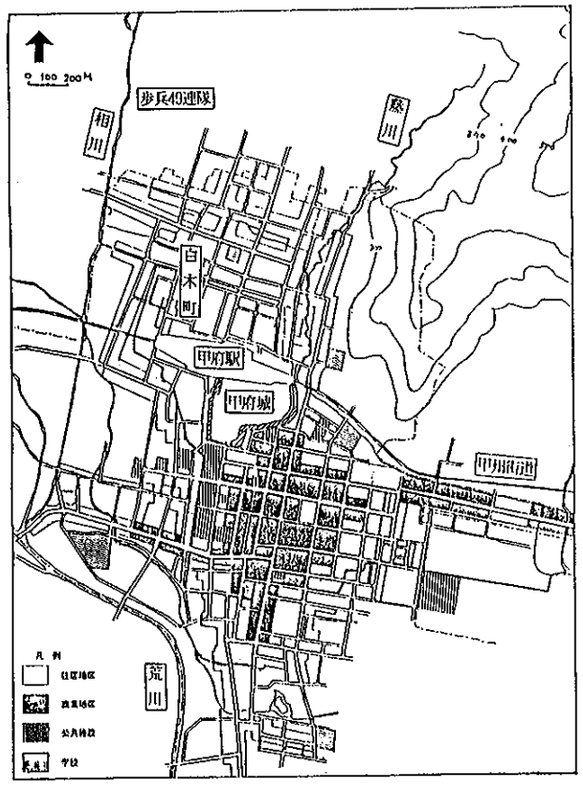
その後、武田軍が戦いに負けまして江戸時代になります。江戸時代は武田時代の商工業の町を取り込んで、新たに商工業の町と武士の町をつくります。そしてお城を中央につくるわけです。この時点で商工業地域の街路の骨格ができ上がりまして、現在も中心部はこのままの状態です。多くの甲府の街路の基本的なパターンはこの時代に形成されています。

人口が武田時代の時はおよそ３千人でしたが、江戸時代でおよそ１万３千～４千人に人口が増えていきます。



江戸時代の甲府
元禄三年甲府絵図（坂田家蔵）と手塚寿男、元禄期の甲府町人にもとづく土地利用状況を加え、現代の地図をベースに復元した。

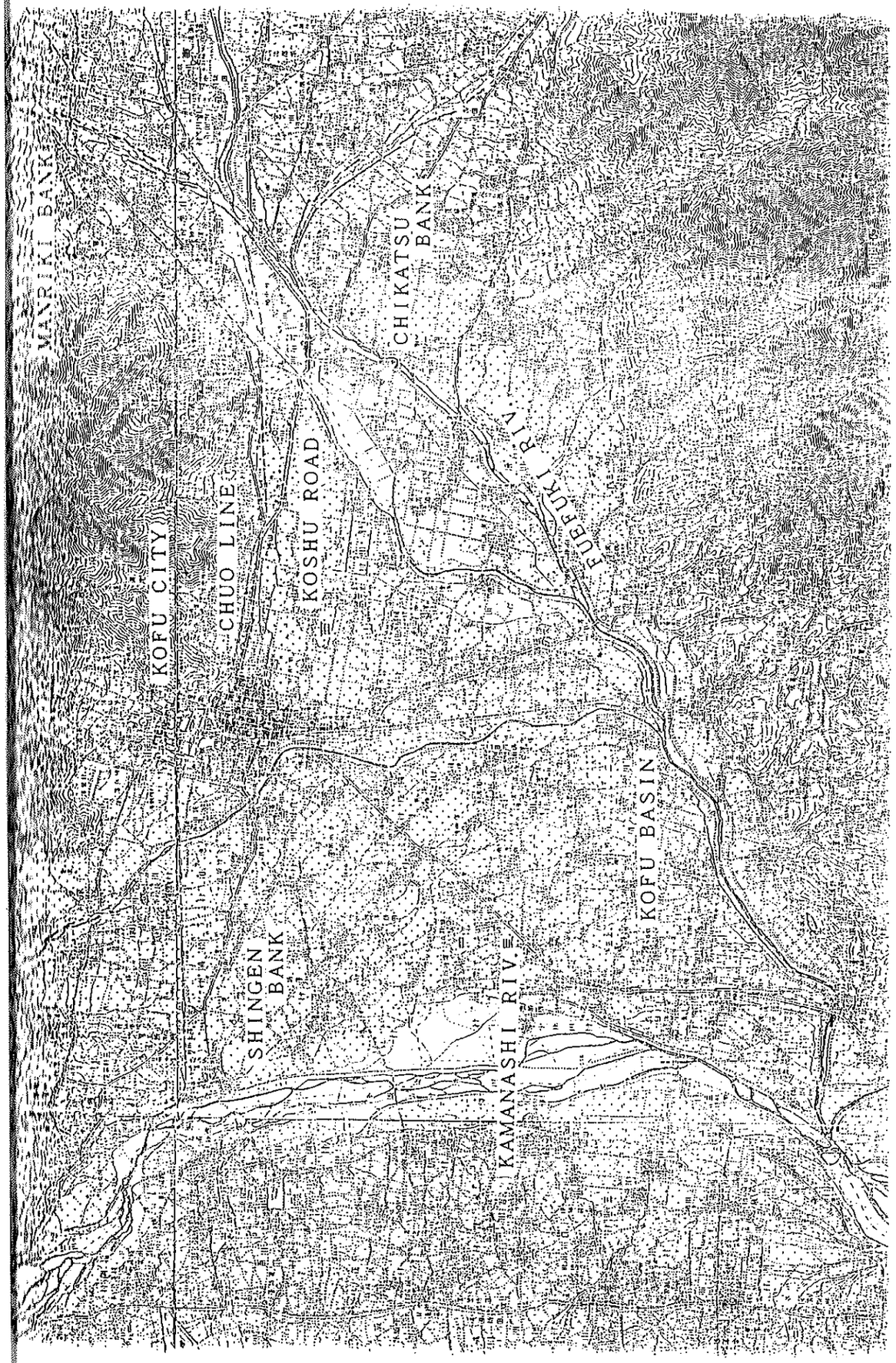
そして、江戸幕府がほろび明治時代になりますが、お城はつぶされて、商工業の町はそのまま残ります。そして、武士の住いであったところは官庁街、業務街に変わり、そして中央本線が明治３６年にでき上がります。



明治時代の甲府
明治３７年甲府市全図と斉藤康彦、明治中後期における甲府の商業構造により商業地域を定めた。

その後しばらくは特に大きな発展はございません。人口が数万ずつ増えていっております。明治の頃の甲府盆地の地図です。甲府の町そのものは、盆地全体から見ると非常に小さく、盆地全体にはまだ余裕があります。そして甲州街道や、駿州街道など、甲府へ向かって道路が集中していく。

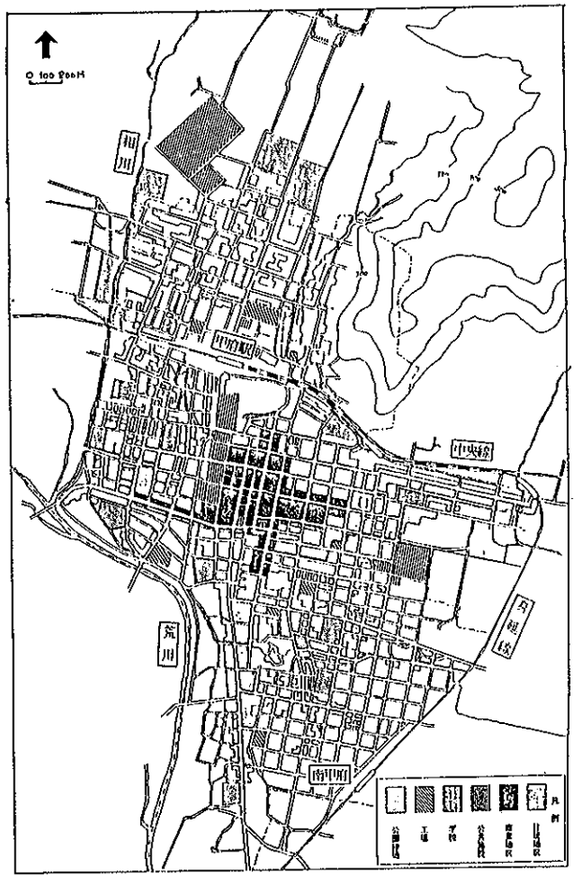
これちょっとローマ字で書いてあって読みにくいかもしれませんが、国際シンポジウムだということで、ローマ字を使って書かせていただきました。



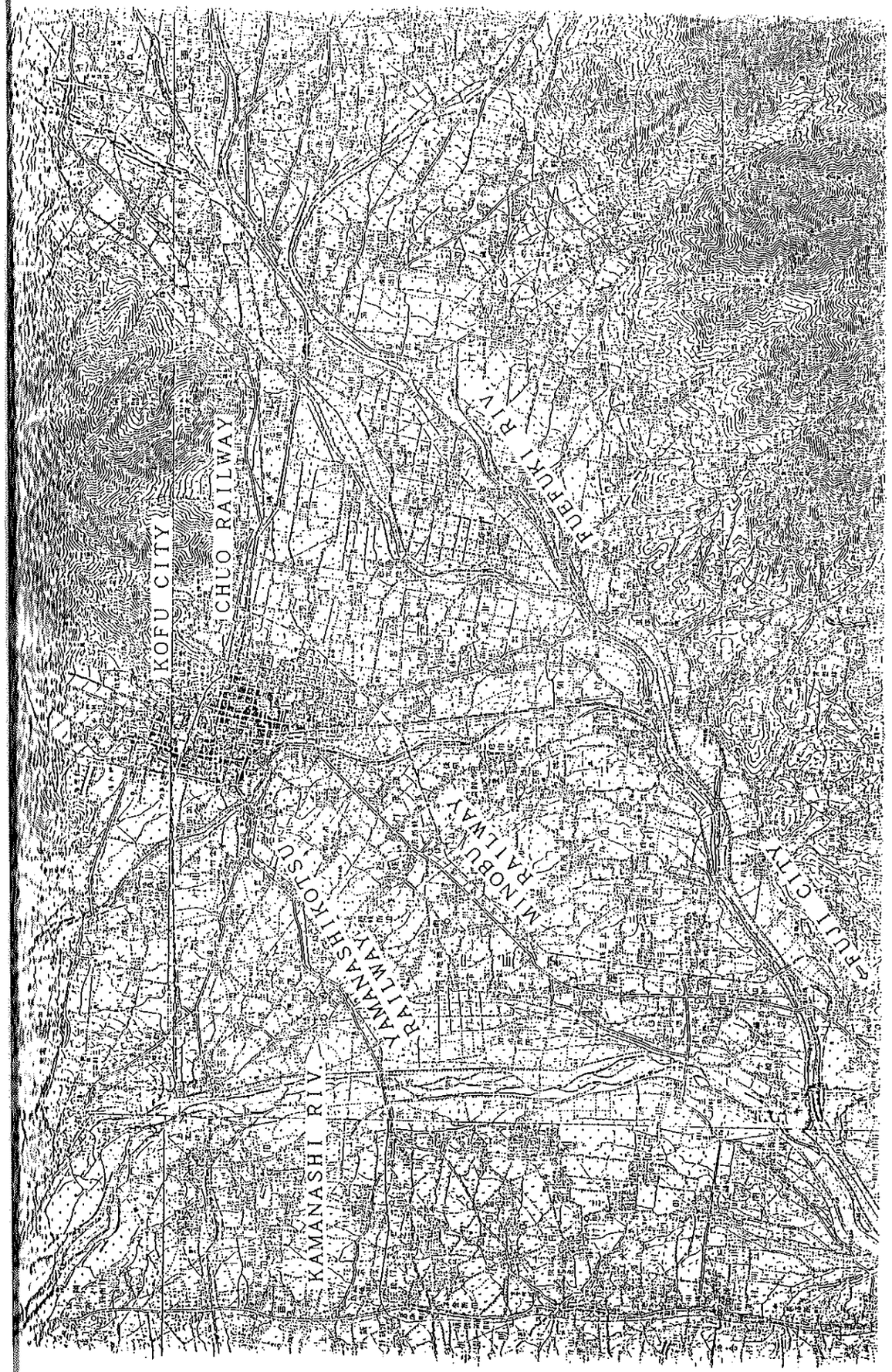
1910 M43

そして、昭和初期です。戦前の状態で明治と大きい変化はありません。商業地域はそのままで、周辺部において少し市街地が広がってきています。南部に耕地整理が行われて、新しく市街化を図ろうという民間の動きがありました。この段階でも相変わらず甲府盆地の中では甲府は非常に小さい位置を占めております。

そして、身延線が開通して、南からの流通がウエイトを高めてきますし、山梨交通の鉄道ができます。重要な盆地の治水対策は徐々に整備されていきまして、明治の頃は大きな水害がありましたが、これ以降は大きな水害がなくなってきました。この盆地全体の安全性が高まってきています。

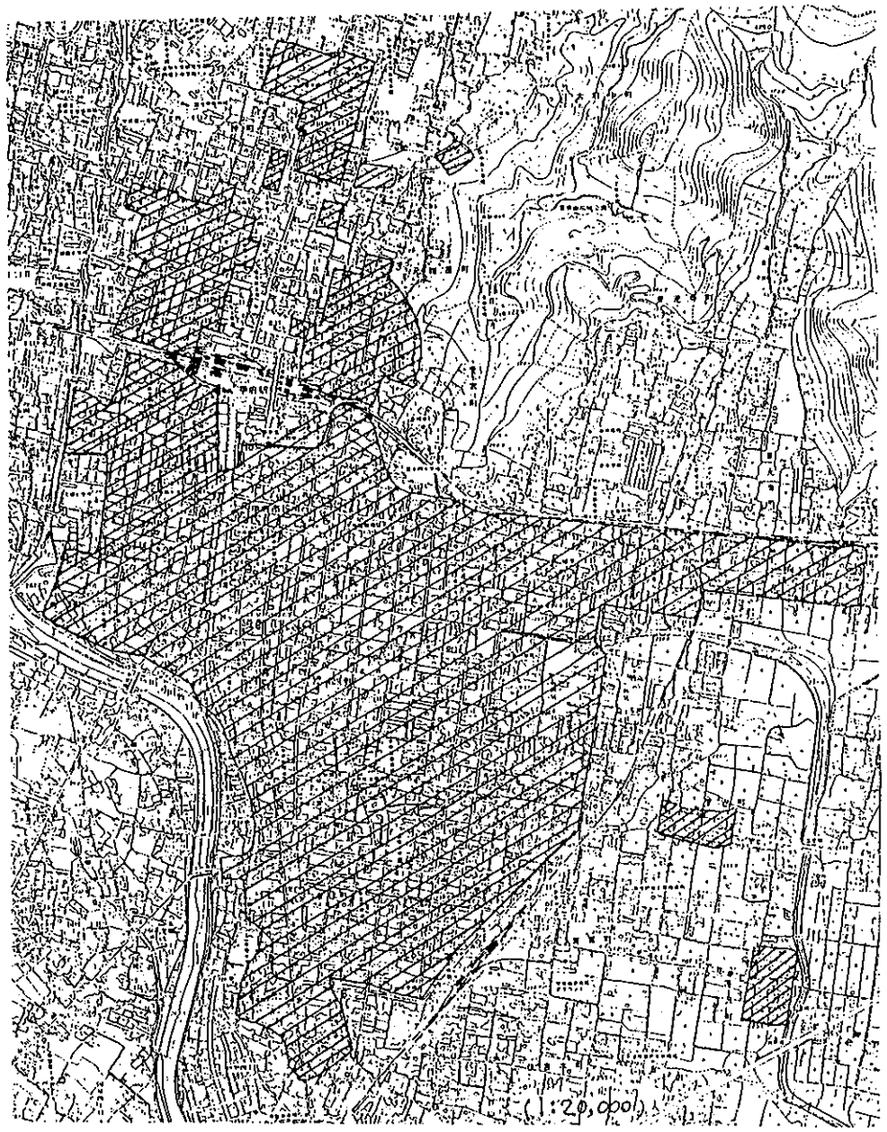


昭和初期の甲府（１９３０年頃）
昭和４年の「５万分の１地形図」と昭和１０年の「甲府市全図」により都市形態を、商業は佐藤八郎「甲府市の都市的形体と都市発展の方向」山梨県総合研究、１９７８によった。

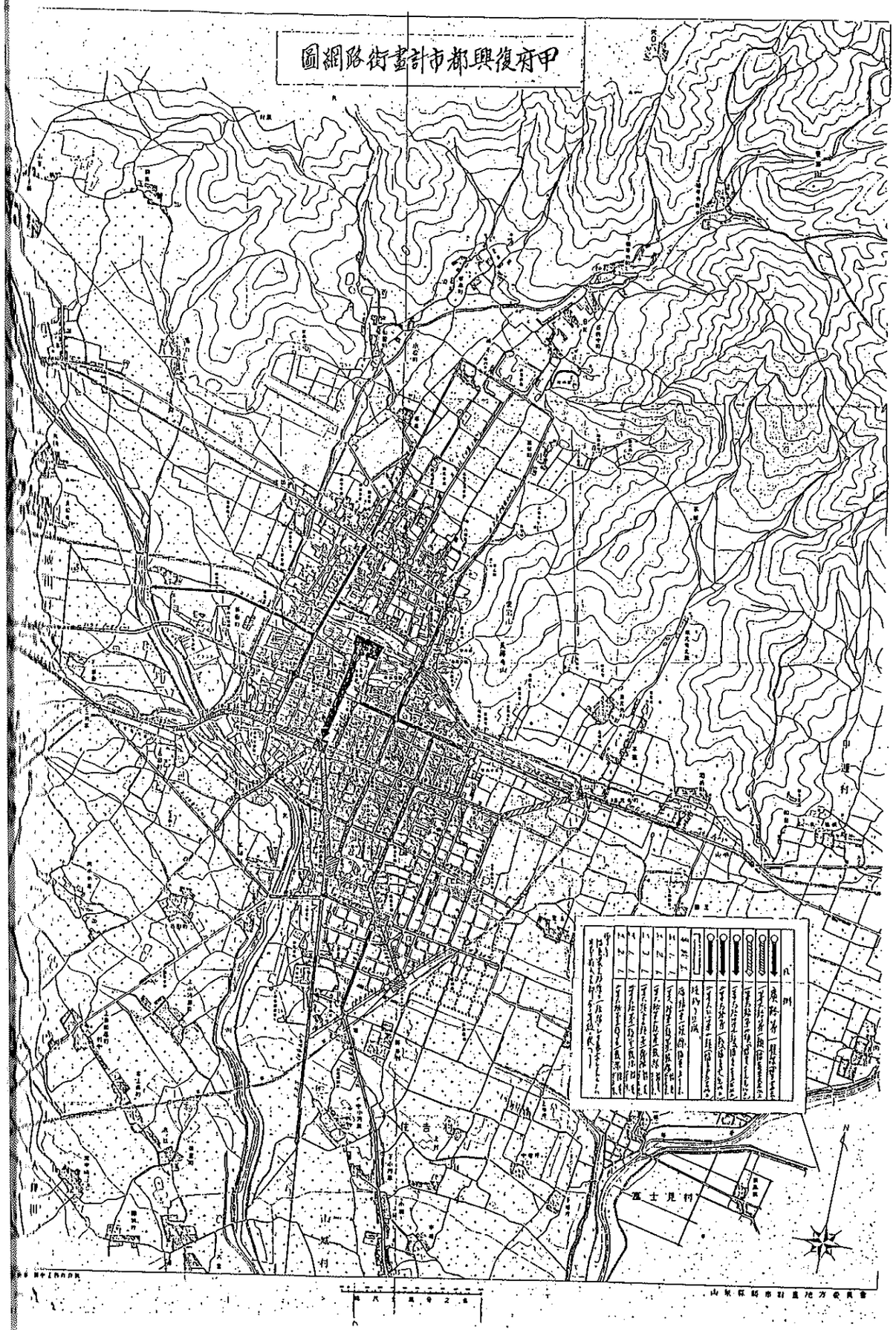


1929 S4

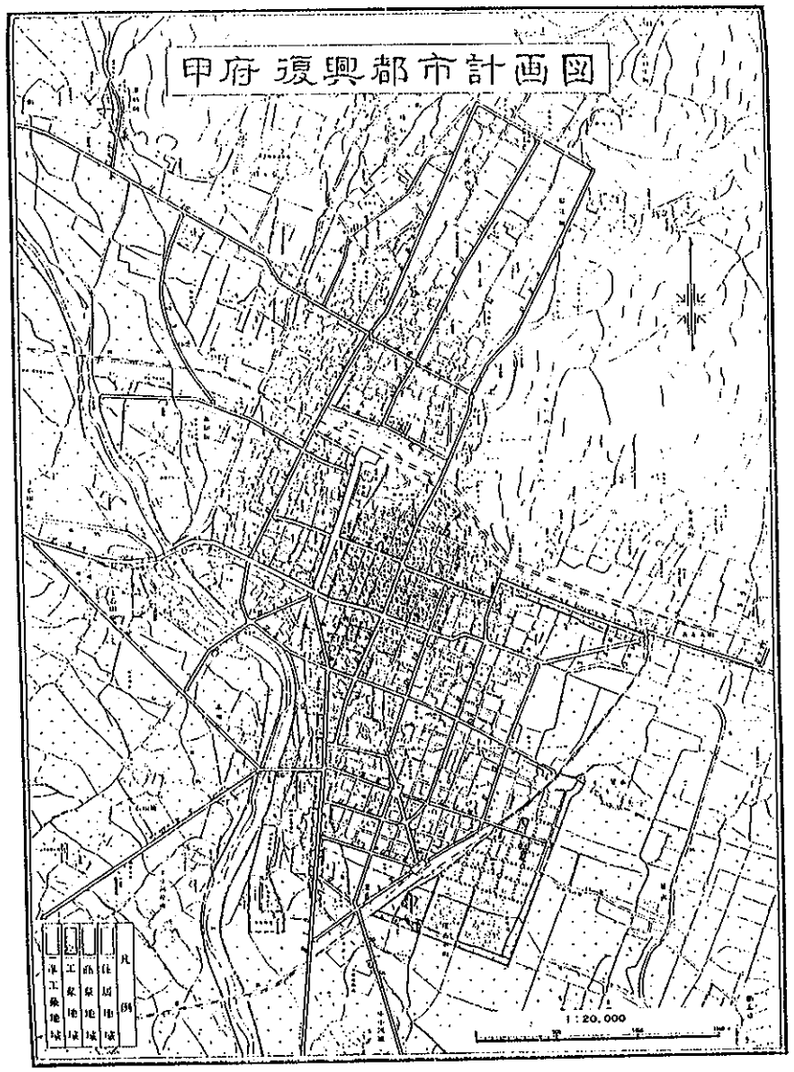
そして、戦争で甲府の市街地はほとんど焼失することになります。戦災復興の第１次の計画です。昭和２０年に計画されまして、江戸時代の残りのクランクとか、道路の交差点の曲がっているのをなくしたり、あるいは、いくつかの広場を設けて放射、環状の街路パターンを想定しています。



甲府空襲による焼失地域（斜線部）



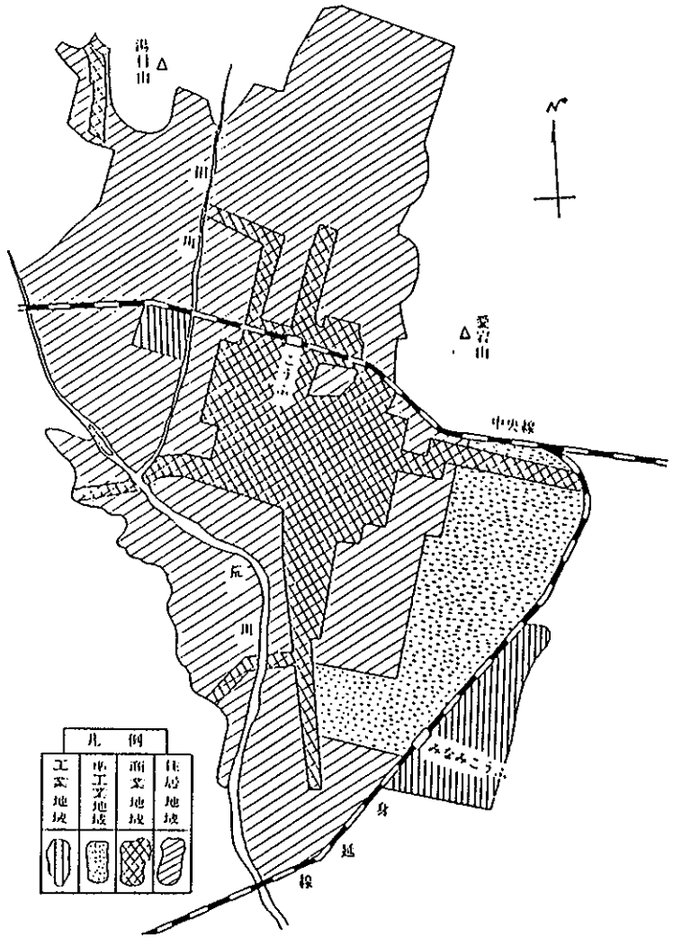
しかし、都市の戦災復興事業は進みません。これが昭和３４年の最終的な戦災復興事業のプランですが、昔の街路のパターンに戻っていきますし、広場もなくなります。そして、実際に実現した区画整理事業は、都心部だけであります。従いまして、そのほかの街路のパターンはおおかた江戸時代のままであります。



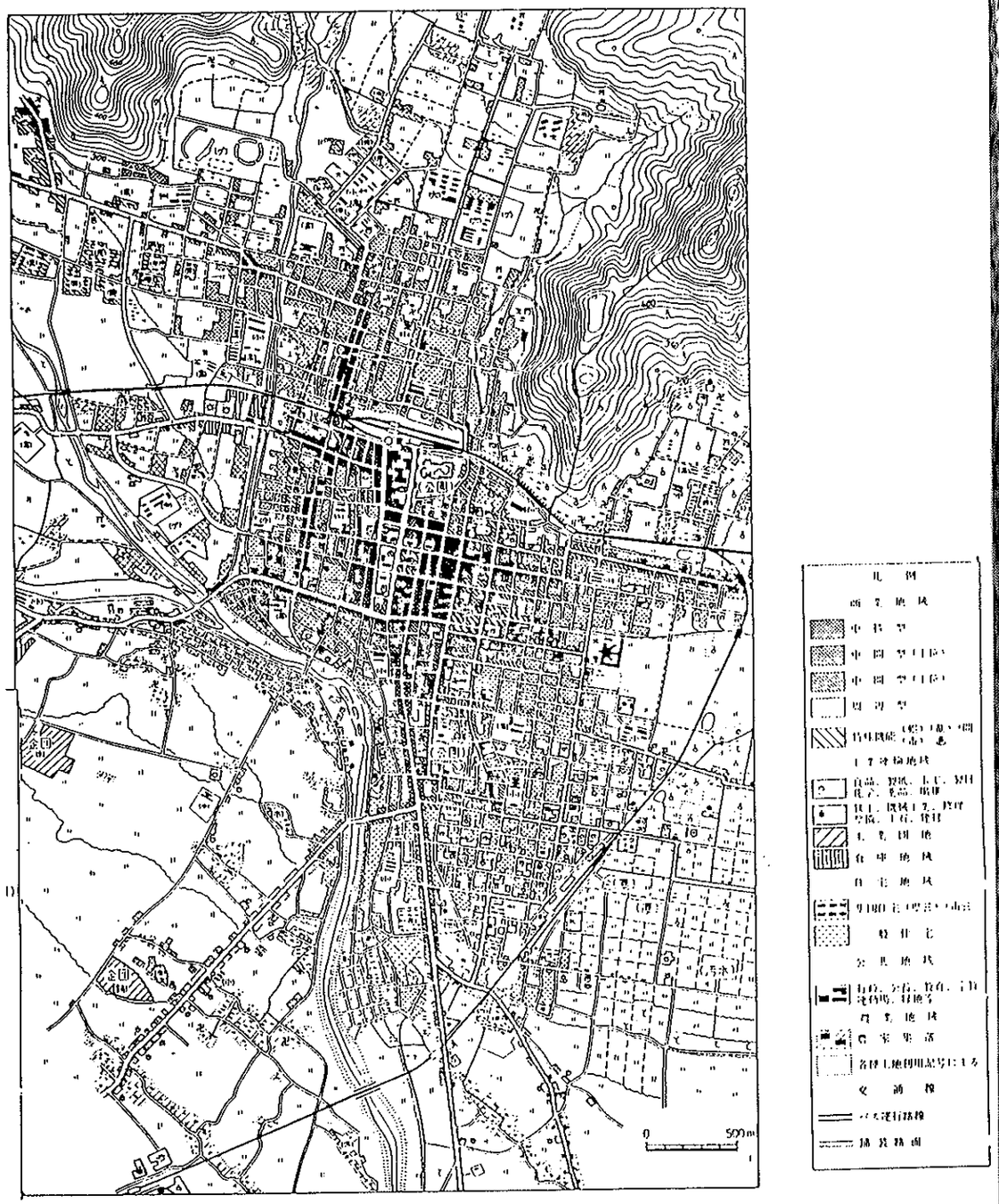
戦災復興都市計画図（１９６０年）昭和３５年
（戦後復興誌第９巻より）

そのときの土地利用計画ですが、都心部は商業、そして周辺に住宅、そして東南部に工業の集積を計画しています。しかし、重要なところは計画がなかなか実現していかないということです。そして、その当時の昭和３８年の土地利用の実態の地図を見ますと、非常に細かく分かれていることが分かります。

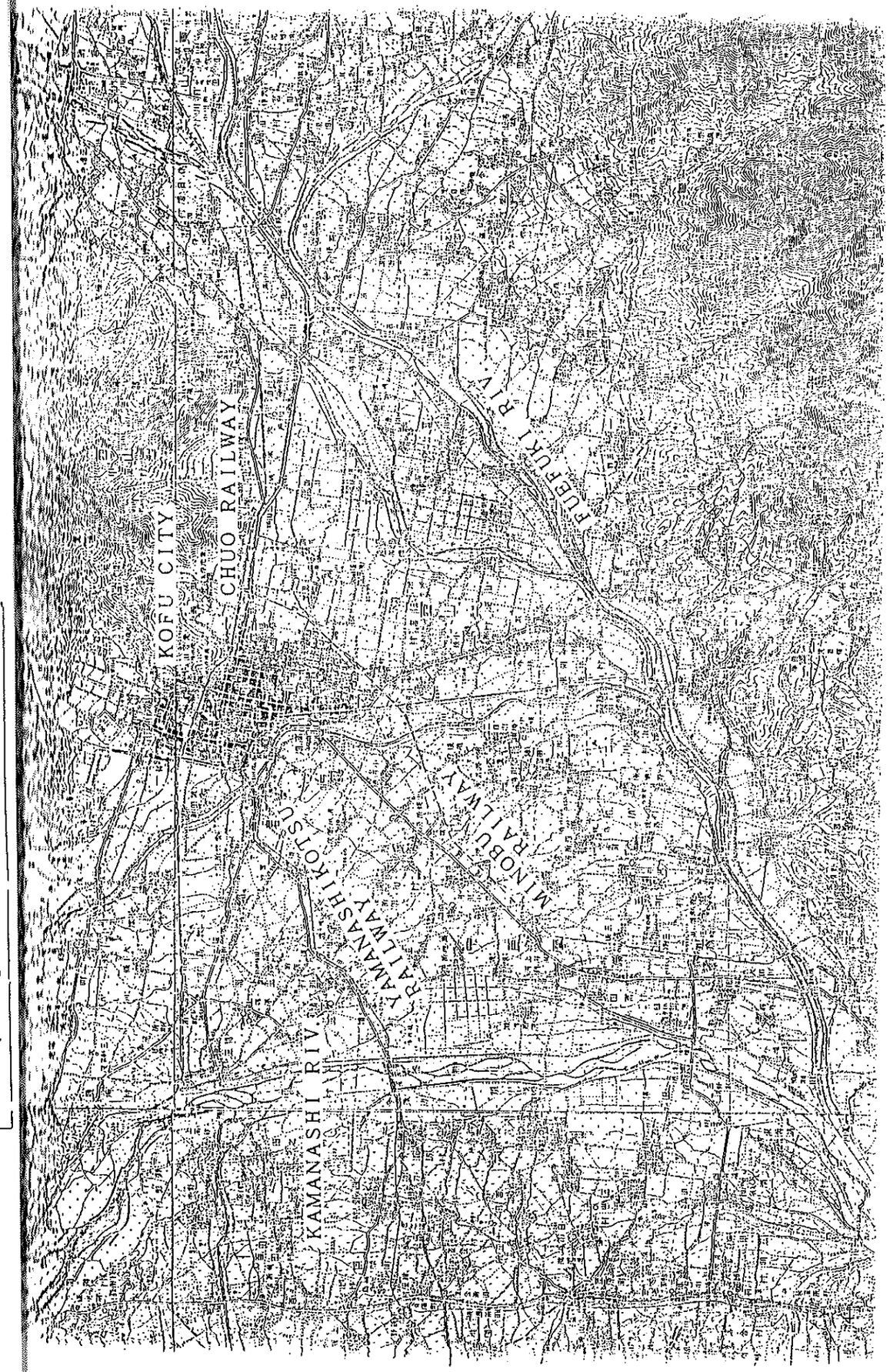
とにかく、一応戦前の状態に都市が復興します。その段階でもまだ甲府盆地全体の中では、まだ小さい状態です。



甲府市用途地域指定略図
（甲府市史より）



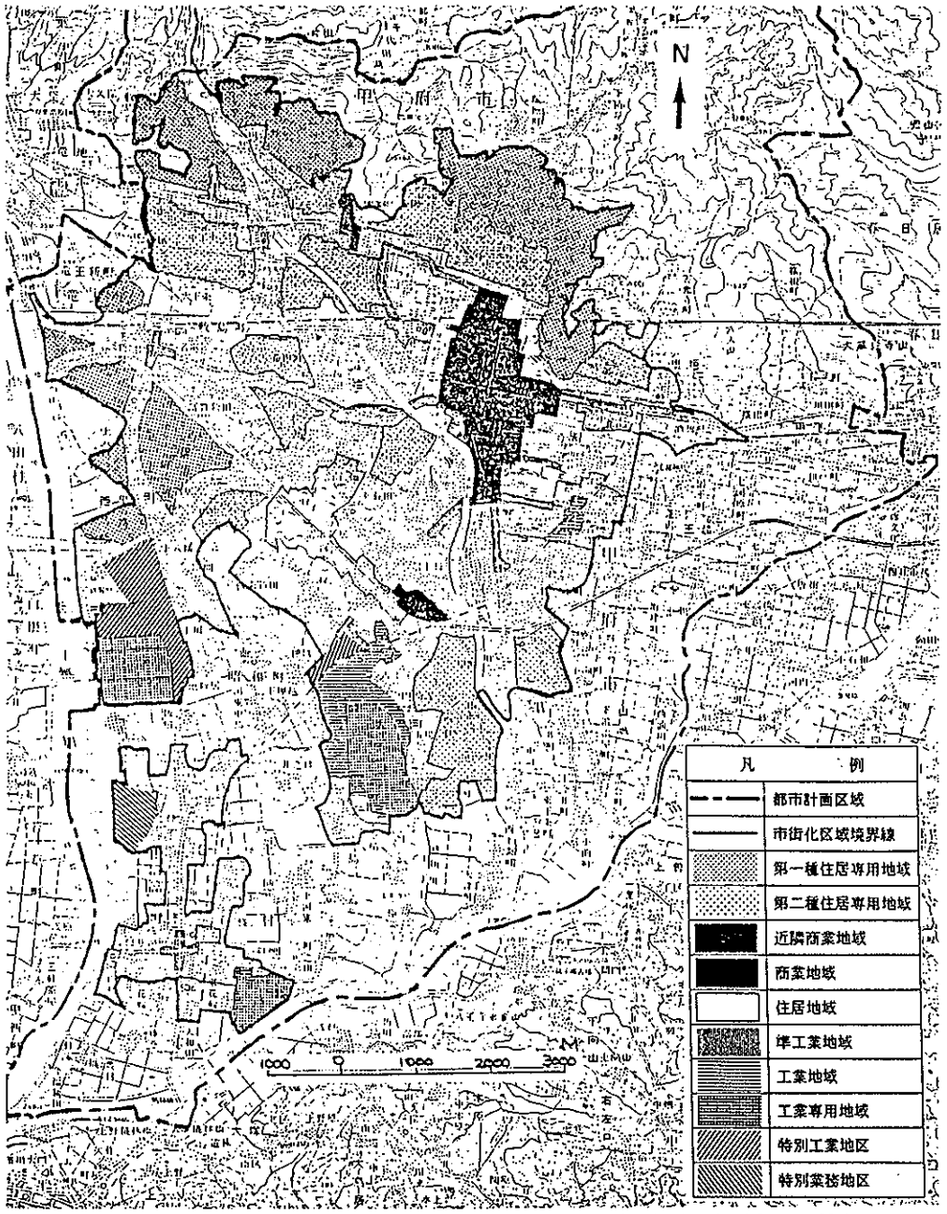
甲府市街機能地域（昭和３８年調査）
（日本図誌大系中部Ｉより）



1952 S27

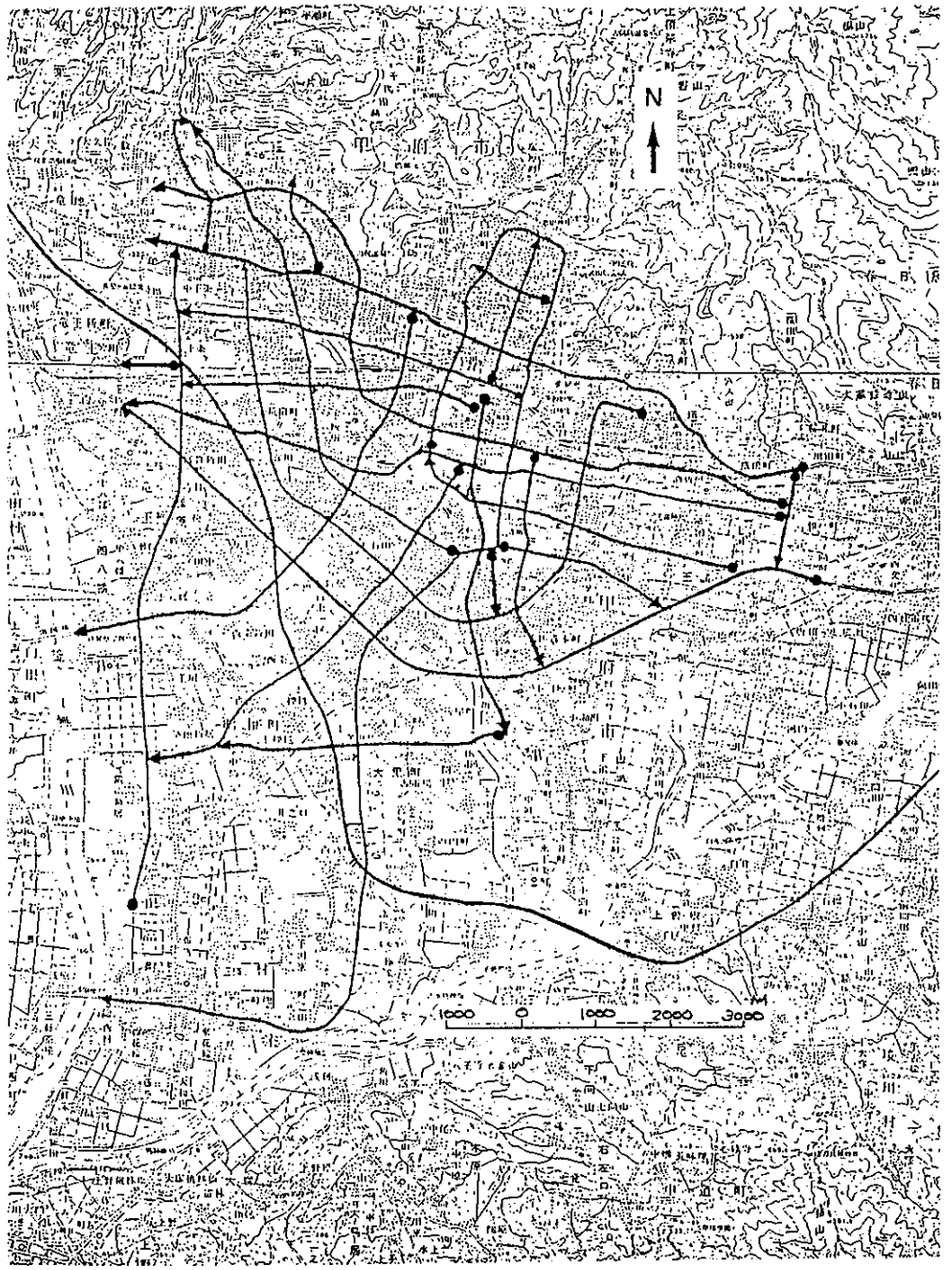
そして、４５年頃に都市計画法が改正になりまして、さらに詳しい用途地域設定がなされます。

そして、甲府盆地全体に計画がなされていきます。そして、街路ネットワークも組まれていきます。



甲府地域都市計画用途地域（昭和57年）

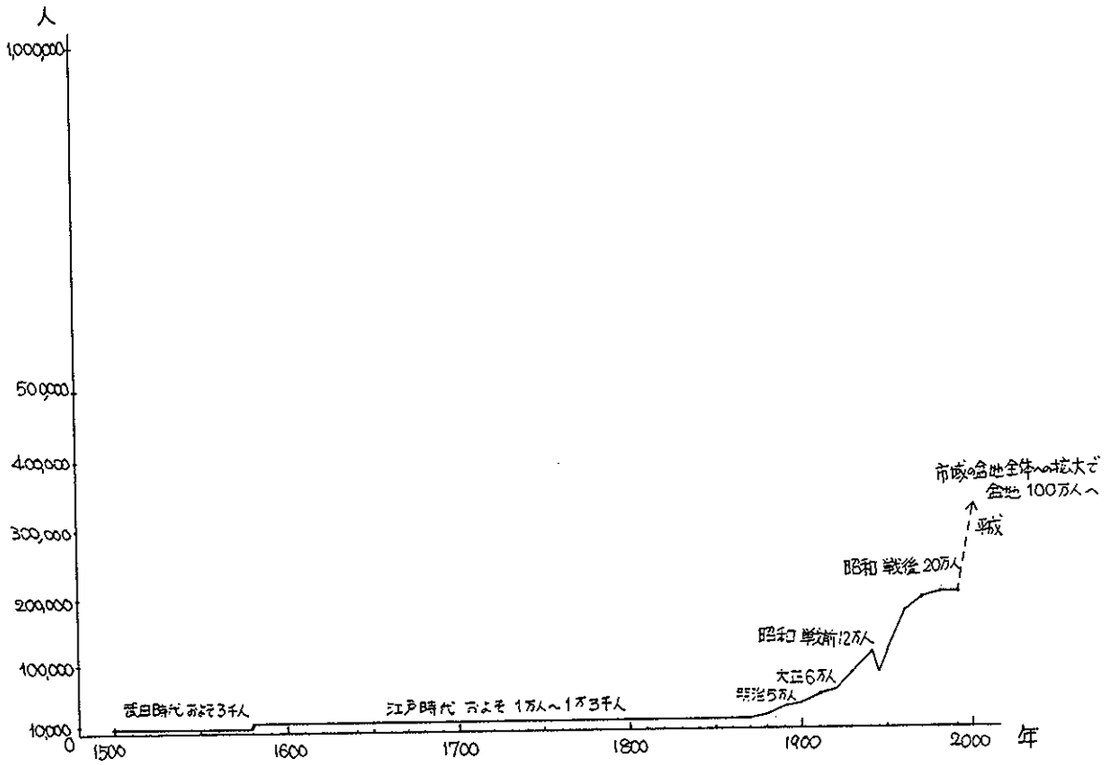
用途地域の純化が少し進んだ



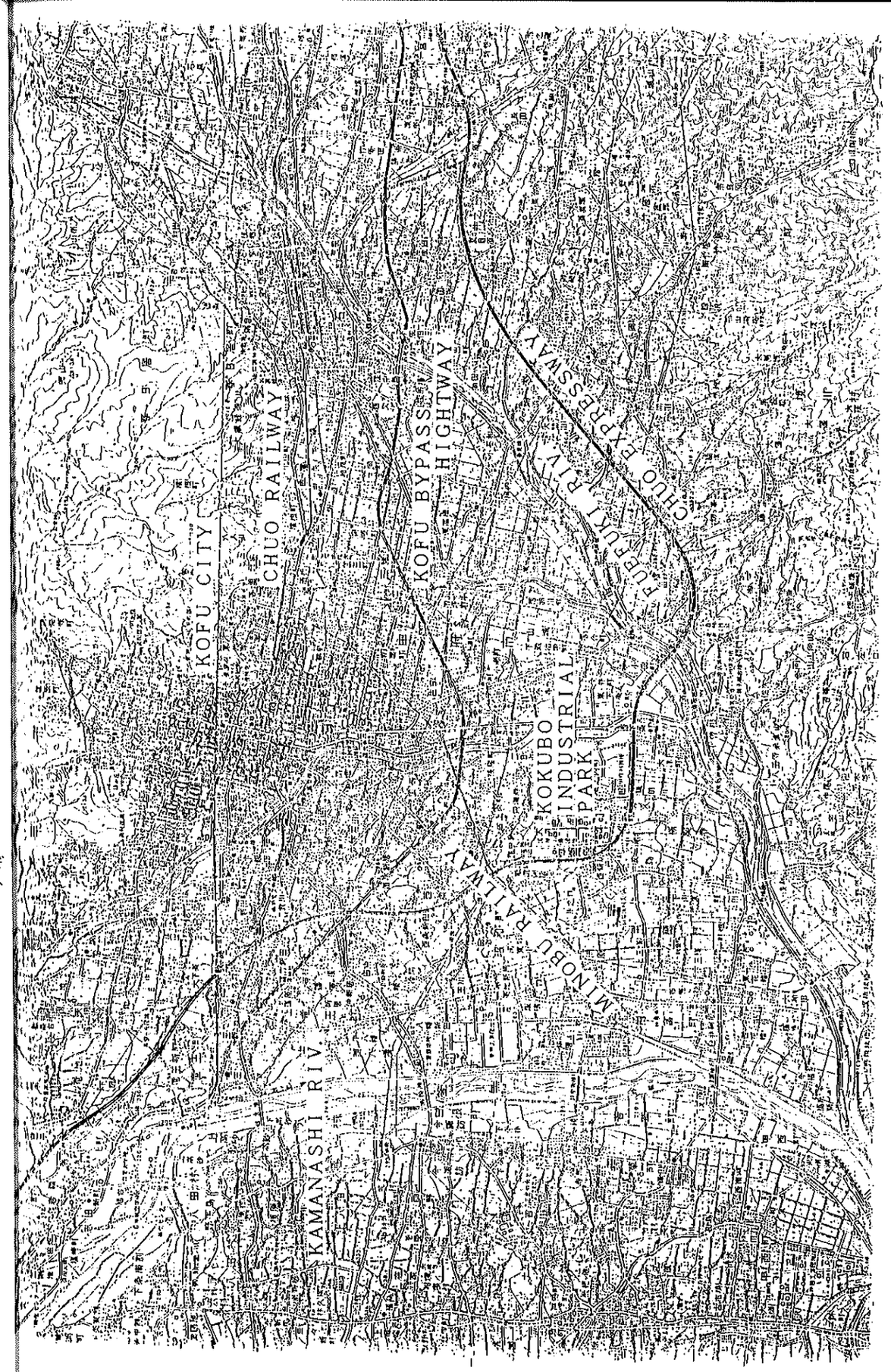
甲府地域都市計画街路網（昭和５７年）

中央高速がつくられ、甲府の市街地はいっぱいに広がりまして、昭和５４年、１９７８年では甲府盆地全体にかなりな拡散が起こります。そして、南部に甲府バイパスと流通団地、工業団地が散らばり、都心から様々な施設が郊外へ、また住宅も郊外へ移転するようになります。つまり、盆地全体が都市化していくということになります。現在さらにこれが南部のほうから西部のほうへ向けて進行している状態になっています。（４５頁）

人口の伸びを長期的に見てみますと、武田時代３千人から江戸時代に１万３千人、一桁ずつ上がっていきまして、戦前１０万、戦後２０万ということで、そして、その後どうなるのかなということです。甲府盆地が目一杯になっていきそう。つまり、無限に盆地があるという状態、そこを開発できるという状態から、有限にコントロールしていかなければならないというような状態になってきています。（下図）



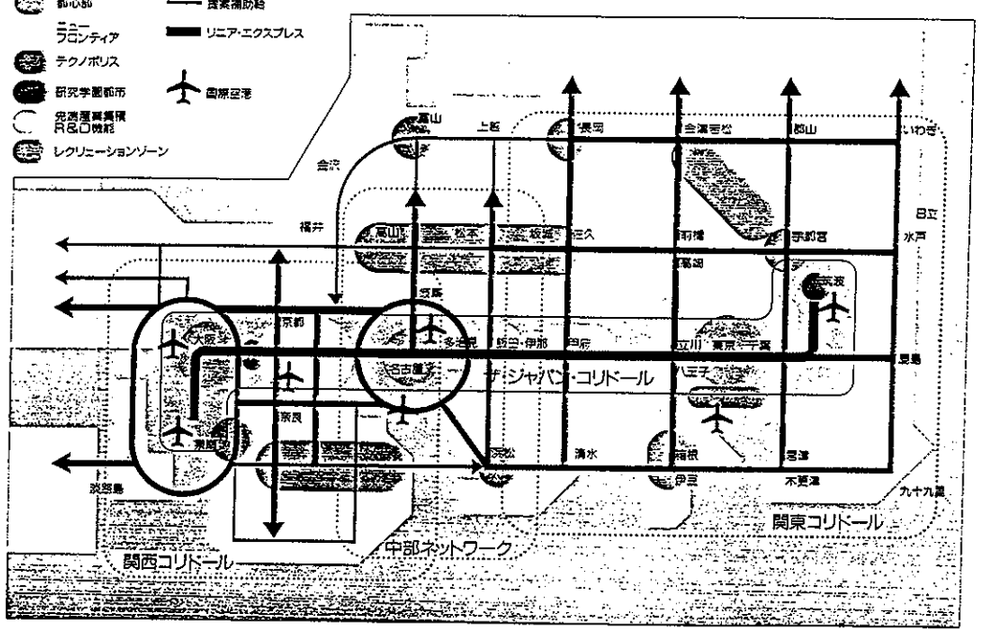
甲府市人口の変遷と予測



1985 S60

国家プロジェクトは、最近は有名なジャパンコリドールプランというのが出ています。東京〜甲府〜名古屋〜大阪とリニアモーターカーで結ぶというプロジェクト等も紹介されています。これでさらに開発にアクセルが掛かると問題が大きくなる。そして、つい先日出ました行革審の『豊かな暮し部会』というのの報告では、国家プロジェクトレベルよりも、もっと地方の投資を重視しなさい、というような意見が出ています。そういう意味も含めて、甲府盆地のどういうふうな今後の開発を考えるか、ということが非常に重要な問題となります。

ロ絵1－2　グランドデザイン・ジャパン パートⅠ（1987年発表）



中央集権的発想を転換

行革審の部会報告　改革の道筋は不透明

解説　第三次行革審の「豊かなくらし」部会が審議会の中間答申に向けてまとめた部会報告は、「発想の転換」（細川護熙部会長）に重点が置かれている。「地方分権」が長年、声高に叫ばれながら、東京一極集中が加速し地方の活性化につながっていないのは、根強い中央集権的発想が障害になっているとの問題意識があったからだ。

報告での言葉の使い方から発想を変え、例えば、従来からの「分権」「権限の委譲」という表現を避けた。「国がおそわけし、地方自治体が頭を下げていただく」（同部会長）といろ上下関係の構図になるためだ。代わって、権限の配分を「正常化」する、という新しい用語を使った。そもそも国が必要以上に権限をもっているとの認識から、地方自治体が本来の自治を実現するために正常な状態に戻すという意味だ。

報告は、こうした発想の転換を具体化する手だてとして、補助金の「一般財源化」などの方向も打ち出した。地方をコントロールする手段を奪われることに抵抗する関係省庁の存在を考えると、これまでの行革論議にはなかった成果ともいえる。

しかし、改革具体化への道筋ははっきりしない。例えば、一般財源化の対象になる補助金の具体的種類を示すことはできなかったし、権限移譲の受け皿として打ち出した「基礎的自治体」についても、イメージはあいまいなままだ。

行革審「豊かなくらし」部会報告

要旨

第三次行革審の「豊かなくらし」部会が二十一日、提出した部会報告（第一次）の要旨は次の通り。

第一　「豊かなくらし」の実現

1　問い直される豊かさ＝略

2　「豊かなくらし」の目標＝略

3　新しい社会システムの創造

第一に、行政の役割は、あくまでも個人の自由な生活や諸活動が保障されるような条件づくりにとどまるべきである。

第二に、政府と民間の役割を考える場合、行政の介入の在り方を直接介入から間接介入の方向へ変えていく必要がある。

第三に、国と地方間の権限配分の正常化を徹底し、地域住民に身近な地方へ権限を移すべきである。「公共論」を乗り越えて、自立的で多様な地域社会の[illegible]

第二　改革の方向

1　ゆとりのある生活の実現＝略

2　公正・平等な社会の推進＝略

3　消費者重視の政策の確立

・十年間で公的規制の実質的半減をめざす。

4　地域本位の行政の確立

（1）東京集中の是正＝略

（2）地域の活性化・自立化＝略

5　地球環境への貢献

・企業や個人に対し、[illegible]

地域の活性化・自立化

1　東京一極集中の是正

（1）東京圏の膨張抑制

・業務核都市の計画や東京臨海副都心開発などの大規模プロジェクトについては、東京圏における業務機能の適正配置、東京圏への機能集中抑制の観点から、適正規模や職住バランスなどに配慮した整備を進めるよう関係自治体と協議する。

（2）東京圏からの機能分散＝略

2　魅力ある地域づくり＝地域の活性化・自立化

（1）基本方策

・地域や住民の生活に密着した行政については、地方の自主性を高め、自由な施策展開が可能となるよう抜本的な見直しを行う。

・国際航空路線の地方空港への乗り入れを推進するため、地方の拠点空港の充実を図る。

②都市圏等＝略

③[illegible]

簡素化し、弾力化する。

・地方交付税制度の簡素化、地方税における自主性の拡大など地方税財政制度の見直しについても検討する。

④広域化した日常生活圏や経済圏に対応した自立的な地方行政体制を実現するため、これにふさわしい自治体の形成を促進する。

（2）地域活性化の方策

①道路・交通

・地方の道路の整備については、国の関与等の見直しを行うことにより、地方の自主的な整備を推進する。

・国際航空路線の地方空港への乗り入れを推進するため、地方の拠点空港の充実を図る。

②都市圏等＝略

③[illegible]

④教育・文化・福祉＝略

⑤情報・通信・放送＝略

⑥公共用地＝略

（3）自立的な地方行政体制の確立

①地域中核都市制度、都道府県連合制度の実現＝略

②時代の要請に合った基礎的自治体の在り方の検討

・将来の自立した地方行政体制の実現に向け、地域社会として存立、発展する条件と行財政能力を備えた行政主体の自主的な形成について検討する必要がある。

・自常生活圏の核となる市町村及びその周辺の市町村を範囲とし、例えば現行の広域市町村圏等のような広がりを持つことになろう。

③[illegible]

1991. 6. 22　朝日新聞より

京都の例を１つ紹介しますと、京都の盆地の中で大規模な構造物を規制している範囲と、風致地区ということで、建蔽率や容積率や高さを規制する範囲があります。基本的には盆地の中の開発を押えてきたのが京都です。現在、発展ということを問題にして、容積率緩和であるとか、高さ制限緩和であるとかいう主張がされていますけれど、まだ甲府盆地はここまでいってないという状態です。

以上のようなことで、人口の１桁ずつの増加、甲府の市街地の盆地全体への広がりということと、盆地全体が有限な状態になってきた、無限に開発できる状態ではなくなったということが、現在の甲府盆地の状況だろうというふうに思います。

いちおう歴史から見た問題状況ということです。

早田俊広●はやた としひろ

(財)建設経済研究所研究員)

1959年、福岡県福岡市生まれ。東京大学法学部卒業。

昭和58年建設省入省。河川局、経済局、都市局などで調査企画を担当。昭和62年より経済協力開発機構(OECD、在パリ)に出向、世界の都市問題について調査研究に従事。平成2年より(財)建設経済研究所に出向。都市政策、公共投資政策の国際比較を担当。

主な論文　「社会資本の再生」、「Public Investment in Japan」

■高橋

続きまして、財団法人建設経済研究所研究員の早田俊広さんから、欧米での貴重な調査体験を踏まえまして、総体的に比較して見るグローバルな視点から『都市政策と公共投資、欧米の町づくりについて』をご報告いただきます。

なお、先ほど司会者のほうからご案内がありましたが、後半のディスカッションに繋げていくためのアンケートの用紙を早田さんの話の終わりごろ回収させていただきますので、お気付きの点また疑問点がありましたらメモの用意をお願いいたします。

それでは、早田さんよろしくお願いいたします。

■早田

それでは、最近研究しております公共投資の国際比較という観点から、町づくりの問題について発表させていただきたいと思います。

お手元にありますレジュメに添いましてお話をさせていただきます。

まず、第１に町づくりに対するアプローチの相違ということでございますが、研究を進めてまいりますればまいりますほど、個別の制度のみを勉強しても、あまり意味はない。つまり、ヨーロッパでこういう新しい都市開発手法が出てきたとか、こういう制度があるらしい、アメリカでこういう制度があるらしいといったディティルにはいっていきますと、いきますほど、あんまり日本に直接輸入してもしょうがないなあという気持ちも段々してくるわけでございます。

欧米に学ぶということで、明治以来営々としてやってきたわけで、いろいろ学んで建設省関係の法律、制度の中には、２０年ものといいますか、要するにワインでいうと２０年間倉に入れたままほっておくいいますか、２０年間一度も発動

されたことのないような制度を作ってみたりというようなケースが、往々にして起こっておるわけでございますけれども、要は、縷々研究を進めてまいりますと、結局根底となる前提条件がいろいろ違うということこそ、勉強しなきゃいけないじゃないかという話でございます。

まず、ヨーロッパでございますが、ヨーロッパの場合は何しろ歴史が古い町づくりをやっておりますので、大体大都市でいいますと、この２ページ目以降に概略をまとめたんですが、パリでもロンドンでも、あるいはローマでもそうですけど、１８００年代にはもうほぼ原形が完成しておりまして、今躍起になって追いつけ追いこせをやっております、道路ですとか街路ですとか、公園、下水道、広場、噴水、こういったものの類はもうできておって、そういう財産の上に、その後町づくりをやっておりますので、簡単に言っても日本は２００年近い遅れをやっておるという話でございます。

それで、基本的な町づくりがそういう形で行われておりますので、非常に恵まれた状況にあると。このへん無視して制度だけ持って来てもしょうがないという話で、これはローマやパリやロンドンなど大都市がよく引用されますが、中小都市でも全く同じです。南仏に甲府市と同等のサイズを持っておりますアビニヨンという町がありますけれども、歴史の教科書に時々出てまいります典型的な中世都市でありまして、法王庁が一時期あったその関係で１４世紀には立派なインフラ整備が行われまして、立派な城壁措置として整備されました。その遺産にたって、今でも豊かな町なんですが、この人口２０万くらいの町に立派なオペラ座がございますとか、市営のバレー団があります。それから、交響楽団があります。こういうような文化的な歩みにおいても非常に市民生活の質が高いというような町が、ヨーロッパでは全然珍しくない。これが基本的なヨーロッパの前提条件となります。

さて、次にアメリカを調べて見ましたら、歴史がたかだか２００年ということで、そんなに日本に比べて先に進んでいるわけではありません。進んでおるといっても２０年くらい先に進んでおるわけでございますが、日本が敗戦処理をいろいろやっております間に、向こうはしゃかりきになって社会資本整備をやっておりますので、２０年から３０年くらいは向こうのほうが進んでおりますが、基本的にはアメリカのほうが日本の状況に近いものがあります。

さて、特にアメリカの状況には興味があるんですが、しかしながら、ここにもアメリカと日本では、制度を単に右から左に持って来ただけでは全然話にならない根底の違いというのがあります。これがそこに書きました徹底したインデペンデンシーという問題でして、アメリカの精神構造とでも言いますか、アメリカで公共投資の問題を考える時に、どういうことを考えなければいけないかというと、アメリカの市民というのは、要するに政府を信用していない。連邦政府を一番信用しておりませんで、次に州政府を信用しておりません。一番信用がおけるのは、まだ自分たちの目の届く地方自治体でございます。地方自治体についてもあんまり信用しておりませんので、常に監視の目を光らせていると。要は、自分の払った税金１ドルがどう使われているのかということに、ものすごいエネルギーを費やしておるというのがアメリカの社会でございまして、私なんかの常識的な感覚で考えても、あんなにエネルギーを費やしたり、市民活動に精出すくらいなら、素直に税金を払ったほうがよっぽど安穏とした楽な生活が送れるんじゃないかというぐらいに、自らの払った１セント、１ドルがどう使われておるかということに関心があります。それがだんだん分からなくなるのが州政府であり、連邦政府でありますから、そういうところに仕事はさせたくない。基本的に自治体に仕事はしてもらいたいのですが、それも税金が一般財源の形でとられていくのはたまらない。従って、日本の言葉で言いますと、受益者負担金ですとか、特定財源化する。あるいは特別の財政機関を設けまして、そこに収入と支出を明確にさせた上で特定の仕事だけさせると。それで、下水道にしても道路にしてもそうですけど、およそ自分と受益が関係ないものに対して、湯水のようにお金が流れていくことは嫌うので、そういった意味での非常に厳しい監視体制があります。そういうわけで、連邦もそれでよしとしておりますので、先ほど言いました３０年くらい前から一生懸命公共投資をやっておりました時は、連邦の役割も公共投資なり町づくりに対しまして大きかったわけでございますが、最近はもっぱら弱肉強食ということで、連邦は規制はする。環境問題などは厳しいですから、およそ実現不可能なような、私よく思いだすのは、日本が排ガス規制をクリアした時に、到底日本の自動車産業はこれをクリアできないような基準を作ってやってみたら何とかできたというような話はありますが、今アメリカが大気にしても水質にしても自治体に対して要求している基準は、ちょっと常識的に考えると達成できそうにもないような基準を押し付けておりますので、これできるかどうかというのは、本当に自治体の必死の努力で、できなければアメリカの場合は、自治体を解散しさえすればいいという逃げ道があるものですから、特に小さい自治体なんかは、最後は連邦の環境基準を守れないということになりますと、自治体の解散の手続きを取りまして、た

んなる集落になると。こういうやり方があるわけですが、要は、基本的なスタンスが弱肉強食であります。それで、アメリカのわずか２００年の短い歴史の中で、栄枯盛衰が激しい各都市を持っておりまして、最初東海岸から起こって、次、西海岸に移って、次にシリコンバレーのあたりに行ったと思いきや、最近は一番成長しておりますのは、フロリダ半島のあたりとか、要は気候が良くて暖かくて、それで土地が安いところ、どんどん、どんどん産業も人間もシフトが激しいわけです。なぜか、これまた郷土愛とか、一生同じところに住んでいようという気持ちも薄いらしくて、どうも老後は暖かいところへ引っ越して過ごしたい。あるいは元気のあるうちでも、ちょっとでもビジネスチャンスのあるところ、自分によりよいペイを払ってくれるところがあれば、どんどん故郷を捨てるということがありますから、町の栄枯盛衰というのは大変なものがあります。それで、要するに人を引き付けられない、産業を引き付けられない町というのは、衰退して行くのは当然であると。こういう町づくりをやっておりますので、アメリカで都市問題の一番の問題は、こういう衰退したところが大変なアウトロー化、スラム化しているというのが問題になっておる。これをどうにかしようというのに、逆にお金を使わなきゃいけない。要するに、後向きなことにばっか

りにお金を使わなければいけない。ただでさえお金がなくなっているのに、そういうことをやっておるというのがアメリカのケースでありますから、この徹底したインディペンデンシーというか、アメリカの弱肉強食主義というのは、ちょっと前提が違うなという話がございます。

資料の一番最後に、例えばアメリカの連邦政府のうち建設省にあたるところなんですが、住宅都市開発省というのがあります。ここの予算を見てびっくりなんですが、住宅都市開発省の予算のうち大半は住宅関係で、いわゆる都市問題にあてられる連邦予算というのは、それ以外の部分なんですが、これが例えば、最近の数字でいうと年間約４千億円です。ちなみに同じ都市の日本の建設省都市局の国費の予算でいくと１億５千億くらいありますから、国土がこれだけ違うのに、アメリカは都市問題に関して日本の３分の１しかお金を使っていない。そういうような基本的な状況があります。

そこで、例としてニューヨークの都市開発ということを書いたんですが、私アメリカに行きまして、ニューヨークで都市開発事例、駅前の大規模な再開発事例を見せてもらえるというんで、どんなすごいことをやっているんだろうと、日本の臨海副都心開発とどう違うんだろうとか、思って見に行ったんですが、要は、アメリカの東京駅にあたりますニューヨークの中央駅の周辺の２０くらいのビルから、それぞれビルの地主さんからお金を拠出してもらって、そのお金を基金として、要するに公的なお金は一切もらわずに、ビルの持ち主だけで何とか駅前をきれいにしましょう、というのがこのニューヨークの都市開発でございました。アメリカではこういうことが主流になっております。それで、何をやっておるかというと、そのお金の一番の行き道は、ニューヨーク市がそういうことをやりますお金がないものですから、警察を雇う、それから清掃をすると、こういうことに民間のお金が流れている。これは日本で言えば当然のことながら自治体側がやっている治安ですとか清掃みたいなことを、民活、民間のお金でやって、それが都市開発の目玉であったりすると、こんなような状況になっております。

さて、こうやっていろいろ前提条件は違うんですけど、日本でも一つ参考にすべきこともあるなというのは、むしろ失敗した話にあろうかと思います。というのは、パリやロンドンは大変昔に大規模な都市計画をやって立派な町づくりをして、日本人観光客が行って皆びっくりして、これはどうしても日本に一つくらいこういう町が欲しいと思うわけですが、逆に失敗した話もあります。あまり知られていませんが、ローマで一時期パリみたいな町づくりをしようとしたことがありまして、ローマはいかにも雑然とした町なんですが、ここに非常に明快な都市計画を導入しようとした男がおりまして、名前はムッソリーニ、１９２０何年代にローマを大改造しようとしたわけです。これは１８００年代にオスマンとナポレオン三世の手によってパリを大改造した、あの夢をもう一度ということで、帝国にふさわしい立派な首都を持ちたいと、ムッソリーニも考えたものですから、町並みを大規模に破壊したわけです。それで、広場の周りの民家を全部押

しのけまして、何しろ明快な都市計画が必要だというんで、街路を広げるために伝統的な町並みを全部破壊しまして、それで一部分実施した後、彼は失脚したんですが、これに対する戦後の評価というのはマイナス面しかありません。これは伝統的で美しかったローマの町並みが完全に破壊されてしまったと。

実は、結果からいうと評価は正反対なんですが、やったことは全くパリと同じなんですね。やったことは全く同じで、街路を広げて民家を押し除け、それで立派な広場をつくってモニュメントを立てたということでは同じなんですが、要するに、欧米でも価値観が変わりますと、そういうふうに正反対の評価も行われたりする。

したがって、日本の場合一番の問題点は、本格的なインフラ整備が民主主義化の時代になって初めておこったので、遅々として進まない。それからお金が掛かりすぎる、時間も掛かりすぎるということが一番のディスアドバンテージだと言われておりますが、そういう逆に失敗した例も、後から来た故に見習うことができるんじゃないか、というのが１つアドバンテージとしてはあるかと思います。

最後に、どうしても流行のサイクルが早いものですから、いまさら構造協議なんていうと、何の話をしているんだという感じですが、例の４３０兆円の話ですが、これについては本当にいまさら４３０兆円というセンスのほうが正しいので、実際問題大蔵省も、経済企画庁も、外務省も、もう構造協議で４３０兆というのは、はるか忘却のかなたという感じがいたします、アメリカのほうがなおさらでございまして、要は、これは貯蓄投資バランスで、日本になにかきつい罰を与えてやりたいと考えた時に、ちょうど日本国民に受けが良くて、目に見えやすい玉として公共投資４３０兆円やれと、約束しろと。それからＧＮＰ１０％やれということを約束しろというのが、向こうでも連邦議会に対しても受けが良かったですし、日本国民に対しても受けが良かったのでそういうことを言ったんですが、言ったとたんにすぐ忘れる。なぜならば、こういうことをやってもアメリカの経済とか、アメリカの赤字問題はあまり関係がないということは皆分っていたわけで、それで、要は何が残ったかというと、４３０兆やるという約束と、お金がじゃぶじゃぶ使われるという事実だけが残ったんですが、これについても額が非常にでかいということは心配するにあたらず、これは大都市あたりの土地の高いところに用地費をふんだんつぎ込んで、用地補償費でやっていけば少々のものを造っただけであっという間になくなる額でございまして、そういうやり方もある。しかし、ひるがえって考えると、何をやりたかったかというと、生活の質を豊かにすることではないか。生活文化関連でこれからは公共投資をやろうじゃないか、という精神だけはまだ残していきたいんじゃないか。そうすると、北海道の人が一番これであせっているんですが、下水道なり公園をやろうとすると、北海道の人なんかはどうしても十分ですので、お金が全然回ってこないんですね。いよいよこれからだという時に、生活文化関連なんて言われると、北海道なんか全然お金回ってこないものですから、北海道とうちの研究所で共同して、真の生活文化関連の社会資本整備とは何であるかという研究をやっておるわけでございますが、考えたら、今日本の生活で一番欠けておるのは、案外レクリェーションをすることで、何も何をいまさら下水道という感じでもあるわけですし。

そうしますと、特に町並みを奇麗にするとか、町づくり、あるいはそこに精神を吹き込む、文化を吹き込むみたいなと

ころに、４３０兆のほんのおこぼれでも行くようなふうに。要は、皆もう４３０兆円のことなんか忘れていまして、生活関連という言葉だけが残ったわけですから、これからいかようにでもこの意味内容が変化するという可能性はあるわけです。そこらあたりが、こんごの日本型町づくりのアドバンテージとして考えてもよい。つまりアメリカはもうお金がないわけです。日本はまだまだお金があります。アメリカは金がない事情というのは、要するにアメリカが勢いが良かった時代に非常に沢山インフラをつくったので、もう自治体なんかはこれを維持管理するだけで全てのお金を使っちゃいますから、もう町づくりに全然お金を掛けられなくて、警察とか治安とか、そのへんの基本的なことすらやれないという悲惨な状況にあるのに対して、日本はお金だけはありますから、これをいたずらに用地補償費等で費やすことなく、うまいこと使えば何かできるんじゃないかというのが、明るい話題としてはあるかと思います。

以上、非常に短かい内容で失礼でございましたけども、私の発表でございます。

（会場にて配布された資料）

都市政策と公共投資

── 欧米のまちづくりについて ──

１９９１．６．２７

（財）建設経済研究所

早田　俊広

1．まちづくりに対するアプローチの相違

・ヨーロッパの場合 ── 歴史に負うまちづくり

・アメリカの場合 ── 徹底したインディペンデンシー

（例；ニューヨークの都市再開発）

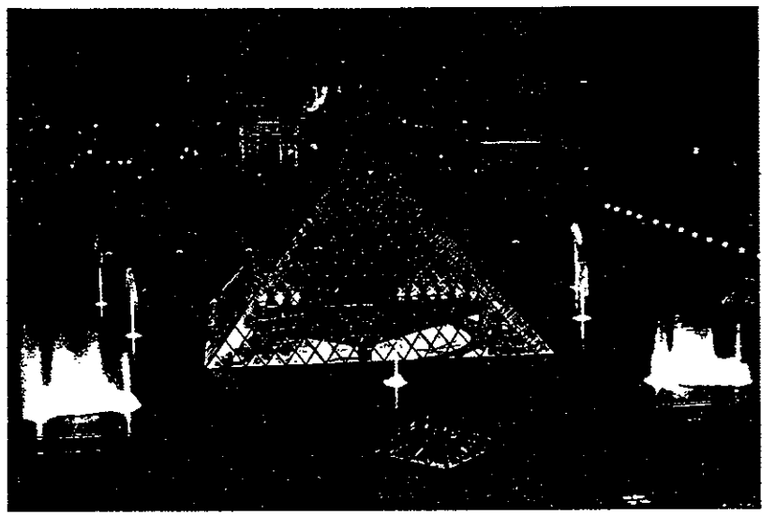
2．日本型まちづくりの可能性

・民主主義下での本格的インフラ整備

・構造協議とまちづくり

PARIS パリ

(財)建設経済研究所常務理事 長谷川 徳之輔　同研究員 早田 俊広



一度でもパリを訪れた人は、その猥雑のとれた落ち着いた街並とリズミカルに配置されたモニュメントたちに魅了されるはずです。この美しい都はどのようにしてつくられ、どう変わろうとしているのでしょうか。

●パリ発展の始まり

紀元前3世紀、セーヌ川に浮かぶ小島（現在のシテ島）にパリシー人が住み着いたのが、パリ発展のそもそもの始まりです。その後シーザー率いるローマ軍に支配されたり、フン族のアッチラに攻められたりしつつ、水路陸路の交わる交易の要衝として、また、フランク王国の首都、フランス王国の首都として、発展して行きました。

中世においては、城塞都市として順次城壁を拡大、上水道、道路などが整備され、続く絶対王制の時代には王宮などが整えられ、都は拡大しました。

●パリの原型の完成

フランス大革命の後に登場したナポレオンは、偉大な軍人であると同時に、すぐれた政治・行政手腕を発揮し、パリを「ヨーロッパ帝国の首都、学問・芸術の中心、栄光の劇場」とすべく、壮大な都市計画の実現に着手しました。公共事業を積極的に推進し、上下水道、市場、街路や1万本の街灯などを整備し、ふたつの凱旋門やマドレーヌ寺院など、今日に残るモニュメントをつくりました。

さらに、2度の革命を経て登場したナポレオン3世は、パリの都市開発上最も重要な人物といえます。彼は、セーヌ県知事（現在のパリ市長）にオスマンを任命し、パリ大改造を命じました。

オスマンは、中世以来取り残された不潔な貧民街、老朽化地区を猛烈なスピードで徹底的に破壊し、世界中の都市づくりの見本になった、広場と放射状、直線状の道路パターンで構成される街を創り出しました。シャルル・ドゴール広場、パリ外周道路、ルクサンブール公園をはじめ23の公園、ブローニュの森とバンセンヌの森、中央市場、オペラ座、鉄道駅と9つの橋などをつくり、街中の地下を掘り起こしてガス・上下水道事業を行ないました。下水道建設は750kmに及んでいます。さらに、建物の高さ・外観などを統一する厳しい条例を定め、今日見られる、調和した街並の基礎をつくりました。

要するに、現在のパリの原形をほとんどつくったわけですが、それを、わずか23年の在任中に行なっています。このため、今でこそパリ近代化の基礎を築き、都市計画の見本を残した人物と高く評価されていますが、強引なやり方に当時は評判が悪く、命をねらわれたりもしました。最後はスキャンダルで失脚して、解任されています。歴史家には、「彼らは二人ともパリへの執着と伝統的感情を持たず、好みは病的で幼稚」などと書かれてもいます。

もっとも、ナポレオン3世を都市改造に駆り立てた理由は、人民革命を恐れ、反乱を即時に制圧できる都市づくりという極めて合理的なものでした。

●変貌を続ける都市

歴代の絶対的権力者によって形づくられたパリは、その後の経済発展とエッフェル塔に象徴される万国博の時代にますます輝きを増していきました。その後、第二次大戦では、敗戦を覚悟したヒトラーによってパリ爆破命令が出され、各所に大量の爆薬が仕掛けられましたが、パリ駐留のドイツ軍司令官の英知と勇気によって実行されませんでした。このとき、すでに狂気を帯びていたヒトラーが「パリは燃えているか」と叫んだという話が伝えられています。

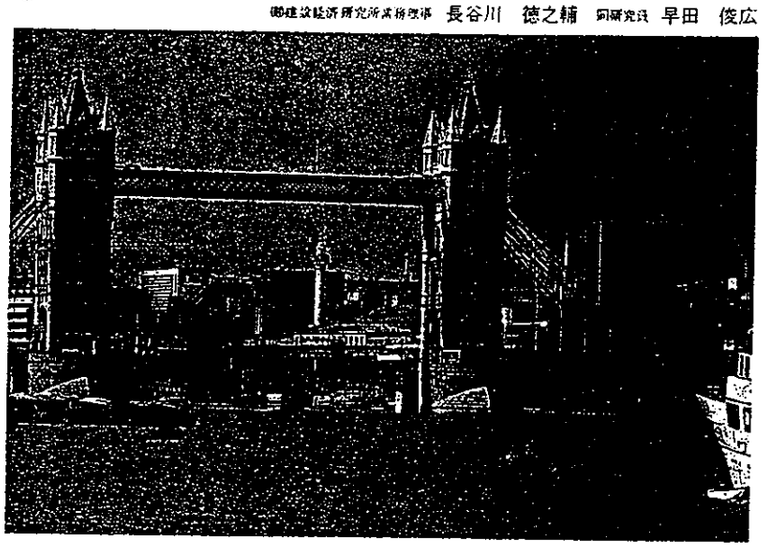
こうした歴史に支えられたパリが、近年、再び変貌を遂げています。1970年代以降、ジスカールデスタン、ミッテラン両大統領は、次々に国家的プロジェクトによるパリ改造を計画・実施しました。

使われなくなった駅を見事に復活させたオルセー美術館、思索する場とのコンセプトでつくり出されたラ・ビレット公園、アラブの幾何学模様を構成する壁面のひとつひとつの穴が採光調整の絞り機構を持つ画期的建築物であるアラブ世界研究所、ルーブル美術館を地下方向に展開し、地上との接点として透明なピラミッドを配した大ルーブル計画、超高層ビルを横に倒してみせた長大な大蔵庁舎、芸術を大衆のものとすべく機能重視でつくられた新オペラ座、そして、ルーブル宮からふたつの凱旋門を結ぶ直線をそのまま西に延ばした地に立つ新凱旋門などが、革命200年を機に続々と完成しました。

これらは、あまりの斬新さに数々の論議を巻き起こしました。しかし、すでに完成された都市の美しさに安住せず、新しいモニュメントが常に街の顔を変え続けているのはいかにもパリらしく、それがいつまでもパリを魅力的にしているように思われます。

LONDON ロンドン

(財)建設経済研究所常務理事 長谷川 徳之輔　同研究員 早田 俊広



ロンドンの印象をたずねると、「ヨーロッパの他の都市に比べ雑然として美しくない」「英国病という言葉から想像したほどは暗くない」「夜間照明は世界一美しいなどなど、人によりさまざまな答えが返ってきます。計画的な都市づくりに貫かれた都市や、ラテン系の明放的な街づくりを好む趣味からは、あまりパッとしないのかもしれません。しかし、素晴らしい建物や公園、それに伝統、長く滞在するにつけその魅力のとりこになる人が後を絶たないのを見ると、有名な「ロンドンに憧きたとき、その人は人生に憧きたのだ」という言葉が、この街の真実の多くを語っていると いえそうです。

●都市の形成

ロンドンの起源は、古代ローマ軍の進攻に遡ります。シーザーが紀元前55年にこの地に踏み込んだ時、そこはテームズ川の両岸に沼地が広がり、わずかばかりの原住民が住んでいるのみでした。約100年後、皇帝クラウディウスはブリタニアを征服、ロンディニウムと名づけられたこの地が、交易と行政の中心として発展していきます。彼がテームズ川を渡るために架けた橋が交易センターの基礎となったわけで、他のローマ都市同様、都市の発展と川との深い関係を示しています。最盛時4万5千の人口を誇ったこの都も、ローマ帝国の衰退と共に一時衰退しますが、7世紀以降再びヨーロッパ大陸との交易の中心として栄えていきます。異民族の攻撃を何度も経験した後、1066年にはイギリス全土を平定したウィリアム征服王により、首都に定められました。

写真出典／「The Book of LONDON」(The Automobile Association)

●帝都の光と影

ロンドンの繁栄は大英帝国の繁栄と共にあります。17世紀の市民革命を経て、安定した体制の下、続く18世紀には、芸術・学問、ビジネスの都としてロンドンは大発展を遂げます。と同時に急激な発展が、スラムの形成など都市の病理を生み出していきました。19世紀初頭には、建築家ジョン・ナッシュにより、リージェンツパーク、セントジェームズパーク、リージェントストリートなど今日に残る名所がつくられ、港の拡大とテームズ川にかかる多くの橋の建造が行なわれました。また、19世紀半ばには次々と鉄道駅が完成、1863年には世界初の地下鉄が開通するなど、ビクトリア女王治政下の大英帝国そしてロンドンは、産業革命による基盤の上、全盛期を迎えますが、その矛盾もさらに拡大して行きました。1801年から100年間で、96万人から450万人というすさまじい人口増加に伴い、劣悪な衛生状況から何度もコレラが流行し、スラム街も拡大しました。19世紀後半には既に周辺地域の虫くい状の開発が進行し、ロンドンの中心部シティからの人口流出も起こっています。都市問題の面でも世界の都市の先駆者というわけです。富の蓄積により素晴らしい建築物や広大な公園を誇る華やかな大英帝国の首都は、他方で、日照不足、大気や水の汚染、劣悪な居住条件、犯罪などあらゆる都市問題を抱えた、病気と貧困と社会的不正義の都会という影の部分を持っていたのです。

●都市づくりへのたゆまぬ努力

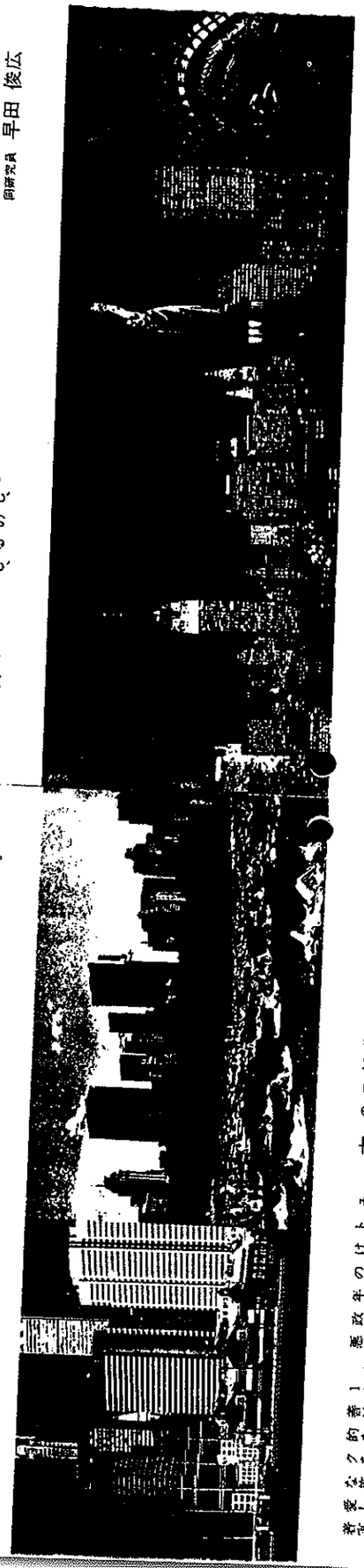
ロンドンは、都市問題への取り組みにおいても世界の先駆けとなりました。都市集中に伴う過密、スラム対策を起源とする衛生再開発の概念はイギリスで生まれ、その後の欧米の再開発政策に大きな影響を与えました。1848年には既にこの問題に正面から取り組む公衆衛生法が制定され、その後の土地利用規制の基本となりました。同時に、上下水道、街路、宿泊所など居住環境全般にわたる整備も行なわれました。イギリスの近代的都市計画制度は、1909年住宅都市計画法に起源を求められますが、それはアメニティの概念を取り込んだ先進的なものでした。都市的土地利用と農業的土地利用を明確に区分し、それぞれの特性を対比するという1938年のグリーンベルト法も優れた成果を上げました。第2次大戦後は、スクラップ&ビルド型再開発から修復型再開発への移行と、都市内の衰退地域の再開発など地域開発政策としての都市再開発という新しい流れが主流となります。また、戦後のニュータウン政策の成功も各国の手本となっています。

1970年代には、経済の停滞に伴い、都市内の衰退地域、いわゆるインナーシティの問題が深刻化しました。これに対する最近の動きとして、サッチャー政権による二大対策、都市開発公社と企業地域の制度は、民間の活力を最大限活用し、都市の衰退地域を再生するものです。今日ロンドンを訪れる人は、ドックランド地域の再開発のあまりの規模の大きさに驚き、ロンドンの最も古い地区シティの再開発が歴史的建築物の外観に配慮しつつ積極的に進められていることに感心するでしょう。都市づくりへの努力は、たゆまず続けられているのです。

NEW YORK ニューヨーク

㈱建設経済研究所常務理事　長谷川 徳之輔
同研究員　早田 俊広

ニューヨークというと“危険で汚ない街”というイメージが今なお強いようです。しかし一方で、さまざまな分野で世界の中心・情報の発信地として今も世界中の注目を集めている魅力ある都市でもあります。この街はどのように成長し、どう変わってきているのでしょうか。



未開の地に新しい街の誕生

マンハッタン島は1524年、フランスの探検家ヴェラザーノが、国王の命により新大陸を調査中に発見したのですが、これは、コロンブスによる新大陸発見から約30年後のことでした。当時、島はインディアンの一部族が住む未開の地でしたが、オランダ東インド会社の命を受けたハドソン・イングランドが1609年にこの地を探検し、毛皮などを持ち帰り、これを契機にオランダの商人たちが大々と進出、本格的な植民が始まりました。1626年にオランダの総督が、土地所有の概念がない先住インディアンから、わずか60ギルダー（約24ドル）相当の毛皮やビーズ、刺繍などと交換にマンハッタン島を取得。オランダ人たちは島の南端に、オランダ風の街・ニューアムステルダムを建設。人口は200人ほどでしたが、毛皮、木材、小麦の加工・輸出基地として栄えました。その後、同時期に北米への入植を進めていたイギリスが、1664年の英蘭戦争のさ中にこの街を奪取し、王弟ヨーク公の領主屋敷にちなんで、地名をニューヨークと改めたのです。当時の人口は約240人に増えましたが、市街地はまだ小さな街の南の、南端部に限られていました。

発展を支えた都市計画

その後、独立戦争までの約100年間、ニューヨークは西インド諸島とイギリス本国を結ぶ三角貿易の要衝として発展し、商業に加え、製粉加工、造船所などの工業も起り、商業取引所、銀行、プラットーサービスなどの諸市場が発達。市街地はさらに北の方へ拡大しました。

独立戦争時には主戦場となり、人口も一時半減しましたが、戦後は港湾都市として一層発展。都市開発も進み、アッシュランドスクエア、ワシントンスクエア、ユニオンスクエアなどが開発され、1811年には、北の未開発地域に、南北の12本のアベニュー、東西の155本以上のストリートによって構成される格子状の道路プランが作成され、これが今日のマンハッタン中心部における整然とした街並みとなっていきます。これは、アメリカ人とつながっています。そして、その後の都市計画でした。そして、その後の蒸気船の登場と、1825年のエリー運河の開通が、この街をヨーロッパとアメリカ東地域とを結ぶ要衝として一層発展させたのです。

繁栄、そして荒廃

1820年には1万5000人であったマンハッタンの人口は、交通革新や工業の発展、移住者の大量流入によって一世紀の間に激増し、それに伴って北のハーレム川まで、全島が市街化されていきます。1868年には平面道路網の更新整備のために高架鉄道が建設され、1870年には地下鉄が導入。市のシンボルである セントラルパークは1876年、ブルックリン橋は1883年に完成しています。

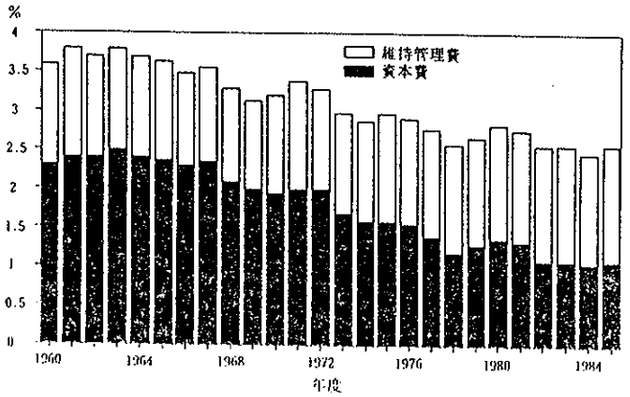
マンハッタンの人口は1890年には233万人を数え、移住者が住みやすいローワー・イーストサイドはみるみるスラム化し、貧困、不衛生、犯罪が発生し、この地区の死亡率が全市の20%を占めるという状態でした。しかし、移住者たちは、いつかは成功してこの地区を離れ、郊外に移り住むことを夢見て懸命に働き、この活力がニューヨークを世界をリードする都市にしていったのです。1898年には周辺の4カウンティを含め、人口340万人の大都市となります。そして、1902年のフラタイアンビルを皮切りに摩天楼が出現。1931年のエムパイアステイトビルの完成により、今日のニューヨークがほぼ形作られました。

未来に向けて、着実な歩み

第2次大戦後、繁栄を続けたかに見えたニューヨークも、1970年代には失業者とマトナムの増加の渦を抱え、街のあちこちに設けられた失業者のための食事給配所には長蛇の列ができ、ホームレスがあふれ、1975年には市の財政は破産状態となり、犯罪件数増加。政策の結果、公共施設は荒れ果て、犯罪が増加。悪いイメージが定着してしまいました。

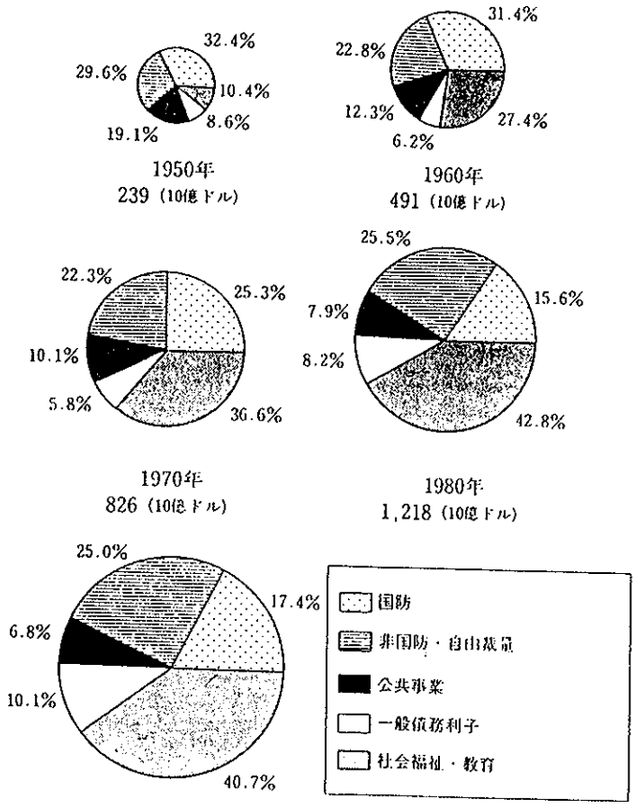
しかし、市は安定に街の再生に取り組み、1983年には財政危機を脱し、公共施設改善10年計画に着手。全業への優遇施策、先駆的なソーニング制度の導入など、ニューヨークを再び魅力ある都市とするためにさまざまな施策が実行されています。ニューヨークを必要としてやまない人々に支えられて、この街は着実に回復しつつあるといえるでしょう。

図表　ＧＮＰに占める公共投資の割合

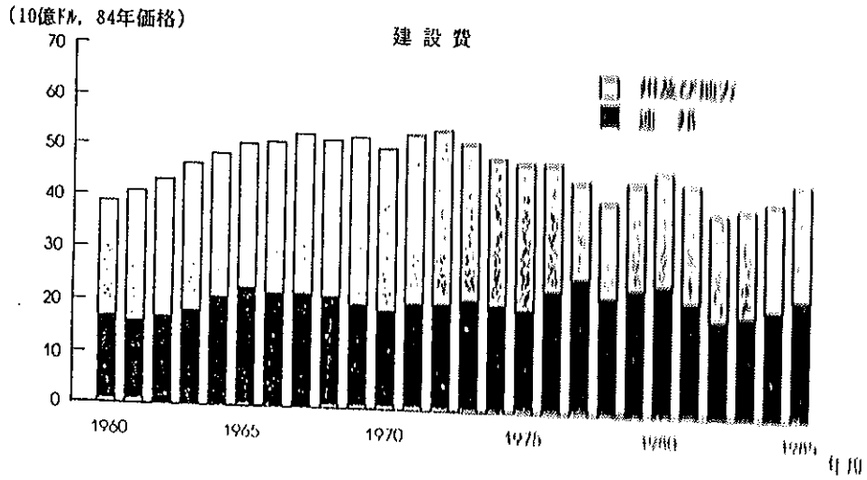


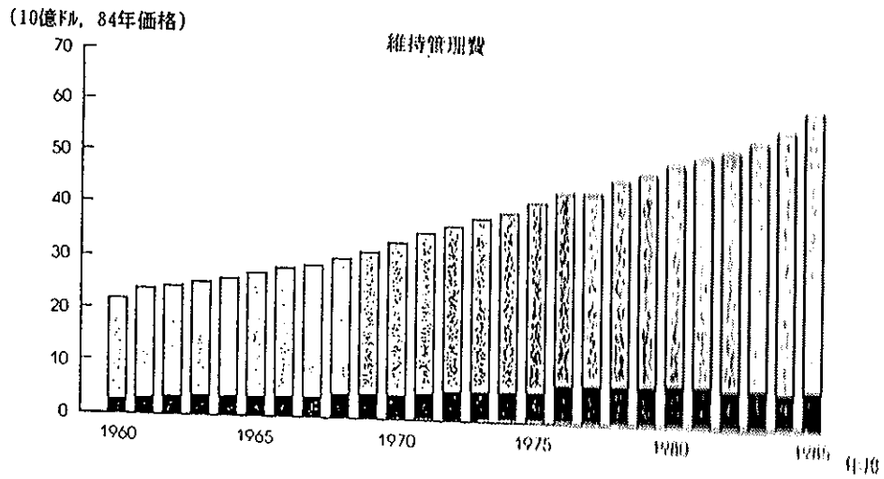
図表12　公共支出に占める公共事業のシェアの推移

公共支出（連邦・州・地方自治体）合計，1950－84年
－1984年価格－



図表　公共事業のコストの分担





図表　住宅都市開発省関係予算の推移

(百万ドル)

	総　額	CDBG (エンタイトルメント)	CDBG (州)	UDAG
1978	37,994	2,794	612	400
1979	31,142	2,752	797	400
1980	35,852	2,175	955	675
1981	34,220	2,667	926	675
1982	20,911	2,380	1,020	435
1983	16,561	2,380	1,020	440
1984	18,148	2,380	1,020	440
1985	31,398	2,388	1,023	440
1986	15,928	2,053	880	316
1987	14,857	2,059	883	225
1988	14,949	1,973	845	216
1989	14,347	1,954	880	97
1990	17,315	2,019	845	0

久保田 要●くぼた かなめ
(㈳山梨県建築士会青年部長)

1951年、大阪生まれ甲府市育ち。東京電機大学工学部建築学科卒業。

同大(阿久井研究室)の研究員として、軍艦島調査隊に参加。

現在、久保田一級建築士事務所主宰。県景観審議会委員、県まちづくりアドバイザーとして活躍中。

■高橋

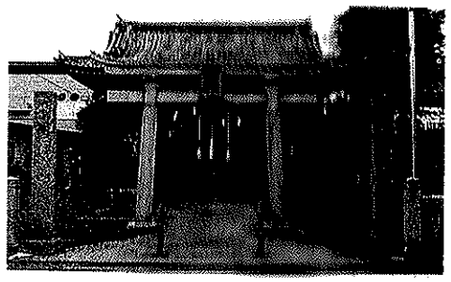
ぼつぼつ大分本音の発言が多くなってきたかと思いますが、最後に、地元で実際に町づくりにかかわっている建築家また地域プランナーの立場で、県建築士会青年部の部長、久保田要さんのほうから、『エメラルドシティーと市民建築士』をご報告いただきます。スライドを沢山お見せいただけるユニークな発表をお願いしてあります。よろしくお願いいたします。

■久保田

久保田です。立派な先生の後、地元でゆっくり亀が歩くように活動しています久保田です。

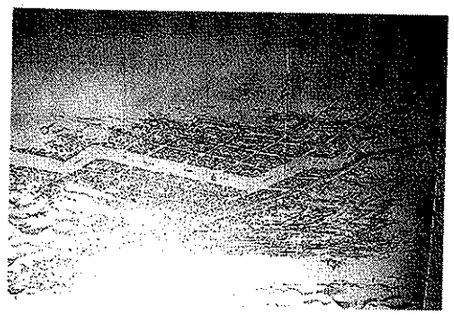
私はスライドを中心にしまして、甲府に今生活する市民として、部分を担う建築士として、市の成長過程の１シーンを私の体験で発表させていただきます。スライドをお願いします。

これは現状の甲府市の都市計画図でありますが、先ほどの北村先生のお話の中にありまして、このように現状施策されている現状です。

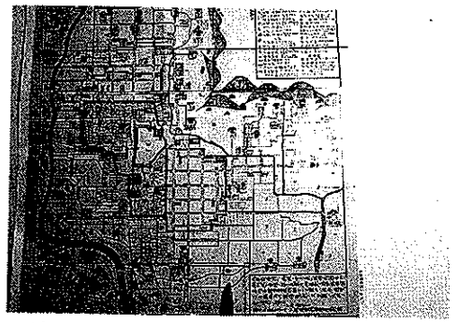


次に、これは東一条通りということで、現在シティーホールの横にひっそりと鎮座する浅間神社です。

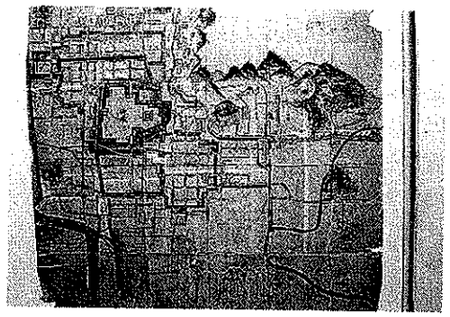
お手元の私のレジュメの１枚目に、『過去に見る地域経営』（140･141 頁資料参照）というのをご覧ください。



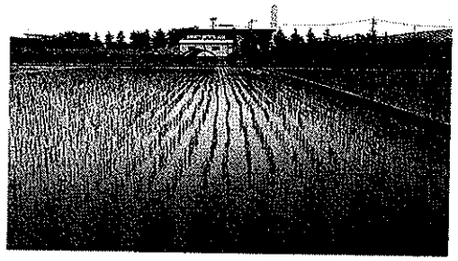
次に、これは２００年前の江戸寛政時代の甲府の町の様子でありまして、三之堀の外側に野良浅間が芒洋とした田畑の中にあり、上の太い道、あれは八日町なんですが、賑いの中の中心でありました。



次に、これは１４０年前の寛永３年の地図でありまして、甲府の城下町の地割りがはっきりと分り、鉛筆のちょうど先が野良浅間であります。上にずっと追うと愛宕山のふもとに山八幡さんというところにあたりまして、愛宕山の頂上で繋っております。

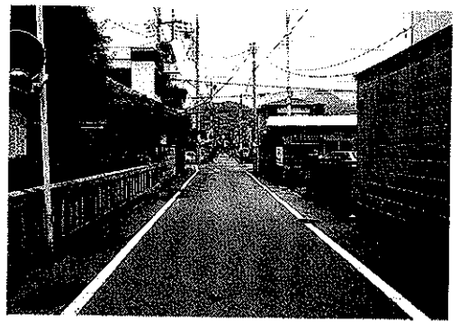


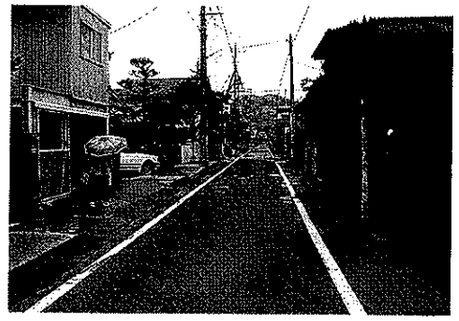
次に、この軸線が地図上でははっきり分るような地図であります。



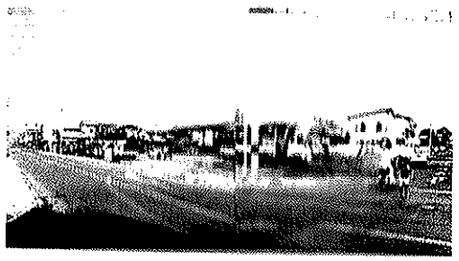
次に、何で野良浅間かと言いますと、１５８９年、今から約４００年前、豊臣の家臣で伊奈熊蔵という人間により検地がされたという史実がございます。それで、検地の中心でありました野良浅間を中心に縄打ちが始まった。そんな由緒ある場所でありまして、現代版の土地と所得税の始まりとでも言いましょうか。こんなふうに田畑の区割りをしてやったわけですね。

これが野良浅間さんの南を向いたスライドですが、女学生がいるとこら辺がちょうどシティーホールの東側の入り口になっております。





次に、愛宕山にまっすぐと伸びます景観軸としてはいる東１条通りですね。何か昔の人の体で図面を抽くと、そんなようなパワーを感じます。感想として、検地がされた中心に今のシティーホールがあり、多分市民の目には偶然にうつるかもしれませんが、私は必然的な予感を感ずるわけで、この場所性がシティーアゴラとして市民がここで会話しながら町づくりをするような、そんなふうな４００年前からやっていたいうふうな視点でみたいと思います。



次に、市民建築士としてどんなことをやって来たか、ということを個人的にお話します。個人的には建築とは人間の個人の持っている空間を繋ぎあわせるための空間づくりということで、設計ポリシーにそのようなことを入れて活動しております。

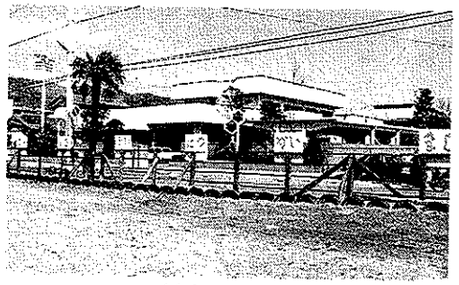
そして、自分は世のため人のために何ができるかという問に答えるべく、市民として建築に何が可能かというふうに提示を投げかけて、地域に住み込みながら建築をするという建築家像を追いかけています。

私にとっての建築は、地場産業だと確信しております。生活と生産の場は私にとって切離すことができません。私たちの生活の中に地場産業の代表的なジュエリー業界がありますが、特に今回はそのジュエリー業界の人と建築についてのお話をしたいと思います。

その一例として、無言のコミュニティーについてお話します。

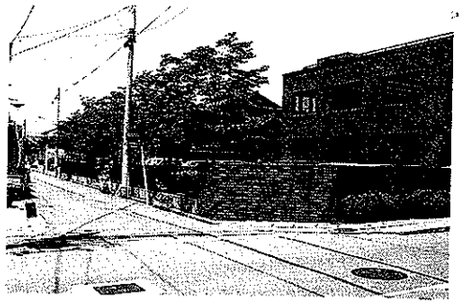
これは十数年前に設計施工を依頼されましたクライアント、ジュエリーマンのＩ氏、Ｉ社の地域に対しても、幅は広い理解があればこそのものでありますが、私たちは建築と都市とを結びつける空間を半公共空間、セミパブリック空間と呼ぶわけなんですが、それは日本古来の縁側だったり、垣根だったり、路地であったりするわけですね。皆で共有できる空間を指します。あるときにはプライバシーを閉ざしたり、コミュニケーションを交わしたり、緩衝する空間であります。

このスライドは、先ほどの野良浅間のある東一条通りより１本東へ寄った東二条通りの、昭和５３年くらいの写真で、以前製氷会社の跡地だったということで聞いておりました。また向いの土地は、地元の酒造メーカーのオーナーがひまわり広場ということで、子供たちに地域に対して遊び場として提供していたり、公共的な空間でもありました。そのような場所性の履歴書を投げかけられまして、私は地域に親しみのある空間を、この会社のために造ろうと提案しました。



これが完成した写真ですが、楠をメインに街路に暖かみのある空間と、外構をセラミックレンガでまとめまして、ところどころ透かしを入れ、街路とのコミュニケーションを図りました。それから数年が経ち、その場所に行きますとひまわり広場があったところに、ジュエリー業界のＮ社が建てられいたことなんですが、これが通りですね。

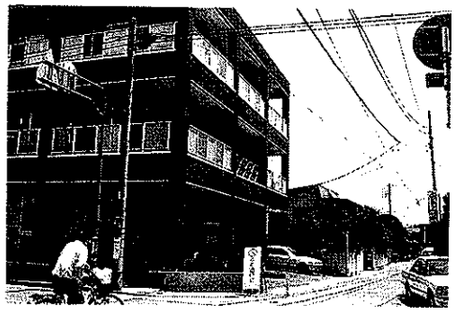
これがＮ社です。



Ｎ社の素晴らしい建築が見られていると思いますが、Ｎ社を設計されたＹ先生と

私は以前から交流があったわけでも何でもなかったわけなんですが、今でも挨拶をするくらいなんですが、何か共有できる空間ができているとは、皆さん思いませんでしょうか。何か無言のうちのＹ先生とのキャッチボールが私はできたように感じます。

また、隣にＥ社のビルが昨年でき上がりまして、サッキ株の植生の連帯性を向こうのＹ社と、ちょうどディテール面で



ちょっと暗くて分りませんが、街路に対して設計者の意図が理解できると思います。建築士会の建築士さん同志の連帯性と言いますか、何もコミュニケーションしなくても意識が通うような、そんなふうな心意気とでも言いましょうか、プロの心意気とでも言いましょうか、そんなふうな無言のキャッチボールができました。たまたまジュエリー業界で３社ともこの地域に集まっているという、こんなふうなコミュニケーションの密度がこんなふうな地域を造ったのかもしれませんが少なくともここの向こう三軒両隣は、安らぎの空間を地域に提供していると言えると思います。その空間を提供することにより街路は美しくなり、企業はその地域から良い印象を受けられるわけで、もちろん地域住民と一緒であるというコ

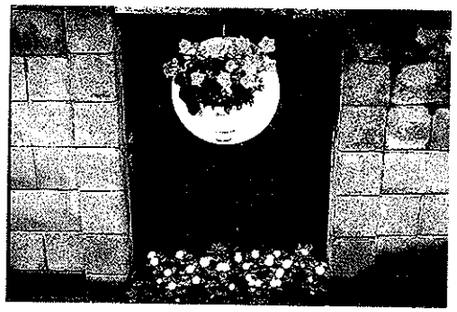
ミュニティーの中で企業デモクラシーのような姿勢が評価されるわけです。

部分を担う建築士の町づくり、無言の連繋プレーというふうに理解していただきたいと思います。

次に、その東二条通り歩道上観察してみますと、Ｕ放送局の近くに先ほどと同じような街路空間をつくっているところ

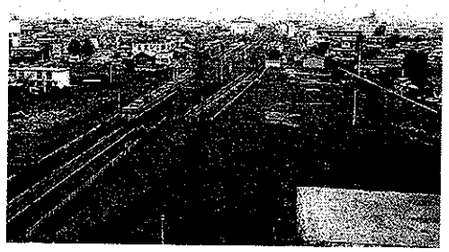
があります。これも右側にＲ社というジュエリーメーカーがありまして、地域に対して心ある気配りと建築が調和され

ているのがよく分ります。また、一般の住宅でもこのようにブロック塀ではありますが、街路に対してやわらかな心温ま



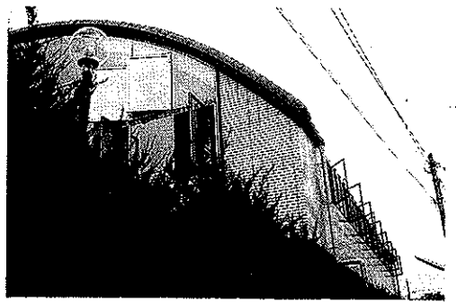
るアピールを感じるような地域であります。また、この地域一体の南甲府を中心とした地域には、ジュエリーメーカーが数十社ありまして、ここに個性を出し合った社屋づくりを展開しております。将来ニューヨークの五番街と姉妹街を結ん

でもいいくらいの自負できる内容のような素晴らしい建築が、地元の建築士さんの手によってできつつあります。

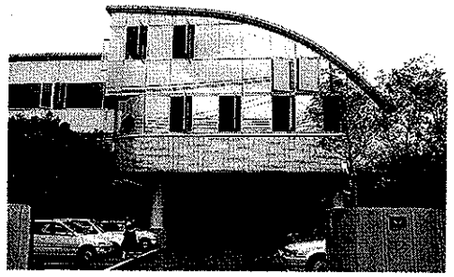


これが南甲府駅周辺で開発を待っているのか、公園にするのかどうか分りませんけれども、ＪＲ東海の広大な敷地であります。

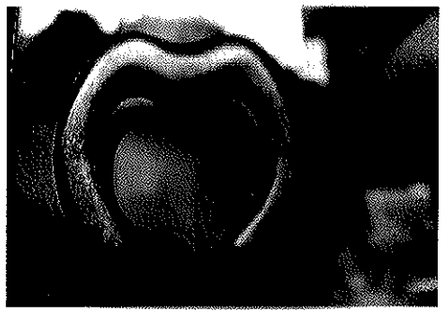
次に、都市景観と企業のＣＩを結びつけた例として見ていただきたいと思います。



このプロジェクトは地域に貢献できる企業になりたいという社長の、極々控え目な提案でありましたが、社員と会社が明るく楽しく働ける場づくりにと、地域性を大事にしようということで、高いビルよりも地域と融合できるスケール観を大切に、また業界のファッショナブルな雰囲気づくりを主張しながら計画されたものです。

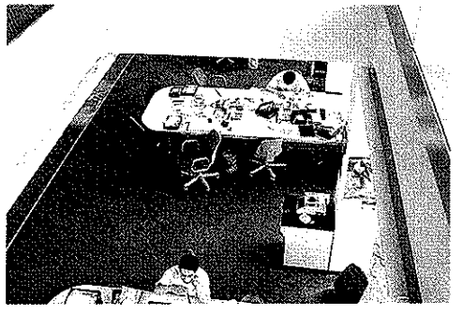


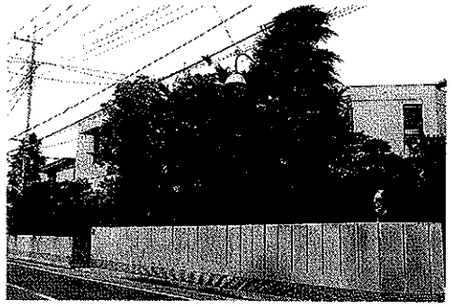
これはドアなんですが、ドアの取っ手に見られるように、地元のアーティスト３人にも協力していただきまして、自然



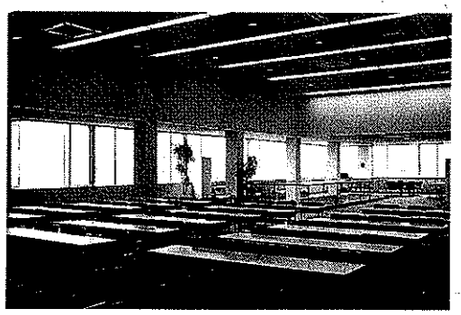
な形でのメセナ活動と言いますか、芸術活動にも寄与できました。

また、これは社内の雰囲気ですが、低層で立体的な空間の中で若い社員が伸び伸びと働いているのがご覧になれると思いますが、３階なんかでは楽で利用でき





これはその会社の街路です。木々の豊かなアピールと、あとプライバシーとコミュニティーすれすれの塀の高さ。向こうが低くて手前がちょうど１メートル５０センチくらいの、ちょうどすれすれのコミュニティーとプライバシーの塀の高さをご覧になってください。



るような天井の高いオーディーがありまして、市民と共にコンサートなんかができる場というふうな、そんなふうな提案もされております。

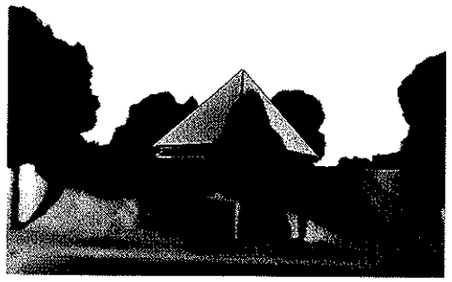
次、地域と甲府に進出される企業とのかかわりあいについて、テーマとした事例を紹介します。

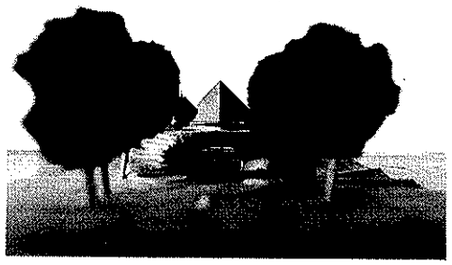
これは新平和沿いにあるＡ社という会社でありまして、本社は東京の御徒町において、甲府にはジュエリーのパーツを供給している会社であります。

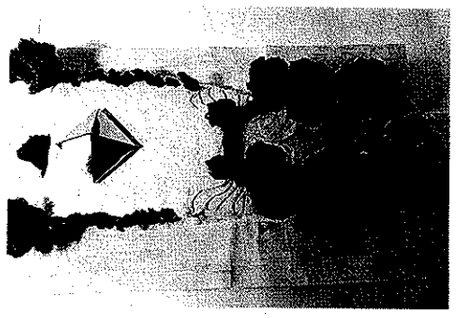
これは造る前の敷地でありますが、この場所は昔明治天皇が水を飲まれたと。地方巡業のために水を飲まれたという、一服されたという場所でありまして、御前水のいわれがある場所であります。また、甲府の水売りの発祥の地ということでもありまして、荒川の東の土手近くに位置しております。

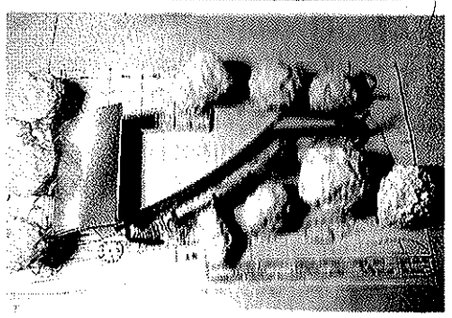
第１案として、この敷地に私が投げかけたのは、河原の中洲や土手のイメージを提供しまして、建築は地下へ計画したわけで、泉をつくり起伏のある土手公園を提供したわけです。オーナーの、この会社に来ていただき快適な空間を感じられるように地域に提供したいと。我社に来て満足して帰られる場を提供したいとの社長の合意を受けまして、水の復活と樹木による公園化を取りつけました。が、建築がないというのは困るということで、いちおう１案は没になりました。

これは第２案ということで、それではジュエリータウンにふさわしく、町のショーウインドーとして建築してみませんかと。現代アートとジュエリーのス

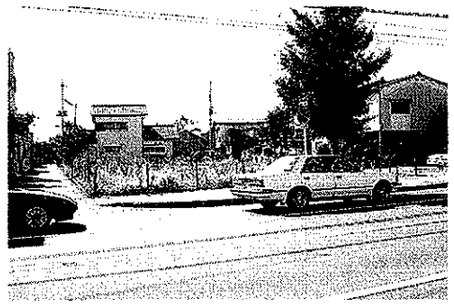


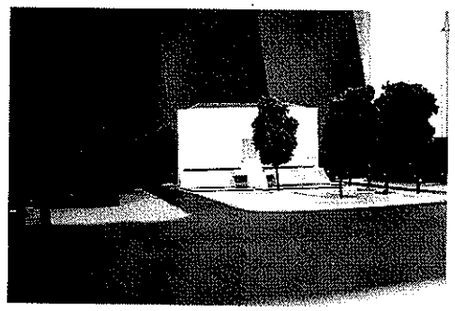




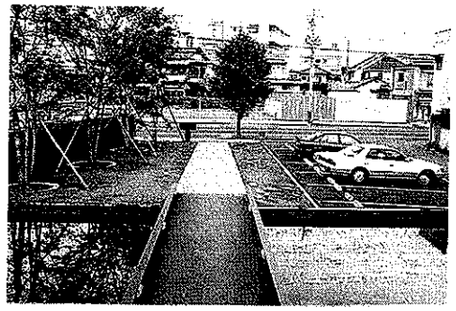


パークスペースというアクティブなコンセプトを提案させていただきまして、したんですが、この会社の性格上、うちは小売屋さんではないからということで、これも一蹴されまして、１、２案とも没になったわけです。

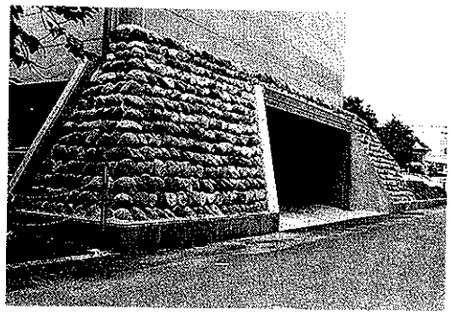




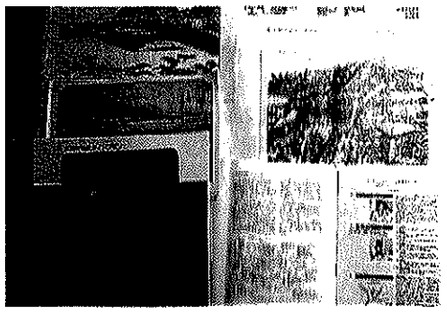
それから、第３案目にもう一度第１案に戻りつつ建築をするという、言ってみますと、１案と２案のちょうど中間的な言い方でプロジェクトを進めたわけで。このプロジェクトの特徴として、地域と企業デモクラシーの接点に大胆な公共空

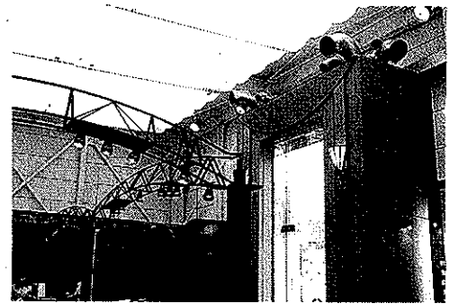


間を提供したということがコンセプトでございます。１階をピュロティーとして

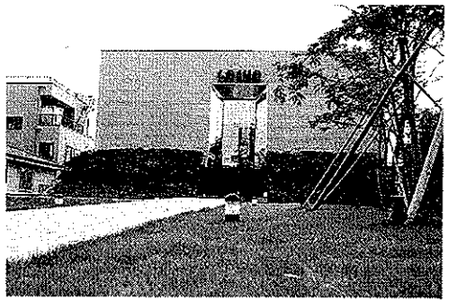


約９０％以上のオープンスペースを確保しまして、地面を最大限に利用して活用させていただきました。また、平和通りのけやき並木を受けまして、けやきによる木陰をつくって荒川の土手のイメージと野面石ですか、両サイドが野面石になっているわけなんですが、これですね。自然な素材で町並みの柔らかさをここで狙ってみたんですね。



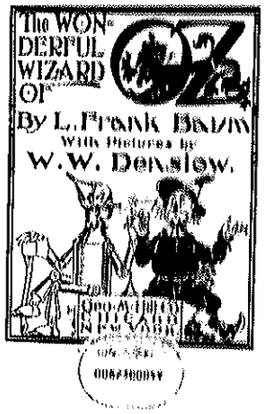


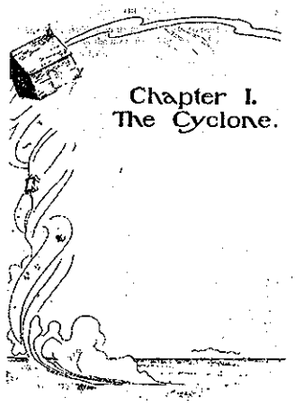
このように企業も地域性を共有できる時代に入ったと、そんなふうに思いきった提案を受け入れていただけるような時代に入ったというふうに思われます。極

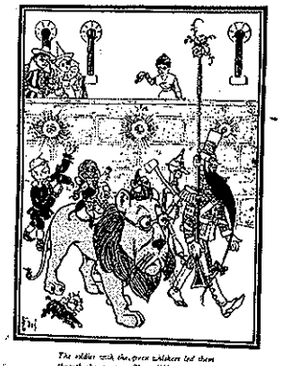


々自然な形で市民が、企業が真剣に取り組みながら、自分たちの町を、都市を美しくしようとの努力がここ数年高まりつつあるように思われます。

近ごろ甲府商工会議所のファッションタウンをはじめ地域づくりの夢があちこちで模索されております。建築士会青年部も数年前から景観ガイドプランと朝日町の町づくりと、数々提言させていただいておりますが、とりわけ、県土木部の建築住宅課さんをはじめ、多数の関係所団体には大変お世話になっております。その折々に触れられました動きを、お手元のレジュメにまとめておきました。『先に見る地域経営山梨ドリーム』（144・145頁資料参照）グランドデザインに若者たちがこんな地域にしたい、こんな事柄をしたいという具体的な提案を書いておきました。２１世紀に向けて日常的な会話の中で、市民自らが提案しプランニングできる時代背景と、その市民プランナーたちのネットワークが場を新しいコミュニティー再生の場に導いてくれる。そんな動きの高まりが熱しつつあるように思われます。町づくりは一日にしてならずと、幾多のハードルを越えて行きながら進むのだろうと思いますが。エメラルドシティーのオズの魔法つかいの

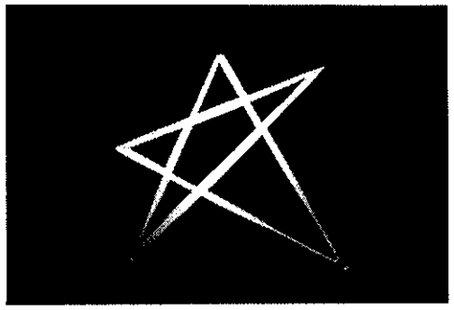






The soldier with the green whiskers led them through the streets. (Chap. XIX)

少女ドロシーのように、愛と勇気を持ってジュエリーの、また甲府を限りなく透明に近いエメラルドに輝く可く緑豊かな自然環境都市をつくろうではありませんかと。皆さんでそんなことを言っているわけなんですが、市民とこのような心を共有するために、この甲府盆地ならではのナイトカオスショーが催されようとしているわけなんですが、その動きの中で、世界宝石会議の開催とか、世界中にここにしかない盆地の小宇宙で、レーザーによる光線の魔法陣と言いますか、光の魔法人と言いますか、レーザー曼陀羅等を山梨の大切な宝でもあります、雄大な山野辺から発せられるレーザーのスクランブルショーと言いましょうか、そんな企画が今されつつあります。宇宙船コロンビア号から見ます世界同時実況放送と言いますか、地元の作曲家であります藤原俊雄氏によりまして、テーマ曲としてナイトカウスという曲に乗り、盆地がパラボラアンテナになり宇宙との交信が始まっているように思います。エメラルドシティーのその夜明はもうすぐのような気がしますが、市民と共に一緒になって経営して行く方向性としてとらまえていただきたいと思います。



日常的に外国人の宝石バイヤーさんたちが、数多く出入りされているボーダレスの県、山梨でありますが、世界都市東京に隣接する個性的な県、山梨の市民による地域経営の手法として、ある時は成長を促し抑制する。成長をコントロールする成長管理手法の確立が今望まれているような気がいたします。インフラ整備が進みながら維持管理の時代に入りますと、広域的な行政の対応がせがまれ、行政区域のボーダレスならびに都市と農村との税のリンケージ策と、グランドデザインに対してのソフト政策に、成長管理の具体的な分かりやすい手法の確立が、今望まれているんではないかなと、そんなふうに感じております。以上で私の発言を終わらせていただきます。

■高橋

たくさん具体的な例が示されたかと思いますので、また不足の分につきましてはディスカッションの中で、久保田さんのほうから補足説明をしていただきたいと思います。

それでは、電気をつけてください。

それぞれ３人の方々ありがとうございました。

すでに会場からも質問がいくつか寄せられております。若干時間が押しておりますが、本日大変素晴らしい日米の専門家をお迎えしておりますので、これから約１時間ほどディスカッションに入りたいと思います。

私の立場は、今日は地域に住む一般市民の代表ということで、率直な質問をご専門の皆様にぶつけて、議論を積極的に展開していきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

なお、今までのご講演ないし報告をお受けして、ディスカッションでは３つほどのポイントをいちおう設定してみました。

１つは、成長管理政策についてもう少し掘り下げて、ここから何を学ぶべきかという点。

２つ目の点は、長谷川さんに大分お話いただきましたが、国際化、流動化する今日の状況ですね。あるいは、そのような建設市場の動向を受けて、地方のあり方はどんなふうにあるべきかという点。

それから、第３点は、今の久保田さんが触れられていた活動ないし士会全体のこれからの方向も踏まえまして、町づくりへの市民参加の方法を考えていきたいと、この３つの点を話題にしたいと考えております。

まず、第１の論点につきまして、マーメンさんから先ほど成長管理政策の考え方、一部実例をご紹介したいただきました。都市の成長をコントロールするという考え方自体、市場経済の原理の点から考えますと、かなり成熟した社会的な了解が必要かと思います。日本の場合、都市政策の具体的な１手法としてはもちろんですが、その考え方を学びとり、多くの人々が共有することが大切に思われます。本日のいくつかのレポートをお聞きになっての感想も含めて、私たちの日本の社会における可能性についてもう少しご提言いただけないでしょうか、ということです。

それで、会場から具体的に２点ほど質問がまいっております。これも併せてお答えいただきながら、そこらへんご提言いただければと思うんですが。

まず、１つの質問は建築設計協会の男性の方から、先ほどのオレゴン州の例で、開発地域と非開発地域の線引きをいたします。その場合の法的な規制力の問題が実際どうなのか。それから、その土地所有者が開発権を譲るということで、日本的に考えますと、不公平が生じるのではないかというような疑問が素朴にいたしますが、そこらへんをご説明いただきたいということ。

第２点の質問は、建築士会の女性の方から、成長管理政策を具体的に展開するにあたりまして、幅広い地域的コンセンサスが必要だということはもちろんなんですが、その際の市民に対する教育というお話が、先ほど触れられたかと思います。その点についてもう少しお聞きしたいと。よろしくお願いいたします。

■デビット・マーメン

確かにアメリカでも、この成長管理政策には市民の幅広いコンセンサスが必要となるわけでして、先ほど例として申し上げた州は、確かに市民が無秩序な開発に非常に懸念を抱いている州であるということが言えます。そして、全米の中でも、先ほどのオレゴン州なりワシントン州、あるいはニューイングランドのバーモント、南のフロリダのように、都市化がまださほど進んでおらず、非常に豊かな自然および環境というものに恵まれ、それらまでが破壊されると、失うものも非常に多い、そういったところの人々なわけです。ですから、非常に関心も高く、活発な議論がなされ、民主主義的な手続きを経て、専門的な数々の手法を使って、こういった成長管理政策というものに行き着いたわけでして、実際にこういった動きが一般的になっているわけではないと言えるかと思います。

そして、また先ほどの話からは、市民の中でも環境保護団体の人々だけが、この成長管理政策を支持しているように思われたかもしれませんが、実際にはビジネス界も慎重な開発、幅広いコンセンサス、といったものを求めているわけです。ビジネス界もやはり将来にリスクを抱える、また、将来が非常に不透明なものであることを嫌うわけでありまして、将来への確固たる指針があってこそ、安心してビジネスも進められるというわけです。

ですから、成長管理の戦略を進めて行く上には、ビジネス界のバックアップも必要でありますし、その上で規制を進めて行くことが大切になってくるわけです。

先ほど線引きについてのご質問もありましたけれども、スピーチの中でも申し上げたように、州はあくまでも大きな目標を設定して、そして実際の線引きは各市が行うわけです。各市町村が市民との話し合いを行い、開発の線引きの地図をつくり、そのほかにゾーニングの地図ですとか、より細かい区分けの地図とかがあるわけですが、これは地元の市町村の責任でやっているのです。いったん線引きしたものは全く変えられないというわけではなく、事実、ポートランド市では昨年この境界線が若干広げられております。

先ほどの点につきましては、あくまでもなるべく公平に、公正に、だれもが益を受けるような線引き、といったものが確かに必要でありまして、そのための手法としまして、先ほども申し上げました開発権の移転（ＴＤＲ）、政府の権利の買上げとか、様々なテクニックがつくりだされているわけです。それらを通じてビジネス界、産業界の支持も得られるわけですし、また、境界線の外の農民等の支持も得られるわけです。

先ほどの、どういうふうにしてコンセンサスを得るかというご質問につきましては、例えば、ニューヨーク、フェニックスあるいはポートランド等にはフューチャーフォーラム、つまり未来を考えるフォーラムというものが市民、コミュニティーグループ等によって形成されております。ここでの会合を通じて、いろいろ知識や情報を得て、皆の経験を語り合い、そして議論を通じて非公式な形ですが、コンセンサスを形成していく。そういった活動が活発に行われているわけです。

そして、成長管理政策とか掲げられた目標は、市民によって選出された議員が投票して決めるもので、いわば法的な力を持つものであります。

そしてまた、成長管理政策について学ぶことのできる効果的な研究をＲＰＡ、地域計画協会がまとめています。これは現在のままの、何も規制をしないで開発

を行った場合に将来どうなるかと、成長管理政策を行った場合にどういうふうになるか、そういった２つを予想して対比させてみる。その研究が現在まとめているところです。それを見ることによって、どのように農地が保存されているか、あるいはオープンスペースを保ち、環境の悪化を防ぐために都市の成長を、ある一定区域内で行うとどうなるかを見ることができますので、こういったものもご参考になるかと思います。

■高橋

ありがとうございました。

単に手法としてそこだけ取り出すというより、その背景といいますか、かなり幅広い社会的な活動が伴っているということを実感いたしました。

ありがとうございました。

それでは、長谷川さんにお願いをしたいと思います。テレビでも大変お馴染みの長谷川さんですから、土地問題について伺いたいということがたくさんあります。また、会場からもその点の質問も若干寄せられていますが、今日の話等を聞きますと、先日テレビに出られた時の発言よりも現実のほうが、もう国際的な規模でどんどん状況が変わっているんだと、そこらへんの時間の動きの中での生き生きとしたご報告が先ほどあったかと思います。

それで、一つ今日は都市の成長管理という点に関して、時に経済の成長の速度を抑えてまでも生活のクウォリティーを大事に優先すべきだと、そういう発想ですね。今日では広く環境問題への関心と共に受け入れられている時代的な要請でもあるかと思います。いわゆるコントロールの時代に入ったんだという認識です。そういう状況の中で都市の成長管理政策というものがどんな意味を持っているかということを一つ、長谷川さんのお立場から位置付けていただきたいということと。

もう１つは、先ほどの基調講演の中にありました、我々日本の社会のパブリックなモラルに対する金権体質とまでいかないですが、我々が実際よく知っている現状の体質の中で、果たして成長管理ということがあり得るのかというとこらへんを、その２点をお話いただければと思います。

■長谷川

成長管理というか、クウォリティーライフに対して量的にその分野が増えていくのは、これは一向に構わないことだと思うんです。やはり良い町に住みたい、良いものを食いたい、良いものを着たい、これは当り前の話だと。良い家に住みたい、広い家に住みたい、環境の良いところに住みたい、このこと自体は当り前のことなんで、結局量をどううまく分配するかという話だと思います。成長を抑制するんじゃなくて、成長をうまく配分するということだろうと思うんです。そういう知恵だと思うんですよ。だから、これはコントロールというふうに見る必要はない。いわば背の伸びることを押えるんじゃなくて、うまく成長することを助成するということだろうと私は思うんです。

私１つ、例えば甲府とか山梨を見る時に、成長管理政策で山梨県のアイデンティティーを維持するために、あるいは歴史性を維持するために、実は東京のコントロールをして山梨県が伸びるんだと、こういう話にもし成長管理政策をとるというと、若干これはおかしいんではないかという感じがします。いずれ首都圏全体で、例えば非常に正直に言ってみて、東京都甲府区になってどこが悪いかというそういう見方もあるんだろうと思うんです。これは私はちょっと言いにく

いことなんですが、やはりこの山梨県の持っているいつも歴史的なハンディーがあるんだと思うんです。甲府さいしょうがおりましたが、常にそれはセカンドハンドで、バックアップ機能しかなかったわけです。それから、甲州街道が裏街道だったし、富士山を見るのも裏富士だと、こういうふうに見てしまった歴史的なハンディーもあったでしょう。それから、甲州というのは関８州とは違うんですね。上総・相模・下総・上野・下野という８州がありますけど、甲州というのは関８州には入らないです。しかし、いずれにしても、甲信の甲というのは常に中途半端な位置付けにずっとあったんです。今でもあるわけですね。私の子供の頃は山静という山梨と静岡という組み合わせでした。これは野球の大会も山静大会で、私静岡ですけど、山静でだしておりました。その時のアイデンティーがいつの間にか消えてしまったような感じをもってます。

もっぱら東京にいかにクロスなんだと。それは東京の懐に入って行って、要するに東京都甲府区になるんだと、こういうのがベースにあるんだと思うんですね。そういう中で、実は山静の縁が切れたと思うんですね。

私は将来のことをよく考えると、例えば、富士山一つ見ても、これだけの広大なポテンシャルを持っているのを、北半分の山梨と南半分の静岡で分けて見るというのは、大変ばかばかしい話だと思うんです。やはり、静岡、東ともうすでに東京への取り組みは非常に激しいわけですが、そのへんと一体になって、リニアにしても、何も関西に続くんでなくて、ぐるっと一回りして、静岡で回して御殿場のほうを回して東名へ下ろして、いわば大環状線を山梨・静岡と神奈川でつくるというほうが、もう少し現実性はあるし、将来にとって有効じゃないだろうか。

やはり、山梨というのは確かに正直言って、人口は世田谷区より少ないんです。世田谷は９０万ですから。甲府は目黒区より少ないんです。目黒区は２２万ですから。ずれにしてもちょっと少ないんです。その程度のポテンシャルだということも、またこれも理解しなければいけないんで。そういうことじゃなくて、歴史的なハンディーをこの際ひっくり返すんだと、いう勢いは結構なんですが、何しろポシビリティー、可能性だの何だということを考えると、私はやっぱりもうちょっとグローバルで見て、東京都甲府市でも構わないと。あるいは　山静連合でも、一つの大きな首都圏のリージョンを、リングを描いても構わないと、むしろそういうふうに向かうんだと、いうことが地域の展望にとって必要ではないだろうかと、いうふうなことで、私は静岡の出身ですので、せひ山静と組んで、やっぱり相模と江戸と武蔵と、外に実は新しいメトロポリタンリージョンをつくって行くと、そのためのポテンシャルは、富士山の広大な、富士山の面積というのは東京都より広いんですから、そういう視点が成長管理政策の前提としているんではないかというふうに思います。

それから、モラルについては、私もいずれにしても日本人のモラルというのはせこいです。要するに、拝金主義とか拝都市主義というがまかり通っちゃったんですね、この３０の年間で。それは実は、甲州商人をその代表だと思うんですね。多分甲州商人、戦後に一つの商業モラルを少し崩したのは甲州商人じゃないだろうかと、ひそかには思っているんですけど。小佐野さんもいますし、小林中さんもいますし。そういう場合は日本人が持っているポテンシャルは、物をつくることのポテンシャルであった時代は良かったんです。ところが、商人というのは、物を動かす、あるいは物に利ざやを取ることについての商売になってしまったと、いうところに近江商人と甲州商人の問題があるんで。やはり物を動かす、利ざやを取るということ以上に、もっとプロダクディブティーがあるものを考えるということが、やっぱり一つのモラルを回復することじゃないかと。要するに甲州商人も大いに結構なんだけど、それなりにまた別の意味でのビジネススタンスがいるんじゃないかという考えであります。

■高橋

もっとプロダクティビィティーがあるものを考えるということですね。

お隣の静岡から見た山梨ということで、非常に的確な議論が昨夜もはずみまして、また後半ちょっとそこらへんの議論も展開させていただきます。

さて、北村さん、先ほどの発表で約４００年前からの甲府の町の形成史が、地図を見ながら、総体的に理解することができました。

私ごとですが、私の祖先は約４００年前関西の堺からまいりまして、私の家の屋号は『堺屋』といいます。いわゆる甲府のちょうど今の旧市街が勃興する時期ですね。その時期にこちらへまいった商人の末裔であるということで、先程の地図の推移にも感じるものがあります。

さて、注目したいのは、戦後の郊外への急テンポの拡大の中で、中心部が相対的にポテンシャルを低下していく、それが非常に顕著になってきているということで、盆地全体へ広がっていきつつある昨今の空洞化と申していいんでしょうか、そういう問題について触れてほしいんですが。多くの地方都市でも同様の指摘ができるのかどうか。とすれば、山梨の問題に限らない非常に一般的な問題としても語れるかと思います。

北村さんの方には、マーメンさんのご提言のような成長管理政策の観点も含めてちょっとお話していただきまして、久保田さんの方からは、実際の空洞化の状態を体験的にお話願えればと思います。

最初、ちょっと久保田さんのほうから手短で結構ですが、空洞化の問題について触れていただければと思いますが。

■久保田

空洞化という問題は、~~甲府市~~町の中にもありますし、山村の中にも同居していると思います。一面的に都市の空洞化だけで語られる問題ではないとは思いますが。

ちなみに私のレジュメの中の２枚目に、『今見る地域経営』（　　頁資料参照）というのがございますが、その中で町の中の空洞化はどうするのというふうな言い方で書いてあるわけなんですが、これは私たち８６年に、建築士会青年部でまとめました朝日町の町づくり提案というのがございます。これは手弁当でつくった報告書でございますが、商店街の活性化というロードピア事業ですね。交通網体系の予算とリンクして、商店街活性化ということに合わせて報告させていただいた事業でございますが、その中で、私の提案の中に、単なる商店街だけの問題ではないんじゃないかと。何で空洞化ということなんですが、住むのに不便だとか、駐車スペースがないから面倒

だとか、そんなものを感じながら、それぞれの人が地域をあとにして行くわけです。ここにいたんでは儲からないとか、そういう視点だけで動いて行くわけで、流通の効率化だとか、交通網体系の話でご承知のように、中心部の問屋街が流通センターへと、法律的に流通業務団地という法律を適用されて開発をされたと。その中で、出て行ったはいいんだけど、中にいたポテンシャルがどんとおっこってしまって、その後の計画が何もないまま時間を経過しただけに過ぎなかったと。そんなようなところで、その時点からそのあとをどんなふうに経営化だとかと、効率化だけでなくて、地域をどんなふうに経営するかというふうな視点があれば、その空洞化というのはなかったんだろうと。先ほどの成長管理の中でも言われましたけど、商店主みずからそこに住みたいという環境をつくると、そういうところから発信されるべきものであって、快適で、健康で、幸福だと感じられるような、そういうふうな空間をつくっていこうと。商売だけの空間であれば、新宿区に見られますように、オフィス街ばかりだったり、中央区にも見られますように、そんなふうにオフィス街になってしまって、そこに人がいないわけなんですが、人がいなくても儲かればいいかというと、それで都市は成立しないわけですが。そんなところで、都市というのは人が集まっていろいろなものがミックスされて、コンプレックスされて成立するものだと、そんなふうに私は理解しているわけなんですが。

そのような見地に基づいて、今８６年の提案ということで、皆で土地は売らないで一人一人の力は小さいんだけど、こんなふうに複合的なミックストコンプレクスの提案をすれば、自分たちが出資すれば、こんなふうな屋外空間もできます。そして、商店街の自分たちによる自力的な経営もできますと、そんなふうに駐車場もたっぷりとれますと、こういうふうなパブリックな空間を公園をつくりながら、なおかつ地域に対して快適な空間をつくるという手法を盛り込んだら、そこには容積率のボーナス制度だとか、アメリカで見られているような管理政策の何かしらが、今の行政に施策として落し込まれれば、中央部の活性化に繋るんではないかと、そんなふうな提案をさせていただいたんですけれども。

右側に昨年度から建設省の方で不動産の投資信託の方法、都市開発事業の方法と、組合の方法と、２つメニューがありますが、これはごく大規模な開発に関しての、土地が上がったから、それに対しての宅地供給のための手法というふうなとらえ方もできるわけなんですが、もっと小さな意味で、自分たちでその地域を経営するんだと。呼び水として外国人の言葉を借りて大店法をカットして、それで町をどんどんつくりかえていくと。何かそういう虚偽でなくて、自分たちが自らが経営してくと、そういう発想からプランニングをつくっていかなければいけないんじゃないかと、そんなふうに思います。

■高橋

ありがとうございます。

かなり具体的なコーポラティブな取り組みが各地でもあるようですね。最近、新聞等でもよく見ることがあります。

それでは、北村さんの方から、もう少し総括的な話も含めてご提言いただければと思います。

■北村

甲府の町の空洞化の問題ですが、一番の原因は車だろうと思っています。輸送方法が大量輸送のバスから車に代わったこと。また甲府市の都心部の再開発に投資するよりも、郊外部に道をつくった方が効率が良いということ。この２つから政策的に郊外拡大化をおそらくやってきたことだろうと思っています。それによって、郊外から都心までおよそ３０分以内で車で行かれるようになりました。ということは、商業的にどこへ立地してもいいですし、オフィスもそうですし、ほとんど甲府のどこでも立地条件が変わらない事態が起きてくる。そうすることによりまして、都市を拡大させながら、今まで甲府の町中の手狭なところに住んでいたり、あるいは非常に狭いところをオフィスとして使っていた。しかし、庭も広い庭の家、広い土地が欲しくなる。その希望から郊外へ移転して行くわけです。そういうことで、おそらく甲府盆地へどんどん拡大して行った。土地が安かったということも１つの理由だろうと思います。

当然どのあたりまで拡大をするかという、市街化調整区域の線引きについては、かなり過大に市街化区域が設定されて、どんどん盆地へ広げるという方向で政策的に進んでいった。

最も大きな問題は、今は調整区域自体は非常に狭くて、甲府の市街化調整区域は、甲府の都市計画区域のほんの一部しかありません。すぐその隣には、いわゆる線引き、市街化調整区域のない都市計画区域が広がっているわけで、そこは比較的立地が自由なわけです。農振地域以外のところでしたらかなり立地が自由ですので、そこへさらに拡大をしていってしまうということが起こってくるわけです。

さらに、その外側で南側の坊ケ峰の辺りとか、甲府盆地全体に市街地が広がっていくということになると、まだ都市計画区域さえ設定されていないところもあります。甲府盆地全体を一つの都市計画区域として考えて、線引きを行っていくような成長管理をしていく必要があるだろうと思っております。そうしないと、どんどん周辺部へ拡大をしていくという事態になってしまう。

もちろん、都心部も都心部から出て行った施設の跡地は、ほとんど駐車場に代わっていくんです。ですから、都心部をどう変えるかという考え方、新しい都市をどうつくるかという議論や、あるいは、どこまで拡大していったらいいかという議論も十分ではなかったというふうに思っております。それが空洞化に繋っていったと思われます。

■高橋

ありがとうございました。

最後に、この論点で早田さんにお聞きしたいと思います。アメリカでの成長管理政策が現実的に受け入れられるまでの成熟過程では、大変な試行錯誤があったようだということは、いろんな本で我々も承知しておるんですけれども。１つは具体的にその成長管理政策の様々なリンケージ政策とか、きめ細かな対策を比較検討しなければいけないんですが、いろいろ聞いておりまして、やはりその背景となっている、例えばボトムアップの基本的な向こうの社会意識の違いのようなものを、まず感じるんですが、そこらへん先ほどの話と絡めまして、ちょっとお話いただければと思います。

■早田

先ほどの話でも申し上げましたように、アメリカの社会は、結局移民たちが自分で政府をつくったわけですから、そのへんが一番根本的に違う。自分たちがそもそも集まって、無政府状態よりも政府があったほうがいいということで、自分たちがつくった政府。したがって、これは自分たちがコントロールしていくというのが当り前の発想になるというよう

なことがあるわけです。
それで、先ほどちょっと舌足らずだった点があるんですが、日本の一番のこれからのアドバンテージで先ほど金があるあると、いかにも日本は金だけだというような言い方しましたけども、要は日本は市民参加がまだまだだということはよく言われますが、こんなに公共的なものに税金をジェネラスにと言いますか、無批判にとまでは言いませんけれども、ちゃんとお金を出してくれる国民も珍しい。つまり、お金を出す考え、用意はあるわけですね、市民の側に。お金はまだまだ公共的なものに出す用意はあると。金だけ出して口は出さないという手はないんでありまして、これはちょうどアメリカは本当によく口を出して、財布の紐は固いという感じはしますが、日本の場合は、財布の紐は比較的ゆるいとは思います。特に税金関係ですね。特に何に使われているかあんまり気にしないでも、税金を払える。実際額も数字が高いわけですけれども、そのお金がどう使われるか、それで何をするのかというのが、もうちょっとコントロールの目を光らせるようにするというのが、今後の自然な行き方だと思います。
それでほかのところに行ってこういう話をしますと、だから日本はだめなんだということで終わるわけですが、どうも甲府のケースに当てはめて言いますと、例えばマーメンさんがどうも甲府に来るらしいという話が、いきなりこういうような大規模なシンポジウムに展開したり、特に地元の青年部の皆さんの盛り上がりが、ほかの町と違うと言いますか、ここまで来る盛り上がりというのが、ほかとはちょっと違う、このへんがその核となる。日本全体そうですが、行政に対する不信感というのはまだないと思うんですね。お金は出しますから後は行政のほうで勝手にやってくださいというのが、一つの行政に対する信頼の表わし方なんですが、やり方として、お金も出しますし私らの考えも言いますから、手に手を取り合ってやっていきましょうという、そういう理想的なもっていき方が、根づく可能性があると思います。

■高橋
ありがとうございました。
成長管理政策の具体的な検討というものは、これからそれぞれの現場のそれぞれのジャンルの中で掘り下げていっていただきたいと思います。

それでは、第２の論点、国際化、流動化する今日の状況のなか、とりわけ建設市場の中で地方はどうあるべきか、という点に移りたいと思います。
まず、長谷川さん、先ほどのご発言とも重なってきますが、いわゆる日米構造協議の中にも盛り込まれております、９０年代の１０年間で公共投資４３０兆円の、いわゆる巨額投資についてですが、従来の発想や制度の延長で考えますと、いかに巨額な投資といえども、高い用地買収に吸収されてしまうとか、あるいは新たな土地、地価上昇の問題、あるいは深刻な労働力不足等、様々な問題が懸念されております。
今日は行政・県・市町村の方も来ておりますし、この地域での指導的な経営者の方も見えております。とりわけ、バブル経済以降の先ほどお話くださいました状況の中で、地域の産業にかかわり、またそれを支える立場の方に、地場産業とのかかわりでどんなふうなお話ができるか、そこらへんをご提言いただきたいと思います。

■長谷川
４３０兆、早田君の話にあったとお

り、いわゆるぼやっとした話なんで、それがローカルにどういうように影響してくるのか、あるいは産業にどう影響してくるのか、正直言ってだれにも分からないというのが実態だろと思うんですね。
４３０兆自体は、これは象徴的な数字なもんですから、かなり大きめに見てますが、実は成長率からすると、せいぜい５％位の成長率なんです。それ自体の成長率からすれば驚くにたえないというか、まあまあノーマルな数字なわけですね。４３０兆は１年間に４３兆、今は大体３０兆の投資をしていますから、せいぜい１．５倍位のところなんですね。そういう意味では、余りにも数字そのものに驚くことはないだろうと思うんですね。
ただ、最初に私話しましたように、日本の公共投資というのは、実は建設というのは３分の１を占めるわけです。建設投資自体がＧＮＰの１９％を占めるわけです。アメリカは投資がＧＮＰのせいぜい８～９％、さらに社会資本はそのうちのさらに３％位ということですから、雲泥の差があるわけですよ、我々と。
実は、社会資本投資について、日本くらいむやみやたらに金を使っている国はないというのが現実なんです。その地域にとっても、ストックを問題にするんじゃなくて、実はフローを問題にしているんですよ。いかにして地域に金が流れるかというのは、特に発展途上県においては、いかにして中央から金を持って来てばらまくかと。ものを造るんじゃなくて金をばらまくことが主体というのは、これは偽らざる事実だと思うんです。
実は、公共投資についてもこういう話がまつわりついているかぎりは、まだまだ公共投資の本来の目的が達成できない。こういう考え方があることは、私は否定できない。どうも建設業会については特にこの考えが強いと思うんです。もちろん建設学会、建設協会も建設にかかわっているところはみんなそうなんです。フローをあてにするわけです。ストックをあてにしていない。実は、これからはフローじゃなくてストックをあてにしなければだめなんです。どういうストックを積み重ねるということは、建設業会の役目であるし、設計事務所の役割なんです。それをいかにしてフローを大きくして金が流れて良かったなと、いう話にとどまるかぎり、私はまあまあ従来型のことに終わるんではないかという感じに思ってます。

地場産業にとってみても、いかにして有効なストックを積み重ねるかと。そのためにはやっぱり土地問題ですね。４３０兆の金の半分が途中で流れてしまって、実際に建設業会に渡ったのは半分だというんでは、何ともならない。
今東京では用地費が８割、９割を占めているわけですね。山梨では３割位いっているかもしれませんね。そういう社会が果たして健全かどうかというと、大変不健全だと。例え話をしますと、用地費は万札でまいているんです。工事費は千円札でまいているんです。設計料は１００円玉でまいているんです。そういう社会が果たして良いかどうか、やっぱりベーシックな工事費が１万円札で、用地費は１００円玉で、設計が千円札でと、こういうふうな概念が４３０兆のベースでなければ、所詮は１万円札で横ず

らをはって公共事業をしましょうという意識が、地元側にも、それから行政側にある限り、所詮はこれは対したことにはならないと。２１世紀になってもさほど変わらないというのが私の考え方です。

■高橋
分かりました。
マーメンさん、しばらくお聞きいただきましたけれども、少しマーメンさんに聞いてみたいと思いますが、『世界都市東京の創造』の中で、東京は単なる世界の金融センターのストックとしてでなく、いわゆるコスモポリタン化、ホームタウン化をしなければいけないと発言されておりまして、大変話題になりました。多様な人々が住む歴史的文化的にも魅力ある町ですね。成長管理政策の中での、という狭い意味だけでなくて、多くの人が期待している都市の姿の一つかと思います。
その東京の圏内にもう山梨は属しているわけで、東京マネーの無秩序な流入に対する懸念というのが素朴な問題として、また現実的な問題としてあります。ただ、何と申しましょうか、長谷川さんの言い方を借りますと、インターナショナリズムとか、グロバーリズムと相反するまたローカルアイデンティティーと、その両方を一緒に期待してしまうような相矛盾した気持ちも、よく整理されないまま多くの方が持っているという現状もあります。
そのような観点からアメリカでの、地方というものを若干ご紹介していただきながらお話願えればと思います。

■デビット・マーメン
私はローカルアイデンティティーとインターナショナル、国際化というものは相反するものではないと考えます。多様な社会を形成し、いろいろな国籍の人々を受け入れていく。観光客でなく地元に外国の人が根ざし、暮してまた働く。人々を受け入れていく上で、必ずしもローカルアイデンティティーを捨て去るという必要はないのではないでしょうか。
でも、ローカルアイデンティティーを、いわば村の社会を形成する何か一つの気持ちと言いましょうか、そういうものとしますと、国際化というのは、必ずしも全く異質なものが来て、ローカルアイデンティティーを侵略してしまうというものではないと思います。
国際化は、別の国の別のローカルアイデンティティーを持った人がやって来て住み着くということで、ローカルアイデンティティーの、いわばモザイクのようなものが形成される、そういったことなのではないかと思います。
ある意味では山梨県の国際化というものは、まず県の枠を取り払った「国内化」というものから始められるのかもしれません。先ほど長谷川先生のご指摘がありましたように、まず静岡県との交流をもっと深めるとか、そういった、いわば国際化の一歩であると考えます。
また、山梨としましても、より野心的になり、外国の企業を積極的誘致していく、そういったことも可能ではないかと思います。
数年前に野村証券が、日本および外国の企業について、どこに本社を立地するか、あるいは工場の機能をどこに立地するか、という調査を行ったことがありますが、日本の企業の大部分が都心志向であったのに対し、外国の企業はそれほど都心志向が強くなく、より生活の質の高い混雑を避けた東京の都心以外の場に、２３区内それよりもさらに郊外のほうに移転したい、そういった意欲が外国企業のほうがより強いわけです。ですから、当然山梨県もその射程の圏内に入ってくると思われますので、一つその辺もお考えになってはいかがでしょうか。

■高橋
ありがとうございました。
若干論点を広げますが、４３０兆円の投資の目標のポイントの一つに、昨今言われていることで、多極化した構造を持った国土計画というものに寄与するような投資をしなければいけないと。そういう掛け声だけならば異存はないのですが、個々のプロジェクトを詳細に検討していきますと、その評価はなかなか一様ではありません。
我々がよく知っているところでは第三次全国総合計画、三全総における地方の時代のアピール。それから、現在１９８７年より動いております四全総ですね。多極分散型国土をという言い方。そう言いながらも、一方で世界都市東京への一極集中という要請は、やはり現実的なものとして国際的な要請もあり、また地方から見ると、東京へのアクセスというのが大きな課題になっております。
一般市民の立場から考えても実にいろいろな疑問、議論があるように思えてなりませんが、とりわけ交通のネットワーク、先ほどお話した関係上、そのような点と絡めて、北村さん、何かご提言願えればと思いますが。

■北村
先ほど申し上げたような、高速の国土幹線の交通ネットワークを国家プロジェクトで整備するということは、やはり一極集中になる。私もマーメンさんがおっしゃったことはそのとおりだろうと思うわけです。なるべくこれからの社会は、移動しないでローカルで暮しができる。あるいは成立できる企業経営のあり方を考えることが重要あると思います。通信も交通の一つだと思いますので、情報通信のほうでの対応とかを考えてネットワークを組んでいくということが必要だろう。さらに、ランクの低いローカルのネットワークのほうをむしろ重点に考えて、それぞれの地方の都市を、まず隣の都市同士を結んで行くような、そういうネットワークを重点的に考えて行くということが必要じゃないかと思います。経済発展のための一極集中はそれなりにおそらく起こるだろう。その一方で地方分散していく。地方の多極化を進めて行く上では、地方同士の交通通信ネットワーク整備を重視したいというふうに思っております。

■高橋
長谷川さん、その点に関係しましてどうでしょう。

■長谷川
私は、ローカルと中央という概念が、明治１００年以来同じ単位でやっているんですよ。甲州だけでやっていますけど、かつて甲州から江戸まで行くのに何日かかったかというと２～３日かかったわけですね。一番遠い鹿児島からでは１０何日かかっているわけですね。今２時間あればどこへでも行くんですよ。東京都庁が新宿に移転しましたが、あれは考えてみれば江戸の外へ出たわけですよ。江戸の奉行所が江戸の外へ出たわけですから、今や、例えば国家移転でもおおげさに考えることはないんですね。きわめて当り前なロケーションになるだけで、富士山麓に来るのは、明治時代に考えれば、今の都庁が新宿に行くよりはるかに近いところに行っているはずなんです。そういうリージョンの考え方が、あんまりにも歴史的なしがらみを背負った範囲内で考えられていると、それも特に甲州の場合はそれが強いような感じがしますが。そういう時代では私は少なくともないだろうと。中央だ地方だと言って

いる時代ではなくて、むしろインターナショナル単位と日本単位と韓国の単位をどうするかという話になっているはずなんで。また、ローカルな話はローカルな話で別にやればいいんで、ローカルか中央かと論ずること自体がナンセンスだと。ローカルはローカルの中で、同じ問題はあるわけですからその中でやればいい話だと。あまりにもローカリズムと中央集権的なものを対比させて議論するというのは、私はどうも中途半端というか、若干的はずれじゃないかという感じを持っています。

■高橋

考え方をダイナミックにする意味でも大切な論点かと思いますね。

時間も大分つまっておりのすので、第３の論点に移らさせていただきます。

町づくりへの市民参加の方法の模索についてなんですが、先駆的な横浜市とか東京の世田谷区なんかの例を伺いしても、ホームラン一発で解決なんていうことは絶対ないということがよく分かります。諸政策を有効に組み合わせた日常的な努力と、それを生かせる専門スタッフを含めた人材が地域に育っていることが、まずとても大切なことであって、山梨もそのような方向で努力が現在されているかと思います。私たちなりの方法を今つくりだそうということが何より大切だと思っております。

さて、マーメンさんにお伺いしたいんですが、広く世界を見、比較研究されている立場から、今日本的な成長管理政策の展開をどのようにイメージされているか、示唆的なご提言がすでにありました。市民の意見がより直接地域の町づくに生かされるような市民参加の方法について、再度ご意見をお伺いたいのですが。

■デビット・マーメン

民主主義が成熟する、あるいは市民が様々な方法によって参加することを学んでいく、それを待っていたのでは遅すぎるのではないかと思います。市民の参加と政策の形成というものは、手に手を取って進んでいかなければならないものであると思いますし、急激な都市化という現状を考えますと、今すぐ何かの手を打たなければならないと思うわけです。

ですから、まず必要なのは市民の関心ということですが、この場合の市民というのは、ここにいらっしゃる皆様建築の

専門家の方であり、産業界あるいは住民すべてをさすわけです。その関心を呼び起こすためには、例えばこちらの建築士会のような団体、自治体あるいは非営利団体、どこでもいいですから、まず導火線の役割を果たして関心を呼び起こしていくことが必要であるかと思います。

先ほど申し上げました「千人の友」のような新しい団体をつくることも可能でしょうし、その母体となる種のようなものは、もう皆様の中に一つ一つあるわけです。ですから、ほかの県の方々とも手に手を取って、その種から芽をだし成長させていく、そういったことが必要ではないでしょうか。

■高橋

長谷川さんに、ちょっと先ほどの話の中で、町づくりの主体、パトロンというものが現在の大衆社会の中では普通の人々になってくると。お話の中でルネッサンスを築いたメジチ家のような新たなニューメジチ家の出現を期待するようなニュアンスが、若干先ほど感じられたんですが、その町づくの主体という点で、大衆社会が持っている基本的な民主主義に反するような矛盾点みたいなものがあろうかと思いますが、そこらへんいかがですか。

■長谷川

大衆社会の一つの欠陥というのは、ミーイズムというか、俺さえよければいいと、俺さえよければというんで俺さえよければ集めて自分本位にどうしてもなると。それがいわば大衆の偽らざる行動だと思うんです。いかに計画をつくっても、いかに自分は逃げるかと、こういうのが大衆の偽らざる心理だと思うんですね。そういう中で、平均的な民主主義の中で、かつてのメジチ家とハプスブルク家とナポレオン三世ののような進めかたは無理だと思うんですね。ただ、一点豪華主義と申しますか、例えば都庁の建設であるとか、美術館の建設であるとか、こういったものについてはそういう大衆主義を超えたアイデンティーというのが残るというか、大衆が参加するものと大衆を超えた存在が参加するものと２つあってもいいんじゃないかと。１０％位はそういう都市づくりもあっていいんじゃないかというのが私の心理です。やはり大衆というのは、基本的にはミーイズム、俺さえよければどうでもいいんだと。これが成長してパブリックを重視するということになるまでは、かなり時間がかかるんだろうと思うんです。どうしても本音自分、建前パブリックと、こういう本質的なものについては利害。それにはやっぱりプロが意識を変えなければ。日本はプロが一番ものを壊す、建前社会と本音社会との行き来するのはプロの役目でして、税理士も建築士も弁護士も会計士も、基本的な人が建前を立てて、それをいかに壊すかということをビジネスとしていると、そういう構造というのが、どうしても私は日本社会を歪めている一つの原因じゃないだろうかと。プロが倫理感を持つ、プロが公正感を持つと、こういう社会がまず必要じゃないだろうかというのが、大衆社会でのプロの位置付けとしての提案であります。

■高橋

ありがとうございました。

最後に久保田さんにまとめていただきたいんですが、ここに住んでいる私たち、ここで暮らしと企業を経営をされている人が、自ら主体的に町づくりに参画していけば、少なくとも自然や文化的歴史遺産を消耗品のように簡単につぶしてしまうことはなかろうという、私は若干楽観的な意見を持っているんです。町づくりの主体をいかに育てていくかということについて、建築士会の活動と絡めまして簡単にまとめていただいて、このシンポジウムのまとめにしたいと思います。

■久保田

今の長谷川先生の大衆のとらえ方はまさしくそのとおりだとは思いますが、いわゆる、市長という、いつの時代も市民という視点が時代時代によってニュアンスが変わっていたんであろうと。私たちの世代といいますか、建築家でいいますと第４世代といいますか、その世代のリベラルなものづくりといいますか、クリエイティブなものづくりに対しての姿勢といいますか、そのへんが徐々に変わっているんじゃないかと。で、私たち８８年より町づくり相談室というものを開設しまして、建築士会のドアに掛かっ

ているわけなんですが、いろいろな提言、提案をさせていただいて来ているわけなんですが、今日は地元の議員さんなんかもお見えになられて、若手の次の世代を担う議員さんなんかも来ておるわけなんですが、それとあと商工会の皆様、同世代の皆様方、特に勝沼の千本格子の三沢さんや、若手のこれから伸びられる方々なんかもおりまして。先ほど長谷川さんのご意見の中に富士山州の連合構想なんかがありましたが、もう１０年くらい前からそんなことをずっと語り続けている、我が建築士会の手塚元廣氏も今見えていまして、彼独自の町づくりを吉田のほうで展開していたり。あと、デザインイヤーワークショップという３年目に入りますが、私たちと同世代の人間がデザイン立県およびこれからのデザインのあり方に関して、クリエイティブなところとデザインの部分と、プロダクトデザイン、グランドデザイン等を踏まえてネットワークを重ねております。

そんなふうな同世代のムーブメントといいますか、今までの市民とはちょっと違った市民といいますか、提案できる市民「 Not,Yet New York 」というふうにいえる市民、そんなふうな市民が育っているんではないかと。さっきのオレゴンの千人の友にも近いようなリベラルな層が、この建築士会のネットワークの中に入っているという現実があるわけなんですが、そのような人々のネットワークのインターフェイスに建築士会が、またほかの団体もオーバーラップしながらふれあって行くと、そんなふうに連合体の徐々に広がりが見られる昨今のような気がします。

そういう意味で建築士会は、町づくりに関して広く市民の皆様とこれから有意義な会話をクリエイティブな方向でトライしていきたいと思います。

■高橋

長い時間ありがとうございました。

他に寄せられました質問はパネラーの皆様とのやり取りに実質的に含まれていたかと思います。早田さんには西欧近代的な論理ではない、アジア的な発想の街づくりの可能性も伺ってみたかったのですが、若干時間が押しておりまして申し訳ございません。問題点が多少でも明らかになったでしょうか。

パネラーの皆様どうもありがとうございました。

それでは、総合司会者のほうにバトンタッチいたします。

■司会（長田）

パネラーの方々に盛大なる拍手をお願いいたします。

最後に建築士会青年部直前部長の進藤より、全体のまとめを含めて閉会の挨拶をさせていただきます。

■進藤

進藤です。

まとめというより、私のほうで御礼を述べさせていただきたいと思います。

この会を開くにあたりまして、いろんな方々からいろんなご協力をいただいております。県・市町村・士会・設計協会・その他の各種団体、また、個人の方、上からも見ていて、これは何とか残したいし、もうちょっというと、もっと奇麗にしたいと。なおかつ、その中で住んでいる人たちが、快適でいい人間関係があって、先ほど長谷川さんのお話じゃないですけど、食べ物がおいしくて、文化的な活動を皆やっていて。そうすると、僕はビジアルに見えてくる都市計画なんていうのはあんまりなくてもいいのかもしれないと、極論ですけど。そんなことを昨日愛宕山の上のほうから甲府盆地という山梨県の国中地方を見ながら感じたところです。

こんな会を通じて、いろんなご意見を聞きながら、初めちょっとマーメンさんや長谷川さんのほうからもお話がありましたように、借りものの案を、方法論を持ち込んでこの地域で何かをやろうとしても多分だめだろうと。そうでなくて、我々の地域の人間が相当国際的なグローバルな視野も含めた上で、この地域を先ほど愛宕山の上から眺めているような視点でとらえて、どうしたらいいのかなというのを、こつこつやっていくといったあたりから、次のステップが始まるんではないかなあなんていう感じがしています。

そのためにも、我々士会微力でありますけど、皆で活動していきたいと思っていますし、また、関連の方々ぜひご協力をお願いをしたいと思います。

最後になりましたが、出席していただいた皆様、本当に長時間ありがとうございました。

■司会（名取）

これでシンポジウムを終わらせていただきます。

本当に長時間ありがとうございました。

このあと懇親会に入りますが、懇親会の会場は、このお隣に支度がしてございますので、そちらのほうにお移りいただきたいと思います。本当にありがとうございました。

2) 手づくりの交流

◆それは前日から始まった◆

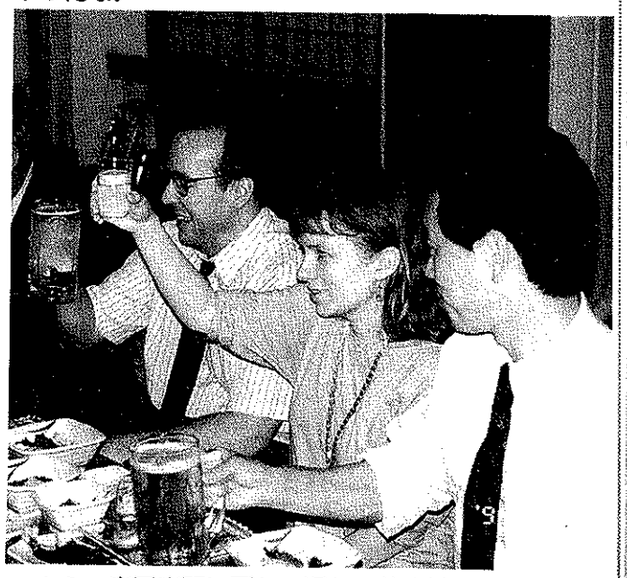
進藤　哲雄

駅前に車を乗り捨てて、待合せ場所の改札口へ行くと、鈴木さんが手を振っている。建設経済研究所の早田さんは、もう甲府に着いて喫茶店にいるとのこと。店内に入ると仲間の何人かが早田さんを囲んで談笑している。これが２日に渡るイベントの始まりだった。

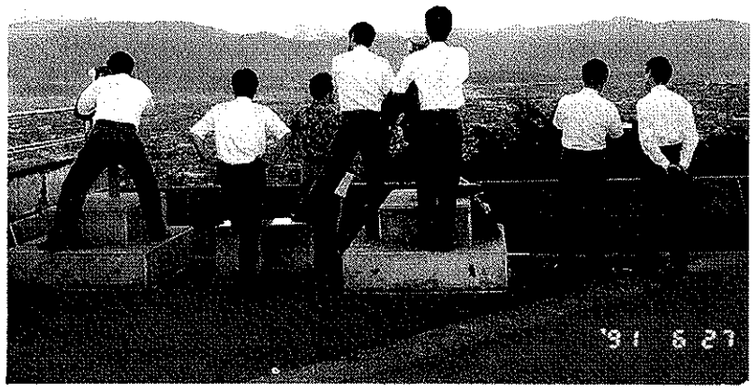
タクシーに分乗して、愛宕山子供の国に早田氏を案内する。展望台から甲府盆地の全景を見てもらうためだが、フィリピンの火山が噴火しなければ、ここにマーメンさん夫妻がいたのにと思うと残念。（日本に来る前、マーメン夫妻はフィリピンにいて噴火でマニラ空港が閉鎖され、日本入国が３日ほど遅れた）

本当にマーメンさんに見せたいと思うほど、その日の愛宕山から見た甲府盆地の夕暮は美しかった。青い夏の富士山が斜めの光をあびて浮き上がったかと思うと、数分後には甲府の街並がモヤに沈んでいたベールをサーとはずして、生活をそのままにキラキラ輝き出す。西の山々にかかる雲の間から光が幾筋も盆地の町々を照らしている。

そして子供の国全体のみずみずしい緑、ちょっとそよぐ風が気持ちよい。ウーンやっぱりマーメンさんに見せたかったな。



もう一度甲府駅に戻り、遅れて着く長谷川さんとマーメンさん夫妻をピックアップして懇親会場へ。改札口へ現われたマーメンさんは１人でどんどん出て来て、後から小柄の奥さんクリスティンがはにかみながら付いて来たのには、レディーファーストの国アメリカというイメージが強い私にとってはちょっと以外だった。



懇親会場は山梨の誇る名物ほうとうの小作。（ざっくばらんで良いじゃないかということで金山さんに手配してもらった）

２階の座敷に１０数人の仲間がデ

ビットマーメン夫妻、建設経済研究所長谷川常務と早田研究員を迎える。簡単なあいさつの後、たどたどしい英単語も混じった自己紹介が終わるとすぐ宴会に入る。マーメンさんの気取らない人柄と長谷川さんの豪快な語り口で、宴に笑いがたえない。仲間の１人がマーメン夫妻にこういった旅行中子供はどうしているのかと聞くと（マーメンさんは私達と同世代の３０代末）、プライベートでもマーメンさんをよく知っている長谷川さんがすかさず、「マーメンさんはハネムーンだ」と暴露する。クリスティンは２５歳とのこと。外見から若いとは思っていたが、ウーンとみんながうなった時、マーメン氏が来年はもう１人マーメンが増える事になると告白。エッとみんなびっくり。クリスティンは「そんな事まで言わなくてもいいのに」とはにかみながら、マーメン氏をちょっぴりにらむが、マーメン氏はうれしくてたまらない様で意に介さない。長谷川さんがからかい半分で「おめでとう」と言い、座はますますにぎやかになった。

妊娠中に７週間を越える海外旅行、大丈夫なのかという気がしたが、子供が生まれてしまうとしばらくは出掛けられないからとの事。それもそうだと納得。

明日の観光の予定をクリスティンと打合せると、マーメンさんが横で「僕は仕事、仕事、仕事．．」とすねて見せる。

そんなふうにみんなで甲州ワインを飲み、ほうとうを食べ、ハチの子やイナゴに顔をしかめながらも本当に楽しい会であった。

マーメンさんをホテルに送った後、まだざわめいている町を歩きながら、外国人とではなく、日本人と懇親会をしたような気分で違和感がない。マーメンさんとクリスティンの人柄にもよるのだろうが、日本人の感性に近い等身大の人との交流、そんな憩いの内に「前日」が終わっていった。

◆クリスティン・マーメンの山梨訪問記◆

６月２８日の金曜日、久保田さん、進藤さん、そして通訳の大沢さんに迎えられて甲府に到着しました。事前に、久保田さんは山梨県で何をしたいか、尋ねて下さったのですが、私は、もちろん富士山を見ることができればうれしい、そして特に日本の女性と知り合いになるチャンスがあればいい、と答えました。これまでにもう何回か、日本に来てはいるのですが、甲府のように中規模で成長を続けている都市を訪問するのは私にとって初めてのことなのです。

当日はまず、明治堂の宝石工場に行き、オーナーの望月さんに会いました。ここの美しいビルは、久保田氏の設計によるものです。説明を受けながら、リングやネックレスの複雑な製造工程を見学し、同行の３人の方々ともども、美しいジュエリーに魅せられました。次に、工場の隣にある望月さんのお宅に招かれました。ここもまた、久保田氏の設計によるもので、家の中には専用の茶室が設けられています。望月さんがお茶をたてて下さる間、久保田さんと進藤さんが茶道について説明して下さいました。お茶を２杯ご馳走になった後は、お宅の中を見せて頂きました。

次の訪問地、恵林寺へと車で向かう途中、山梨の有名なぶどう畑と桃の畑を見ることができました。後でおいしい桃も試食しました。恵林寺を見た後は、放光寺で特別な精進料理を頂きました。精進料理は肉が全く使われていない、ヘルシーな野菜料理です。料理の仕方も盛りつけも実に美しく、山菜や天ぷらは特においしかったです。昼食の間、くつろぎながらお寺とお庭の静けさを堪能しました。また、同行の皆さんと料理や食事をはじめとする日本とアメリカのライフスタイルの違いについて話し合いました。

昼食後、富士山へドライブし、途中の美しい風景を楽しみました。最後にトンネルをくぐると、そこに富士山が見えたのです。最初、頂上付近に雲がかかっていましたが、後で晴れ上がり、山の全景を見ることができました。富士山を見ている間も私たちは、今度は日本とアメリカの子育てや教育について、率直で興味深い話し合いを続けました。私にとっては、日本の本当の日常生活について知るユニークなチャンスだったと思います。

甲府に戻って、美術館で有名な絵画コレクションを鑑賞した後、シンポジウム後のレセプションに参加。レセプションは素晴らしかった。そして、忙しかった一日を締めくくるのにふさわしいものでした。この一日のツアーで、山梨県の「見どころ」は見て回ることができたと思いますが、是非また来て理解を深めたいものです。最後に、素晴らしいプランを立ててこの麗しい県をご紹介下さった久保田夫妻、進藤夫妻、そして大沢さんに対して感謝の言葉をおくります。

（佐藤綾子氏　訳）

On Friday, June 28, I was welcomed to Kofu by Mrs.Kubota, Mrs. Shindo, and Mrs. Osawa, who interpreted for us. Before my husband and I arrived in Kofu, Mr. Kubota had kindly asked me what I would like to doduring my visit to Yamanashi Prefecture. I said that of course I would be thrilled to see Mount Fuji, and that I wouldespecially like the opportunity to meet and get to know some Japanese women. Although I have been lucky tobeable to visit Japan several times, Ihad never visited a middlesized,growing city like Kofu.

Our day began with a visit to the Meijido jewelry factory,where I met the owner, Mr.Mochizuki. This beautiful building was designed by Mr.Kubota. I received a guided a guided lour of the intricate process of making rings and necklaces, and the four of us admired the beautiful jewelry very much. Then we went next door to Mr. Mochizuki's lovely home. also designed by Mr. Kubota, Which has its own tea ceremony room. Mrs. Mochizuki performed the tea ceremony for us, which Mrs. Kubota and Mrs. Shindo explained it for me. After two cups of tea, we also visited the rest of the house.

Later as we drove to Erinji temple, I was able to see some of Yamanashi's famous vineyards. We also passed peach trees, and later in the day we were able to eat some of the delicious peaches. After visiting Erinji, we had a very special temple lunch at Hokoji temple. There was no meat at the lunch, it was healthy vegetables beautifully prepared and served, including a delicious tempura dish of wild leaves and flowers. During lunch, we relaxed and enjoyed the peaceful temple and garden. We also discussed differences in Japanese lifestyles and American lifestyles, beginning with cooking and eating.

After lunch, we drove toward Mount Fuji, and I admired the natural scenery on the way. Finally we came though a tunnel and I saw Mount Fuji. There were a few clouds around the top, but later they cleared away and I was able to see the whole mountain. It was such an impressive sight. We drove to Lake Kawaguchi and to another lake, so I was able to enjoy many views of Mount Fuji. We also enjoyed a very interesting and frank discussion about childrearing and education in Japan and the U.S. It was a unique opportunity for me to learn about real daily life in Japan.

When we returned to Kofu, we stopped at the art museum to see its famous collection. Then we rejoined our husbands at the closing reception for the symposium. It was a festive ending for an fascinating but busy day. After my extensive tour, I feel I have seen the highlights of Yamanashi Prefecture, but I would love to visit again and get to know it better. I have to give my thanks to excellent introduction to their lovely prefecture.

（クリスティン・マーメンの山梨訪問記原文）

◆知事との会食◆

成長管理政策の紹介

パイオニアであるオレゴン州の例

＊　首都圏の拡大は、山梨にとって今重要な問題である。リニアの導入などにより、近い将来、甲府は東京への通勤圏となり、首都圏に吸収されてしまうかもしれない。何らかの対策を講じる事が必要だが、その上でオレゴン州の成長管理政策は参考になるかもしれない。
＊　なぜ、オレゴン州かというと、経済構造が山梨と似ている。（観光、農業、天然資源、ぶどう、ワイン）
＊　オレゴンの州知事が１９７０年代に成長管理政策を提唱。
＊　具体的には、区域を設定して、開発（都市化）をその範囲内に限定する。
＊　目標を設定し、市民の間で幅広く議論し、コンセンサスを形成する。
＊　区域外の住民や農民でも開発の利益を得られるように、ＴＤＲ（開発権移転）などの手法を取り入れる。
＊　結果として、オレゴンはもっとも成功した例であり、アメリカの他の州のモデルケースとなっている。

成都の例

＊　アイオワ州の姉妹州である中国四川省の州都、成都でもすでに成長管理政策が導入されている。中国では農地も貴重であるため、都市化の範囲を定め、農地を保全する事が必要。

◆道 中 記　1◆

久保田明美

梅雨の真っただ中であったが、その朝は晴れ間の見えるまずまずの天気であった。

９時３０分過ぎ、紫玉苑を出発。

まず（株）明治堂望月社長ご夫妻のご厚情により、社屋を見学させて頂き、社長宅お茶室にて望月夫人のお手前で薄茶を頂いた。マーメン夫人は茶道でのお茶を頂くのは初めての体験とのことで、お茶室でのお茶をとても喜んで、お茶も亭主の「もう一服いかがですか」との問いに応えて二服目を頂いたり、お茶菓子の美しさにも感嘆していた。

次に恵林寺を拝観した。参拝者も少なかったため、静けさの中でゆっくり庭園をながめることができた。

昼食は放光寺で精進料理を頂き、マーメン夫人は日本食で食べれないものはほとんどないと聞いて安心した。またマーメン氏は日本食が好みでニューヨークでも時々御飯を炊き、味噌汁を作ると伺った。

いよいよ、この日の“富士山を見たい”という最大目的にむかって御坂の桃、ぶどう畑を見ながら車を走らせた。「どうか富士山が姿を見せてくれますように」と祈りながら、旧笹子トンネルをぬけた。あいにく頭は雲にかくれていたが、河口湖の後方に裾野を大きく広げた富士山をながめることができた。マーメン夫人は間近で富士山を見たことがなかったので、とても喜んでくれた。本栖湖からも富士山をながめたが、やはり頭は雲でおおわれていて残念だった。

この日の最後の予定地、県立美術館へと車を急がせ、閉館ぎりぎりで名画を鑑賞することができた。

車中では、地方都市の問題、子育てのこと、学校教育のこと、性の問題等々、日本とアメリカの違いを意見交換しながら、通訳の大沢さんがのどを痛めるほど会話が弾んだ。マーメン夫人はこれから子育てをしながら、経済の専門家になるため、数学をはじめとするいろいろな勉強をすると聞いて、びっくりすると同時に尊敬もし、うらやましくも思った。

私にとって、外国人女性と身近なところで身近な会話をした（通訳を通してですが）体験が初めてだっただけに、有意義な思い出深い１日となった。

◆道 中 記　2◆

進藤　早苗

アメリカで今一番貧しいのは、ごく若い時期に妊娠してしまった女と、その子供だという話になった。先日もＴＶで「ニューヨークのある小学校の生徒の８４％は未婚の母の子だそうだ」という話を弁護士のＫ氏が話していた。「ｗｅｄｄｌｅｓｓ　ｍｏｔｈｅｒ」と呼ばれたりする、この女達は妊娠してしまったことで高い学歴が身に付かず、その結果、それなりの給料の職業にもつけない。そこで貧しい。貧しいからその子供達も教育が受けられない。だから職業が・・・と続くのだそうだ。そして、そんな貧しい女がどんどん増える原因として、性教育はどこのだれがするのかという話題になった。クリスティンさんによると、ある学校の親達は性教育をすることにより、よけいに興味を持ち、セックスに走るといけないという考え、学校では一切、そういう事を教えないという方を選んだ。そこで子供達は何も知識は持たずに（家庭で話すというのも大変な事だし）、それでもセックスだけはチャンスもあるので妊娠する。そして前述のような状況になるようだ。日本ではどうかと聞かれて娘の小学校の低学年での状況や、私と娘の会話のことなど少し話したが、宗教が私たち日本人のように「困ったときの何とやら」的でなさそうな国なのだから、もっと何とかなっていそうな気がしていたが、随分悩みの種らしい。何ごとにも個人を尊重する、すてきに自由な国というアメリカのイメージが、何か逆に作用してしまっている不幸のようなものを感じる話だった。それとは反対に、彼女のこれから生まれるまでの間に、経済学について勉強するために大学にいきたいので、その準備をするとか、生まれてから後の計画や、旦那様のお姉様が子供の手が離れたので大学に行き、法律の勉強をするという話など、環境もあるのだろうが、アメリカのインテリ女性の生き方のある面は、とても刺激的ではありました。

◆「交流会」雑感◆

建築士会副部長　佐野　正秀

基調講演、研究報告、パネルディスカッションと３時間余に及んだ心地よい緊張感を残しつつ、交流会場へと歩みを進めました。

はたして何人の方が交流会まで参加して頂けるのか。そしてまた、我々士会青年部を中心に建築関係の方（身内）だけになってしまうのではなかろうか。いろいろな不安を胸に抱きながら、ドアを開けてみました。するとどうでしょう、我々の予想以上に大勢の方が交流会の開会を待って頂いているではありませんか。町村の行政関係者の顔も見えます。商工会の青年部の方の顔も見えます。青年会議所の皆さんもいらっしゃいました。ほっとした気持ちと同時に何か熱いものがこみあげてくる中、交流会の開会をさせて頂きました。この場をお借りして、士会以外の立場で参加して頂いたお２人との交流会での会話を少し紹介させて頂き、交流会の報告とさせて頂きます。

まず１人の方ですが、R町役場のU氏です。私自身彼とは以前より仕事の関係で面識は何度かありました。偶然にも８年ぶりの再会でした。彼いわく、「建築士会という団体についても知らなかったし、まして青年部などという組織があったなんて初めて知りました。そしてまた、シンポジウムの内容等を拝見して、何かすごいパワーを感じた」と言うのです。まずもって能書きや肩書きでなく、建築に携わる若者が自分達の地域について、これ程までに真剣に考え、何とかしていこうという姿勢に感動したと、私に熱いまなざしで話してくれました。また次に何かあったら、そして何か行動するのだったら、ぜひ参加したいし、俺達もやってみたいという気持ちになったというのです。交流会で久し振りに再会した彼とこんな会話ができたことに、私自身あらためて、その意義を痛感致しました。

次に、もう１人の方ですが、M町の商工会青年部の方でした。商工会を通じ、このシンポジウムを知って参加したとのことでした。彼いわく、「何だか少し難しかったな」、でも結局、交流会まで参加してみたいと思ったそうです。今年度の商工会青年部の統一基本テーマは“個性と魅力ある地域づくりへの挑戦”だそうです。彼は私に「佐野さん“魅力のある地域”ってどんな地域なんだろうね」と問いかけてきました。とっさの質問で私にもよく分からないけれども、ただ確かに言えることは、そこに住む住民１人１人が自分の町を真剣に考え、少しでも良い地域にしていこうと思って日々努力している姿勢こそ、そして、そういう人が１人でも多くいる地域が魅力ある地域なんじゃないかと答えました。彼はうなずきながら、商工会青年部として、真に地域と密着した若者の１人として、これからも頑張ってみたいと語ってくれました。

いろいろな立場の方に参加して頂いた交流会でした。会場のあちこちできっとステキな会話がはずんだことだと確信しております。きっと次へのステップとして、価値ある交流会になったものと思います。

3)みんなの声、それぞれの立場から

◆〈地域環境〉規制から創造へ・・・“ミニ東京化”を越えるために◆

山梨ｸﾗｲﾝ･ｶﾞﾙﾃﾝ 協会
事務局長　城野　仁志

今、地域開発の意味が問われている。成長・発展の“量”よりも“質”が重視される時代になりつつある。ここ１０年来で経済的には急激な発展を遂げた我が山梨県にとって、ふるさとの“成長の質”を問い質すうえで、今回のシンポジウムは誠に時宜を得た企画であった。

地域開発を進めるうえで、地域の持つ成長のポテンシャルを量から質へと変換させるノウハウ．．．それが「成長管理政策」のエッセンスと思われる。従来我が国では、地域の環境等の質を確保するため、例えば法律によるゾーニング指定や自治体独自の景観条例づくりなど、“規制による保全”という色合いが強かった。それに対して米国で近年成功を収めつつある「成長管理政策」は、地域固有の成長の“質”についてのコンセンサスを形成し、それにより地域に住む様々な人達が皆プラス・サム（PLUS-SUM）の結果を得られたと納得できるような開発を地域各層の合意のもとに積極的に創造しようとするところに、前向きな取組の姿勢を感じる。

そうしたマーメン氏の問題提起に対し、建設経済研の長谷川氏は、山梨のような発展途上県では、まだそうした政策を行いえるポテンシャルは備わっていないと言われる。そうした見方は、東京から地方を観る多くの人々が抱き、また東京へのコンプレックスが抜け切れない県人の多くが共有する、いわれなき“固定観念”であろう。　こうした偏見を打破するには、従来型の法令依存・・画一的“規制”行政だけでは、もう限界が見えている。　もっと、地域に根差して問題を掘り起し、地域の様々な人々の“生活者の視点”に即して働きかけ、豊かな共有環境（Commons ）の創造をコーディネートしていけるような、ボトムアップ型の「行動のための連帯」（Partnership for Action・・英国の代表的な地域開発トラスト「グランド・ワーク」（Ground- Work）のスローガン）を支援していける仕組みを、そろそろ我が山梨においても真剣になって創りだすべき時が来ていると考える。

◆まちづくり国際シンポジウムに参加して◆

山梨県庁峡東福祉事務所　小野二三夫

パネラーの発言から感じたこと、示唆を受けたことを簡単に述べたい。

まず、D．マーメン氏については、生活の質を高めるために敢えて成長も抑制するという「成長管理政策」に関して、それを可能にしている「具体的方法」をもう少し詳細に教えてもらいたかった。

長谷川氏については、軽妙な語り口の中にも賛否が分かれる問題発言があって面白かった。切り出しの「都市の魅力は、（景観よりは）１に食物、２にオンナ、３なし、４なし、５に自然、モノよりヒト」の一言は何といっても刺激的であった。日頃、モール化したり、ストリートファーニチャーが設置されてきれいになった甲府市街を歩きながらも、何か物足りなさを感じていたので、私なりに共感を覚えた。外観だけでなく、そこに住み、歩く人の表情までもが生き生きと個性的に何かを語るような甲府の町であってほしい、そのためにはソフト面での仕掛けがこれからはポイントだ。

疑問を感じたのは、東京新都庁問題を一例にした民主的都市づくりの限界指摘。心情的には理解できるが、私達としてはそう言い切って済ませていいものか。問題なのは、民主的手続き一般ではなく成熟度ではないのか。市民が成熟するためにも、市民参加による議論・手続きが必要なのではないか。もう一つ疑問を覚えたのは、甲府市は首都圏の一角として、東京都甲府区くらいに割り切って都市づくりを進めた方がよいという発言。政治的・経済的連携が深まっている現在、あるいは将来において、極端に違う選択肢はとれないが、山梨の甲府に敢えて住むことを選択した者にとって、せめて自立の意地と誇りは持ちたいところである。それもひとつの個性を生むであろうから。

早田氏の発言で記憶に残っているのは、日本と欧米とはまちづくりの歴史的・文化的背景が違う、単に欧米の真似をしても根づかないという発言。特にアメリカの場合、市民の徹底したインディペンデンシィーがネックだという指摘があったと思う。とすれば、成長管理政策が市民参加を重視するのをどう考えればいいのか、マーメン氏との突っ込んだ議論が聞きたいところであった。

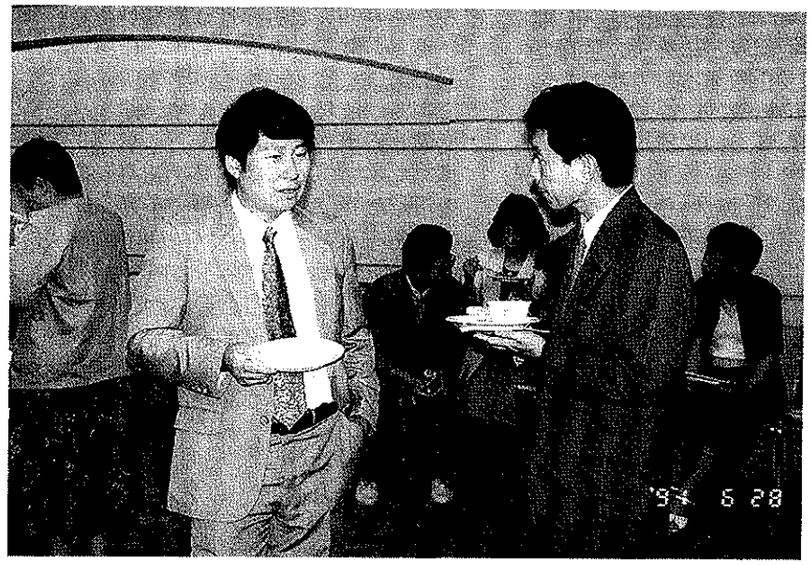
久保田氏に関しては、まちづくりにおける建築士の役割について希望の持てるヒントが得られた。それは、氏が設計した建物の近くに、それと調和した二、三の建物ができ、全体として雰囲気のある一帯となったという実例報告である。久保田氏は、それを建築家同士のインスピレーションが働いた結果であろうと述べていたが、建築家同士がまちづくりについて普段から意見を交わしていれば、クライアントの方を個々バラバラに説得しなくても、建築家同士のインスピレーションがドンドン働くようになって、魅力的なまちづくりが進むであろう。東京のような大都市では諦めざるを得ない計画的まちづくりも、建築家同士が顔を付き合わせて交流できる甲府では不可能ではないであろう。そのためにも、このようなシンポジウムをはじめとし、コミュニケーションや相互研讃を目指した、建築士会青年部活動の一層の展開を期待するものである。

◆国際シンポジウムに参加して◆

建築士会青年部　渡辺　正次

リニアモーターカーの実験線工事も始まり、山梨のまちづくりも国際レベルで話し合われるようになったと実感されるシンポジウムであった。

山梨のまちづくりを考える時、森林が多くを占めているという地形上の特質や富士山を中心とした自然環境保護問題等、難しい課題があるが、とかくハード面である道路網整備、地域地区割等が話の主役となり、ソフト面である住民一人一人の意識改革などは遅れがちであった。このような現状の中で、今回の企画は非常に意義深いと思った。



国際モデル都市の調査や研究などにより、ハード面での問題は少しずつ解決されるようになった。しかし、ソフト面である住民の意識改革を考えると、非常に大きな問題に突き当たる。これには、長い間培われてきた土地に対する特有な思い、目先のことにとらわれやすいという国民性等に由来していると思われる。しかし、この大きな問題にも取り組まない限り、よい町づくり、県づくり、国づくりはできないと思われる。

意識改革を行う上で最も大切なことは、互いに立場を尊重し、誠意をもって話し合うことであろう。しかし、現実社会において、一般に言うゴネ得や計画に無為に反対する人々に対しては、残念ながら、法規制等強い行政の指導も必要であるかもしれない。

私も今年、オーストラリアを旅行する機会があり、シドニーやメルボルンなどの町を歩いてきた。自然と人間とがうまく調和し、整然とされた住宅地の区画割等、都市計画のすばらしさを目の当たりにし、私の住んでいる山梨とつい比較してしまった。まだまだ日本は“豊かな国”とは言えないと痛感した。

今、やっと個人レベルでの豊かさに満足しつつある山梨を国際レベルにまでアップするには、住民と行政とが一体となって町づくりを行う体勢づくりがまず必要であろう。

このシンポジウムを機会に、１人でも多くの人が山梨の町づくりに対して考え、行動していけば、私達が目指す町づくりに近付くであろう。

◆「山梨まちづくり国際シンポジウム」について◆

山梨大学北村研究所　渡邊　崇裕

先般、甲府市で催された「山梨まちづくり国際シンポジウム」では、山梨県建築士会青年部の方々が運営の中心となって「まちづくり」の専門家をパネラーとしてむかえ、山梨県、特に甲府市を中心とした甲府盆地一帯はどのような「まちづくり」を目指していったらよいかについて、各パネラーから様々な意見発表及び報告が行われた。

その中で、ニューヨーク行政研究所のマーメン氏は、山梨は大都市東京のまねをしてリトル東京になろうとするのは間違いだし、不可能であろうと述べた。また、建設経済研究所の長谷川氏は、山梨は山梨県内だけを対象とした狭い意味での「まちづくり」を考えるのではなく、静岡などの近隣の行政区域なども取り込んだ広い視野にたっての、いわゆる連合した「まちづくり」というものを考えていった方が良いのではないかという意見を述べた。この両氏の意見の中で、特に長谷川氏の近隣の県や市町村などと連合して「まちづくり」を考えていくという意見は、私自身今までにあまり聞いた事がなかったものであったので新鮮な感じを抱いた。

今回のシンポジウムを通じて、私なりに「まちづくり」というものを考えてみると、マーメン氏が基調講演の中で述べていたように、地方自治体だけがそれを立案し実行するのではなく、地元の産業界や周辺の人々が協力してこれに当たらないとうまくいかないという考えに賛成できた。今後、山梨の「まちづくり」を考えていく上でも、この事は必要不可欠な要素となるのではないだろうか。

最後に、今回のシンポジウムには女性側からはパネラーとして１人も参加されていなかったので、女性側からの立場で考えている「まちづくり」に対する意見がなかったのが悔やまれる。

◆「山梨まちづくり国際シンポジウム」について◆

山梨大学北村研究所　渡邊　直幸

今回の「山梨県まちづくりシンポジウム」が開催されたことは、これからの山梨を考える上で大変意義があることだと思います。講演された先生方もＤ．マーメン氏、長谷川氏など広く人々に知られた方から、地元山梨で活躍されている久保田氏まで幅広く、各氏のそれぞれ専門の立場から山梨のグランドデザインのありかについてお話を頂き、私個人としても得るものは大きかったと思います。

中でも、Ｄ・マーメン氏の成長管理政策についての講演は具体例を挙げて分かりやすく説明されたので、成長管理政策を知らない人でもかなり理解できたと思います。欲を言うと、もう少し理論的な部分の話も聞きたかったです。また、久保田氏をはじめとする山梨で様々なことに取り組まれている人々のことは、正直言ってその日までは知りませんでした。まちづくりは、お役所や大企業のするものであると思っていた私は住民のレベルからの町づくりを実践なさっている方々とお話ができ、知り合いになれたことは大変うれしかったです。

山梨は、これから確実に発展していくと思います。そうであって欲しいと思います。しかし、生まれ育ったこのふるさとが、いつまでも自然豊かでやすらぎのある町であってほしいとも願っています。そのために、現段階においてしっかりとしたグランドデザインが必要であり、私も何らかの形で協力したいと思います。

◆まちづくり国際シンポジウムに参加して◆

建築士会青年部　手塚　元廣

過日の６月２８日に、〈市民による地域経営と国際化〉と題された有意義なシンポジウムに参加する機会に恵まれました。

さて、シンポジウムの副題、基調講演の演題、研究報告の題目に使われている単語を拾い上げてみると、

市民　地域経営　国際化
成長管理政策　グランドデザイン
建設市場　不動産市場　地元
まちづくり　かかわりあい　甲府
都市形成史　都市政策　公共投資
エメラルドシティー　市民建築士

ということになります。

シンポジウムの主題としては「まちづくり」なのですが、上記のように広範囲な多くの要素が取り上げられています。そこで私は、この主題を考えるにあたって、「まちづくり」と「成長管理政策」との関連を主に学習しようと思い参加しました。

したがって、今回のシンポジウムに対して私の期待したことは、次の４点に関してでした。

1　成長管理政策の概要と実施例
2　成長管理政策の政策と市民とのかかわりあい
3　成長管理政策は日本において運用可能なのか
4　成長管理政策が運用可能ならば、甲府市あるいは甲府盆地でどのような展開となるのか

しかしながら、時間的な制約などもあり、全てについて満足させてもらうことはできませんでした。成長管理政策とはいったいどういうものなのか、機会を改めて学習したいと思います。そして、「まちづくり」に生かせられる部分があるのなら、積極的に利用していきたいと思います。

また、このシンポジウムにおいて提案されたことが一つ一つ「まちづくり」に結び付くことを期待する次第でございます。

◆まちづくり国際シンポジウムによせて◆

建築士会青年部　中村源太郎

去る６月２８日、甲府シティプラザ紫玉苑において行われた「町づくり国際シンポジウム」はニューヨーク行政研究所国際都市研究部長のデビット・マーメン氏をお迎えして、誠に我が青年部にとりまして意義深い催しだったと思います。と申しますのは、本年１月末に我が青年部の仲間達がニューヨーク建築の研修に行ったおりに、Ｄ・マーメン氏に渡した１枚の山梨建築士会の名札の縁がきっかけでした。Ｄ・マーメン氏が山梨にきてくれるということで、今回のまちづくり国際シンポジウムをやろうと企画がなされ、（財）建設経済研究所の長谷川徳之輔氏とマーメン氏が来てくれるならと出席の承諾を得まして、ますます、このシンポジウムが現実をおびてきました。青年部幹事会が何回となく夜遅くまでもたれ、会場や協賛、後援団体等をとりつけと、まさに我が青年部は奮闘しました。当日は予定しておりました２００名以上の方々の出席を頂き、無事終了致しました。閉会の後、パネラーを囲んでの楽しい交流会も多くの方々に参加して頂き、有意義なものでした。この企画の成功で我々青年部の結束と力をあらためて知りました。

次には、さらに素晴らしいことができると思います。最後にＤ・マーメン氏の奥様を、氏が後援中、観光案内して頂きました士会の奥様にお礼申し上げたいと存じます。

◆天使の囁きがもたらしたもの◆

山梨県商工総務課　窪田　洋二

それはニューヨーク行きへの誘いから始まりました。

ある日、「１６万円でニューヨークをウォッチングしてみないか」という天使（？）の囁きに耳を傾けると、『マンハッタン・アーキテクチャーウォッチング』という１枚のパンフレットと共に建築士会主催のＪＴＢ海外旅行説明会に出席をすることになりました。

それは、恐ろしいほど真剣な（？）旅行であり、参加者はいくつかのグループに別れてそれぞれの目的にあったコースを作成し、納得がいくまでニューヨークを観察してくるというものでした。

私は、『地上げ屋グループ』という一見不穏当そうなグループに参加することになり、メンバーの方々（実はほとんどの方が知り合いだったのですが）と綿密な打合せを連日行うこととなりました。

メンバーの方々は兵ぞろいで私は成り行きを見守るばかりでしたが、訪問先の一つに今回のシンポジウムを行うきっかけとなったニューヨーク行政研究所がありました。

結局、私のニューヨーク行きは、「湾岸戦争の最中に海外旅行などしていていいのか」という悪魔（？）の囁きによって、一掃されてしまいましたが、『地上げ屋グループ』は、ニューヨークから大きなお土産を持って帰ってきました。

その後も『地上げ屋グループ』は健在ということで、また連日の打合せが続くこととなりました。

そこで、〈市民による地域経営と国際化〉というテーマから私は、一市民ではなく、一公僕として、企業市民としての企業による地域経営という視点から今回のシンポジウムをとらえることにしました。

行政が行ってきた分野に、企業が自主的により地域に密着したところで参画し、地域づくりを行っていくためには、従来の「地域経済を担う」という考え方に加え、「地域の暮らしづくりを担う」という観点を持つ必要があります。すなわち、地域に「量のストック」ではなく、「質のストック」を求めることが必要であり、そこから地域に質を求めてくると、地域の成長管理が必要になってくるわけです。この点からマーメン氏の「都市成長管理論」をとらえることができればと考えていました。

結局、仕事という悪魔（？）の手によって、シンポジウムにもマーメン氏との懇談会にも出席することができなかったわけですが、ニューヨーク・ウォッチングという天使の囁きがもたらした収穫は計り知れないものとなりました。

デザイナー　深山　和子

シンポジウム等人が集まるとき、いつも、どのような人が、どれくらい、どんな風に集まるのか興味があります。今回は、背広姿が多く、時間通りには集まりませんでした。普通であれば、就業時間内ですし、そのあたりは難しいのでしょう。その忙しい中でシンポジウムに参加するのだから山梨も捨てたもんじゃないと思いました。しかし、参加した人達が皆、今回の講演をどれくらい理解して聞いていたのかと、ふと思いました。と、ひねた事を言うのは私自身が理解できなかったというひがみであり、今これを書く事になって、再び資料を、眉間にしわを寄せて読んでも分からないからです。

私のような、ごく一般市民が話に入っていき易く、かつ理解できるように、もっと具体的な話や、もっと個人としての意見を聞きたいと思いますし、その方がおもしろいと思います。

最後に、今回私が興味を持ったものは「エメラルドシティーと市民建築士」という報告で、これからどのように展開していくのか、ワクワクさせられます。

◆司会をお手伝いして◆

建築士会女性部　名取あき子

国際シンポジウムの司会という大役は初めてのことでしたが、いろいろなことを経験でき、とても勉強になりました。

お手伝いだからと軽い気持ちで受けてしまいましたが、後になって大変な役立ったんだと感じられました。例えば、シンポジウムの進行の把握が充分にできずに照明を調節するタイミングが少しずれて、皆様に迷惑をかけてしまいました。しかし、皆様の方を向いての役割なだけに、聴講者一人一人の反応などを自分なりに確かめられたことはとても良かったです。とにかく、シンポジウムが無事終わってホッとしました。

シンポジウムの後の交流会の席で、マーメン氏のご夫人にお会いできました。県内見学の時に購入された桃を「おいしい」と食され、私達女性部会員にも進めて下さいました。とてもかわいらしい方でした。

◆「ワハハハ・・・の長谷川」さん◆

建築士会青年部副部長　石川　重人

長谷川徳之輔さん、名前の字数も６字と賑やかなら、話し方も賑やかな人である。シンポジウム前日の歓迎会において、ニューヨーカー、Ｄ．マーメンさんの隣りに座り、身振り手振りで場を盛り上げ、会話の中心に座をしめる。とにかくハッピーになる。ビールの飲みっぷりも豪快で、何だか話がよく分からなくなると「ワハハハハ・・・」と大きな笑い声が店に響いてくる。とにかく、こんな気さくで身近に感じられる人だけれど、建設省の大者なのである。しかしこの人は、建設省と言うより国際人Ｍｒ．ＨＡＳＥＧＡＷＡなのだと思う。私の記憶に残った長谷川さんの話に、国際都市ニューヨークの話がある。コーリアン、チャイニーズ、イタリアン、ジャパニーズなど、世界の様々な民族が自分達のエリアを持ちながら共存している、自由でストレートな町ニューヨーク。国際的多民族都市、コスモポリタン、ニューヨーク。民族も、文化も、マネーも、正義も、悪も、渾然一体となった姿に都市のエネルギーがあると言う。都市は面白いと言う。

シンポジウムでは、建設コストが高い日本の建設業界に、建設市場の自由化に伴う国際的な競争力があるのかという危惧を話されたり、土地政策においては税制の改革も含め、根本的に発想の転換を計らなければ日本は良くならないといった話をされましたが、どれも将来を予感させる内容でした。

◆まちづくり国際シンポジウムに参加して◆

建築士会青年部　鷹野　啓司

私は、本年建築士会に入会したての新入会員です。もちろん入会して初めてその活動内容を知りました。今年に入って、ニューヨークへの視察団派遣、山梨住宅研究会、関東ブロック青年建築士協議会発表、そして今回の、デビット氏、長谷川氏を迎えての国際シンポジウムと、なるほど山梨の建築士会が対外的にも有名であることが納得できました。

そのなかでも、今回のシンポジウムは、「まちづくり」という統一のテーマで、それを取囲む国際情勢から、甲府市におけるまちづくりの実情までの話を大変興味深く聞かせて頂きました。私は、県内の小売業企業で開発関係の仕事をしており、日常の業務においても商店街や、地元の市民に対して、「まちづくり」の提案等を行っております。今まではどうしても民間（それも小売業中心）レベルでの発想に終始しており、今回のシンポジウムは、ある意味ではカルチャーショックでありました。

親睦会、交流会等を含め、青年部の皆さんの今回のシンポジウムへの想い入れが聞く側にも伝わって、久保田部長以下皆さんの努力が大きく実ったと感じました。会場を出て甲府のまちなみを見ながら、「まちづくり」に対する市民の重要な役割を実感し、また山梨に住んでいることに誇りをもちながら、帰路につきました。

◆「山梨まちづくり国際シンポジウム」について◆

山梨大学北村研究所　皆川　朋子

リニアが開通した２５年後、山梨はどうあるのか。

現在の山梨は、富士山、富士五湖、南アルプスなど、優れた自然景観資源を多数所有する観光県であり、また、ぶどう、桃といった果樹を中心とする農業県でもある。さらに宝飾産業は急激に延び、ジュエリーの町へと成長しつつある。そして、未来の山梨の方向づけを与える最も大きな外的要因がリニアであり、内的要因が住民のまちづくりへの参加であろう。ここ数年が東京のベッドタウンとなるか、独特性をもつ中規模都市として発達するかという分岐点でもある。

リニア実験線の誘致が決定し、その過熱ぶりの中で、国家的な計画の視点に立ち、また経済的活性化だけに執着することは、まちの風土性、地域性といった、後世に伝えるべき要素を失う危険性を含んでいる。従って、今回のシンポジウムを企画した地域の建築家達のまちづくりに対しての意欲、パワー、機動力が住民の意識の向上のための起爆剤として果たす役割は大きいと思われる。

私は甲府に住んで６年目になるが、「やまなし居心地良さ」、甲府盆地の心地良さを自分なりに感じている。この地域独自の個性を大切にした、また過去の記憶が刻み込まれたまちを住民が一体となってつくることができればすばらしいと思う。

◆「シンポ回想」◆

建築士会事務局長　平賀　晃

日本列島の「ヘソ」と言われている山梨を情報の発信地としたい。それにはまず、山梨を見直し、山梨の将来像を考えていきたいと大きな夢を描きながら、その可能性に向い、地味ながら努力している青年部を見つめて来たが、ここ数年、実践的な活動は目を見張るものがある。

そんな時、久保田青年部長から米国よりＤ・マーメン氏、建設経済研究所の長谷川徳之輔氏らを招聘して、「まちづくり国際シンポジウム」を開催したいとの話があった。本音のところ、その時は予算的な問題、人集めの問題等々、内心穏やかでなかったのは事実である。

今までも士会として何人か著名な方の講演会等を催して来たが、今回のような異色な企画に対する青年部の熱意に事務局も動かざるを得なかった。青年部としても、それぞれ役割分担を決め、各自その任に責任を持ち、その準備に入った。県においても天野知事が提唱している、２１世紀への新県政ビジョンとして「山梨幸住県プラン」を推進していく上でも、国際化に対応すべきとのお考えから、この企画に大きな関心を寄せ、種々で協力を頂いたことは力強く、シンポジウム成功に導いたことは過言ではない。

いずれにしても、久保田部長をはじめ部員各位の活躍は目覚ましく、その行動力に敬意を表するものである。

「青年は我が教師なり」青年部を改めて見直し、心からシンポジウム成功おめでとうと言いたい。

◆シンポジウム前夜にて◆

建築士会青年部　金山　輝男

６月２３日に開催された「まちづくり国際シンポジウム」に先立ち、前日夜、建築士青年部有志とパネラーであるデビット・マーメン氏、長谷川徳之輔氏、早田俊広氏を迎え、甲府小作中央店にてにぎやかに顔合せ懇親会が行われました。マーメン氏は奥様もご一緒に同行していらっしゃいました。マーメン氏に比べて小柄で色白のミセスマーメンはただいまお腹に子供がいると控え目に答えていたのが印象的でした。煮貝、馬刺、ほうとうやハチの子、イナゴなどのゲテモノも箸を使って上手に食べていました。

早田氏が達者な英語で盛んに説明していましたが、英語を理解しない私にはよく分からない。口八丁の長谷川氏が日本語と英語をごちゃまぜにして口から泡をとばして話している。沼津生まれの長谷川氏には、イナゴより沼津の魚の方がおいしいかも。翌日のシンポにて静岡と山梨の食を合併した食作りを提案したのもこの夜の成果かもしれない。

世界中をまたにかけて研究しているマーメン氏が日本の片田舎甲府で建築士会青年部１４名の精鋭に囲まれて、ハチの子を食べながら都市計画を語る、何とすばらしい事か！

旧知の仲（昨年ニューヨークで会った人もいる）とは言いながら観光を兼ねた来日を非常な位の熱気でシンポジウムにしてしまう山梨の建築士の仲間の行動力には驚いている。早田氏の言葉にあるように、山梨の建築士の方々を、ほうとうを箸で食べながら肌で感じて頂けたのではないでしょうか。

◆ーファインダーを通してー◆

建築士会青年部　望月　真一

当日、午前９時から最終打合せを向えるにあたり、何度も繰返された事前打合せが気が付いたら夜中の１時、２時を過ぎていた事もありました。当日の２日前に急遽、担当変更ということで私はビデオ録画を受け持つことになりました。１台は会場中央に三脚でセットし、パネラーを中心に録り、またもう１台はハンディーカメラで会場の雰囲気を録ってみました．．．．

と原稿を書き始めた頃、１枚のＦＡＸが突然入ってきました。

『前日の懇親会について』提出

というわけで急遽ファインダーを南瓜ぼうとうに変更します。

前日の懇親会は小作北口店から急遽小作中央店に変更され開かれました。山梨の名物を味わってもらおうという事でしたので、当然のようにほうとうが膳に並んだのですが、そこで早田さんのマーメン夫妻への素晴らしい通訳を聞く事ができました。

ほうとうの材料、作り方、歴史等々を早田さんと楽しく語らった後、通訳は

・・・↗

「ホウトウ」。あってます。

納得したのは私だけではなかったようです。当日とは違った一面を見せてくれた、そんな楽しい語らいの中、マーメン夫妻もほうとうを平らげました。

私にとって青年部の熱気あふれるシンポジウムは急遽、急遽の連続でしたが、大変興味深く、また貴重な思い出の１本としてＶＨＳのラックに納まっています。

◆まちづくり国際シンポジウムに参加して◆

建築士会元青年部長　千野　幹雄

デビット・マーメン氏らを招いて、まちづくり国際シンポジウムが建築士会青年部主催で開催されると聞き、青年部の諸氏の活動もここまで来たかと、過去、青年部の一員として、士会の啓蒙、親睦体制づくりの時代に携わってきた者として感激もしたものです。昭和５２年関ブロ青年協議会が発足し、同時期に士会青年部が山梨にも設立され、以来、本会各種事業への積極的協力、参加、関ブロ青年協議会大会での全国研究集会に向けての熱心な研究テーマへの意欲的な取り組み、その内容も全国レベルでの高い評価、また朝日町のまちづくりガイドプランの作成をはじめ、数々の実績が会員増強への誘因ともなりました。さて、まちづくり国際シンポジウムについて、デビット・マーメン氏の基調講演「成長管理政策とグランドデザイン」の中の山梨、甲府の長い時間をかけてのグランドデザインづくりの必要性、性急な都市変換への警鐘など、アメリカ西海岸の都市づくりへの実践などを取り入れた講演が面白かった。また日本の土地問題について独自理論を持っている長谷川徳之輔氏のちょっと辛口な山梨の都市開発の現状分析、特に久保田要君の「エメラルドシティーと市民建築士」では、甲府市街中心の歴史的史実を踏まえた旧八日町あたりの地域経営の研究報告から入り、現況での町中の空洞化についてなど、氏の実践活動から得た体験発表が素晴らしかった。

以上、町づくり国際シンポジウムに参加して、この地域づくり、まちづくりに対する士会青年部会の熱心な取り組みに敬意を表わすとともに、今後の限りない発展を祈りながら、心地よく会場を後にした。

山梨県庁建築住宅課　望月　保

山梨県建築士会青年部の日頃のご活躍に敬意を表します。また、今回の企画は、建築行政に携わるものの１人として、横取りしたくなるような時宜を得た計画であったと思います。

今回、私の役割は、建築士会の県への窓口として、知事への表敬挨拶の段取り及び県庁内へのシンポ参加の呼び掛けでした。

県庁内へのＰＲは、士会青年部の久保田、進藤、長田、佐野の各氏と、このシンポジウムに興味を示してくれそうな各課を訪ねたところ、胸のワクワクするようなアドバイスを次々に受け、県庁全体がまちづくり、土地問題といった点について、一つでも多く情報を得ようとしている実態を感じました。

難関であったのは知事への挨拶でした。当日は６月県議会開会中であり、知事には寸分刻みの日程が予想されました。

知事のアポイントは秘書課が対応していますが、外国の方については、私学国際課が窓口となり事を進めています。久保田青年部長流に一通り担当リーダーに説明し、資料を提出し終えると「５月～８月までに返事をします」であった。何となく結論を肌で感じたものの一縷の望みを持ち時を待った。

“目は口ほどに物を言う”と申しましょうか。渡した資料に価値あるものがあったと思われる。秘書課担当リーダーより「知事がマーメンさんの挨拶を受けます」と連絡が入った。

しかし、秘書課担当リーダーは悩んだ様子であった。「ただ名刺交換ではもったいない、何とか時間を取りたい」と、「それでは昼食をとりながらマーメンさんに山梨の印象を、長谷川さんには土地の問題をお話してもらうことにしましょう」となった。

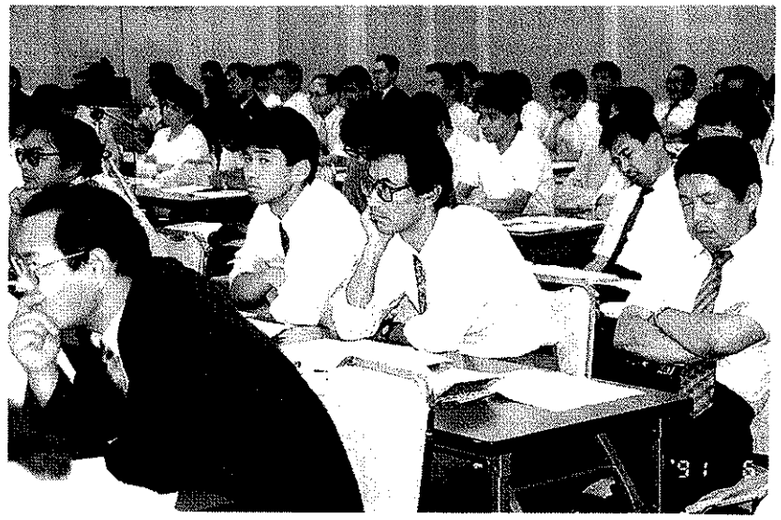
こうして世界的都市計画課マーメン氏、土地問題のエキスパート長谷川氏らと、県との交流の場づくりが昼食会という形式で実現した。

当日、マーマン氏と昼食会場でご挨拶（けっして流暢な英語で行ったわけでない、軽く会釈しただけである）した。人間としての重厚感を感じるものの、世界を飛び回る都市計画家といったものはなかった。これは多分日本の企業戦士をイメージしていたところによるものであろう。

第一印象の総論的には、これぐらいゆったりした様と重厚感が重要なものであるであった。

昼食会場からシンポ会場へ飛んだ。およそ、その参加人員が見届けられ、心地よく各氏の基調講演を聞き部屋に戻った。

特に、長谷川氏の歯に衣を着せない講演が心に残った。



◆シンポジウムを終わって◆

建築士会青年部副部長　長田　孝三

私たち建築士会青年部は、ここ数年、実践活動を通じて様々な提案をしてきました。今回の「まちづくり国際シンポジウム」もその活動の一環として行われたものですが、私の本音としては、まちづくりの活動を行っていく上において、新たな展開を目指しての理論的な刺激になればという考えがありました。

「まちづくり」はなかなかにやっかいなもので、風車に挑むドン・キホーテのごとき心境になることも間々あります。

このまちづくりの難しさはアメリカとて同じことと思います。マーメンさんの成長管理政策に基づくグランドデザインのお話をうかがって、ダラスを訪ねたときのことを思い出しました。整然とした地域割やそれに基づいてそびえ建つミラーガラスのスカイスクレーパーのきれいさ、ベニスのごとき水上交通システムを用いたり、町中に彫刻を置いたりと、とてもキレイな素晴らしさが目を引きますが、この中でヒトはそんな営みをするのか、できるのかと考えさせられました。ニューヨークの様々なヒトがあふれ、人いきれでむせ返るような、活気にあふれた混沌とした街の方がかえって住みやすく、ヒトが生きている都市を感じます。ただ、ニューヨークの現状がけっして十分に良いわけはなく、両方の都市の面白さや居心地の良さを混ぜ合せた町が、私には住んでみたい町に感じられるのです。思うに、この両者の接点はどうもアメリカ的合理主義よりもアジア的日本精神思考的な世界にあるようです。

そんな意味で、長谷川さんのお話を興味深く聞きました。山梨なんていう殻はこの際破り捨て、長野や静岡など周囲の地域を巻き込んだまちづくり、というスケールの大きな考え方や、パトロンとしての視点を持った行政という、とてもトレンディーな首長のあり方（ひょっとして、どこかの超高層庁舎がその存在の是非よりも、人々の心をつかんでしまって新しい名所になり、テレビドラマのバックにまで登場してしまうという現象はその先がけか？）、良いか悪いかの理性ではなく、好きか嫌いかの感性によるまちづくりなど、とても、やまなしいまちづくりのしかたをお話されました。

実は、これらの感性をもったヒトたちを、マーメンさんの成長管理政策という理詰めでまちづくりを考えられるヒトたちが支えていきながら、お互いによい仕事ができる環境づくりがまちづくりの秘訣だろうと感じました。

しかし、何しろシンポジウムの総合司会などというプレッシャーのかかる役目をおおせつかり、進行や会場状況の把握だけで精一杯。とてもパネラーの皆様のお話を理解できてはいないように思われての、この原稿書き、果たしてマトを得ているかどうでしょうか。

が、実は、本当に私たちにとって大切なことは、このシンポジウムが成功したという事実（ここで自画自賛してしまいました）よりも、このシンポジウムの内容を青年部の会員はもとより会場に来て頂いた皆様がどうとらえ、どう考え、どうどう行動し、どう生かすのかということだと思います。

特に青年部においては、一人一人の考えの集合体として、青年部がどういう活動をしていくのか、このあたりが大切なことだと思います。

私としては、しばらく、このフォローに時間を費やしてみたいと考えています。

そして、その上で、まちづくりのために青年部が素晴らしい動きができた時、このシンポジウムの成功は本物になるのです。

そのために仲間と共に歩みたい。これが今の私の心境です。

◆レンズをとおしてみたシンポジウム◆

建築士会青年部　和田　之男

去る６月２８日、甲府紫玉苑にて、ニューヨーク行政研究所のＤ・マーメンさん、建設経済研究所の長谷川徳之輔さん、早田俊広さんを交えた国際シンポジウムが開かれたことは皆さんご存知のことと思います。

私はカメラマンとして、その模様を撮り続けました。そこで私は、レンズをとおして感じたことを書いていこうと思います。

６月２８日　晴れ　紫玉苑ロビーにて

ＡＭ９：００

誰も集まっていないホールで１人皆を待つ。会場は間違いないはずだと思いながら．．．。

まずはマーメンさん登場。「Good Morning 」のあいさつ。それ以上話もできず、まずはカシャッと１枚。

待つこと数１０分、１人、２人と集まってきた。

やはり皆の表情がいつもより少し固いような気がする。すかさずシャッターを切る。でも皆の表情には気負いもない。私は「今日はうまく行く」と感じた。

ＡＭ１１：４０～

談露館にて、Ｄ・マーメンさん、長谷川さん、早田さんと知事との対話。

緊張した空気の中、知事が登場し、名刺交換となるが、私の位置からはうまい写真が撮れない。あっという間に各人席につき、話がはじまってしまった。

静かな対談の中、私の機械的なシャッター音だけがやけに部屋にひびく。

何かいいアングルはないか。そうだ、最後に知事とマーメンさんの握手を．．と思いながら。

ＰＭ１：００～

紫玉苑、鳳凰の間にて、いよいよシンポジウムの始まりだ。さすがの皆も表情が固いな．．．と思わずシャッターを押す力も入ってしまう。

それでは各人の表情をカシャッ。

Ｄ・マーメンさん

・・・話の進行につれて、次第に顔に赤味がさして来たような気がする。

長谷川さん

・・・話し方も表情も豊かで飛んでいるって感じかな。

高橋さん

・・・いつも見る町の明るいおじさんとは一変。でもとってもいい顔。

久保田さん

・・・さすが部長、市民建築士をしっかりアピール。

客席で

・・・しっかりとメモを取る女性、うなずきながら聞き入る人、目を閉じてじっと聞き入る（？）人、様々な表情がある。

それにしてもたくさんの人が来てくれたものだ。

ＰＭ５：００～

交流会そして別れ。

パネラーを囲んでの交流会は、やはりシンポジウムとはうって変わり、なごやかな中で進んでいった。パネラーの面々もすっかり緊張感も取れ、リラックスムードで話がはずむ。皆、この大きな行事を成し遂げたという表情が手に取るように分かる。

そして、マーメンさん達を送って甲府駅へ。さすがに一日の疲れが出て来たのか、黙りがちだ。私も最後の役目としてカメラでねらうのだが、なぜかシャッターを押せない。

なぜか．．．。

◆「国際シンポジウムに参加・・・
その中、その後」◆
建築士会青年部　川口　正人

４月中旬か５月上旬だったと思います。久しぶりに参加したグループ討議（確か長野大会出席の件だったか？）の延長上に、この話が出ていたと思います。その時はすでに遅く、すっかりお膳立ででき上がっていまして、システマチックに組み入れられた感がありました。現に、その内容については全く意見の出しようがなかったのです。

しかも、そのまま時を見送り、いきなり前日（録音係はわかっていましたが）、しかも遅刻して参加（食事はしっかり頂きました）。ここまで来るとほとんど優秀な頭脳も働かず、各言葉は理解できても、連なる文章は全く理解できません。そして当日、とりあえず前日「予習」しておいたことに、尾ヒレを付け、分かっているような顔で出席しました。

ここまで来れば自分以外の事に興味が出てくるのです。会場が一杯になるのを期待しつつも「いったい何人来るのか」「どのような団体が出席するのか」若干の心配（期待）をしながら、かつ録音係と写真係を仰せ付かり、４時間のシンポジウムが終了しました。しかしながら、２００人位参加したように思います。「４時間のシンポジウム」（北村教授の「都市計画」、Ｄ・マーメン氏「成長管理論」、長谷川氏、早川氏、パネルディスカッション等）、各氏の豊富なるメニューの発表とディスカッションは若干の食傷ぎみを感じさせたのではないかと思います。

しかし、もう一度じっくり「読みたい」「聞きたい」という感じはいまだにあります。一つ一つの理論を聞き直し、今後予想される事態に対して理論武装しても良いのではないかと思います。かといって、日本の建築、都市計画の行政段階では実践配備はまだしない方が良いのではないかと思います。「パトリオット」と「スカッド」のようにはいきません。せめてもの思いの諸兄は、ピンポイントでご披露されてはと思います。

初めて開催された甲府での、しかも専門的な国際シンポジウムでありますが、多少の反省と大きな成果があった（勘違いでも）と思います。メニューの数の参加人員乗の乗数の理論か、どこかで着陸せずとも飛び回っているような気がします。

◆「まちづくり国際シンポジウム」の雑感◆
建築士会青年部副部長　鈴木　勇次

今回のシンポジウムを、青年部主催として開催できたことに対して、本会会長はじめ、関係諸団体、諸機関の皆様には、ご支援、ご協力を頂き無事に開催できましたことを、改めて感謝申し上げます。

私は、今年１月末のニューヨーク建築都市視察には参加しませんでしたが、視察してきた仲間達からニューヨーク行政研究所のＤ・マーメン氏を訪問し、貴重な体験をしてきたこと等、報告を聴きましたが、まさかＤ・マーメン氏の講演が聴けるとは思いもよらなく、また（財）建設経済研究所の長谷川常務理事や早田研究員にも、シンポジウムに協力願えることになり、地方の建築士の青年部の手で、はたして開催できるのだろうかと、当初は戸惑いと不安の念を感じました。

しかし、４月中旬から青年部会で議論をなし、シンポジウムに向けて実行委員会を発足し、６月末にＤ・マーメン夫妻の来県日程が決まり、幾度となく夜も徹して話し合い着々と準備は進むうち、県からも思いがけない補助金も得られ、エネルギーあふれる青年部員と一緒に私も微力ながら準備に携わりました。

また、グローバルな視点で地元のまちづくりを考え、創造していくために企画したことであり、聴講者も県下の行政職員に参加してもらいたく、県の建築住宅課から各市町村へパンフレットを送付して頂き、私も知り合いの市町村職員や県の仲間達に勧誘の連絡をし、シンポジウムを迎えました。

シンポの前日は、早田研究員の愛宕山への案内から始まり、Ｄ・マーメン夫妻、長谷川常務理事を駅で出迎え、懇親会場の「小作」へと案内し、和やかなうちに懇親会も運び、無事に宿舎へ送り、当日を迎えました。

当日、私は受付を担当し、仲間達とパネラーの資料を整理しながら、果たして聴講者が来てくれるのか気をもんでいましたが、開始時間を過ぎる頃からぞくぞくと受付に集まり、会場の中もほとんど用意したテーブルが埋まり、行政職員も８０人近く参加して頂き、予想していたとおりの聴講者数でありました。

そして、久保田・進藤両夫人には、当日お忙しい中早朝より、Ｄ・クリスティン夫人を県下の視察に１日案内して頂きありがとうございました。

このようにして、いろいろな方々の協力を得て、青年部員もそれぞれの役割に責任を持ち、一丸となり盛大に開催できたことは、何にも勝る成果でありました。

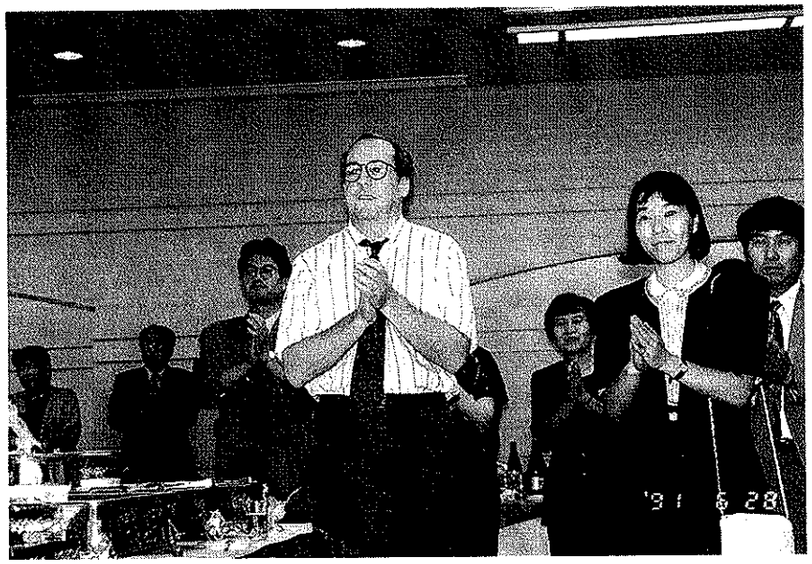
山梨県建築士会青年部も大きなイベントを企画し実行したものだと思うと友に、あらためて「やればできる」「案ずるよりも生むが易し」という実感を、私自身、経験させてもらいました。

これからも、この素晴らしい青年部員の仲間と、地元のまちづくりを考え、自然の豊かな山梨県が、将来に受け継がれるような地域ビジョンを創造し、私も、行政での職域において、よりよい「地域経営」の展開が図られるよう、さらに自己研鑽を積んでいこうと思っております。

建築士会青年部副部長　穂坂　真

私にとって、今の建築士会青年部を一口に申し上げますと、「好きになれる本当の自分というものに巡り合わせてくれる」ところなのです。「どうしたら他人を喜ばすことができるか、毎日考えてみることです」とは、カーネギーさんの言葉ですが、我が青年部に集まって下さる方々は、ご自分の地域に貢献する気持ちで一杯の人達ばかりです。

今後とも、精一杯の知恵を絞りながら一歩一歩確実に歩んでいくことでしょう。数知れぬ平和のかけ橋の一つとして、青年部がもっともっと世の中のお役にたてればと考えている次第です。



4)いま見る、先見るムーブメント

（1991年４月４日付、ディビッド・マーメン氏より
久保田氏宛のスケジュール調整に関する書簡）

April 4, 1991

By FAX to: 011 81 3 0552 41 9802

1 page only

Kaname Kubota
Architect
Kofu City
Yamanashi, Japan

Dear Mr. Kubota:

It was a pleasure to meet with you and your delegation during your visit to New York City on February 4.

As I mentioned, I plan to be in Japan in June, and I would be pleased to visit Kofu and Yamanashi Prefecture for a day or two to continue our discussion and to learn more about the planning issues you are facing. My wife will be with me, so I hope my visit would not be all work - we would also like to enjoy the beautiful scenery of your countryside.

I am beginning to plan my schedule, and it looks like Thursday and Friday, June 27 - 28, or Saturday and Sunday, June 29 - 30 would be good days for our visit.

Miss Ayako (Shibata) Sato in Tokyo (3395 0286) will be helping me arrange my schedule, so perhaps you could give her a call and let her know your thoughts about my visit.

Thank you very much, and I look forward to meeting with you again.

Sincerely,

David Mammen
Director
International Urban Studies

Institute of Public Administration
New York City

（シンポジウム開催のための協力要請資料）

☆☆☆ いま見る、先見る！　ヤマナシ　ドリーム☆☆☆

地域経営シンポジュウム ―　『市民による地域経営と国際化』

（全員参加型のシンポヂュウムを考えました。）

主催　山梨県建築士会青年部
(Young People's Department Yamanashi Prefecture Association of Architects)

協賛（社）山梨県建設業協会
（社）山梨県建築設計協会
（社）山梨県建築士事務所協会
（社）日本建築学会山梨支所
（社）ＪＩＡ関東ブロック山梨会
甲府商工会議所

後援　山梨県
甲府市　（予定）
甲府商工会議所（予定）
山梨日日新聞社（〃）
日本放送協会甲府支局（予定）
山梨放送、ＹＢＳ（予定）
テレビ山梨、ＵＴＹ（予定）

趣旨　私たち、山梨県建築士会青年部会の活動テーマであります“市民としての建築士”のあり方をめぐり、ここ数年来、地域にむけた報告書による提案を数々してまいりました。それはまちづくり、景観づくり、等のなかで語り続けられています部分と、もう一歩踏み込んだ動きとしての実践活動であります。昨年より、数々のストックを抱え、全県の青年部メンバーと地域の実状等語り合い、まちづくり実践の模索をして来ました。そして、私たちの地域を客観的に捉えるべくメンバー２０名近くで、ニューヨーク建築都市視察を今年１月末、湾岸戦争で日本にとって逆風のなか、貴重な数々の経験をしてまいり、まちづくり構造の違いを実感してまいりました。その折りの訪問先であります‘ニューヨーク行政研究所、国際都市研究部長Ｄ、マーメン氏’にこの度来県していただく機会に恵まれました。私たちは、まちづくり国際交流という位置づけで、氏による“都市の成長管理Growth Management”を通して市民としての私たちのビジョンを語り合う会にしたいと思います。また“日米まちづくり構造協議”の交流の場として広く市民をはじめ、関係諸団体、諸機関の皆様と共にグローバルな視点で地元のまちづくりを皆で考え、創造していくために、企画しました。

パネラー　『成長管理政策とグランドデザイン』　Ｍｒ．デビット・マーメン（ニューヨーク行政研究所、国際都市研究部長）

パネラー　『建設、不動産市場の国際化のなかでの地元まちづくりのかかわりについて』　長谷川徳之輔氏（財団法人、建設経済研究所常務理事）

パネラー　『甲府の都市形成史』ヨーロッパ日本研究学会発表論文-ベルリン』　北村眞一氏（山梨大学建築電情工学科　助教授）

パネラー　『都市政策と公共投資』　早田俊広氏（財団法人、建設経済研究所研究員）

パネラー　『ジ　エメラルド　シティーと市民建築士』　久保田要氏（社団法人、山梨県建築士会青年部長）

コーディネーター　高橋辰雄氏（美術家、環境芸術ワークショップ代表）

日時　１９９１・６・２８（金）ＰＭ１：３０－４：３０、以後　楽しい懇親会

場所　甲府・紫玉苑

＜経　緯＞　（社）山梨県建築士会青年部は、まちづくり活動の一環として、本県の今後の都市のあり方について、市民の立場から考え、創造していくための「まちづくり国際協議」開催に向け、かねてより準備を進めてきましたところ、来る６月２８日（金）、甲府市紫玉苑において「市民による地域経営と国際化」と題しましたシンポジウムを催す運びとなりました。（別添資料）

つきましては、シンポジウムに先立ちまして、当日の主なパネラーであります、ディビッド・マーメン、長谷川徳之輔、早田俊広の三氏の山梨県知事表敬に対しまして、格段の御配慮をお願いいたします。

＜日　時＞　平成３年６月２８日（金）　　時

＜表敬訪問者＞

・ディビッド・マーメン氏　(David Mammen)　……ニューヨーク行政研究所　国際都市研究部長

１９５２年生まれ。ペンシルベニア大学都市地域学科卒業。
都市計画を専門とする同氏は、１９８６年、フルブライト研究員として、１０ケ月間日本に滞在した。
１９８９年３月には数多くの来日経験を基に、研究報告書「世界都市東京の創造」を発表している。
ニューヨーク行政研究所は、「公共事業専門家日米交流計画」の米国側の窓口である。

・長谷川　徳之輔氏　(はせがわ　とくのすけ)　……（財）建設経済研究所　常務理事

１９３６年、静岡県沼津市生まれ。東北大学法学部卒業。
社会工学を専門とする同氏は、昭和３４年建設省入省以来、同省都市局、道路局、経済企画庁、阪神高速道路公団水資源開発公団、日本住宅公団などで調査企画を担当。昭和５９年より（財）建設経済研究所主任調査員として、公共投資、住宅建設産業などの調査研究に従事。現在、同研究所常務理事である。　名古屋大学工学部非常勤講師。
主な著書　「土地神話の崩壊」、「新聞にみる社会資本整備の歴史的変遷」、「東京の宅地形成史」

・早田　俊広氏　(はやた　としひろ)　……（財）建設経済研究所　研究員

１９５９年、福岡県福岡市生まれ。東京大学法学部卒業。
昭和５８年建設省入省。河川局、経済局、都市局などで調査企画を担当。昭和６２年より経済協力開発機構（ＯＥＣＤ、在パリ）に出向、世界の都市問題について調査研究に従事。平成２年より（財）建設経済研究所に出向。
都市政策、公共投資政策の国際比較を担当。
主な論文　「社会資本の再生」、「Public Investment in Japan」

首都

<支社・支局電話番号>
横浜　045—201—255
川崎　044—222—779

都市づくりへ日米シンポ

建築士会青年部　来月、甲府で開催

山梨県建築士会青年部（部長久保田要氏）は六月二十八日に甲府市内で日米専門家による地域経営シンポジウムを開催する。ニューヨーク行政研究所のデビット・マーメン国際都市研究部長と建設経済研究所の長谷川徳之顧常務理事が基調講演をしたあと、甲府市の都市づくりを中心に話し合う。同青年部が今年一月にニューヨーク行政研究所を訪問して、今回のシンポジウムが実現した。県も約二百万円の費用の半分を負担するなど積極的に支援している。

同青年部はこれまでも、石和町、高根町、河口湖町の景観ガイドプランづくりなどで県のブレーンとして協力してきた。今後も県景観条例の景観形成地域の指定、リニアモーターカー（磁気推進式列車）の実用化を射程に入れた都市づくりなどで積極的に活動していく方針だ。

こうした意欲的な活動の一環として、有志約二十人が都市経営の先進地域であるニューヨーク市を訪問した。ニューヨーク行政研究所は関東大震災の復興計画を作成したことで知られており、マーメン氏は八九年に刊行した「世界都市東京の創造」という著作が有名。

山梨県は高度成長を達成し、今後は開発一辺倒から環境重視へと政策転換を迫られている。天野知事の幸住県構想でも生活環境の保全を前面に打ち出している。マーメン氏の都市成長管理理論は住民本位の都市づくりのための政策誘導に役立つという。

例えば、景観形成地域に指定された地域は開発が抑制されるため、住んでいる人の資産が目減りする。また、開発が進む甲府市中心部との格差も問題になる。マーメン氏は税金を再配分するなどの手法が必要と主張している。こうした都市成長管理の考え方を導入すれば、環境や景観の保護で住民の合意が達成できるはず、と同青年部では言っている。

1億人突破のディズニーランド

追加投資でリピーター

千葉県浦安市にある東京ディズニーランド（TDL）への入園者が、二十九日、通算一億人を突破した。八三年四月に千葉県浦安市で開業してから八年と四十日余り。この間、全国のテーマパークブームに火を付け、アーバンリゾートというレジャー施設の新しい形を定着させた。さらに隣接地では第二テーマパーク未完成という心構えと話す。

TDLの成長が東京湾岸の経済ソフト化のけん引車となりそうだ。

九〇年の入園者は千五百八十七万六千人で今年もこれを上回るペース。レジャー熱の高まりとともに、八年前の一・五倍になった。森社長は人気の秘密を「キャスト（従業員）と分析する。

サービス方法まで含めて日常を忘れさせる演出を徹底し、大人、特に若い世代の女性を引き付けた。周辺の都市型ホテル群も五社三千二百室に増え、アーバンリゾートで過ごすという新しいレジャーの形が社会現象としても定着した。

一方、次々に大型の新アトラクションを投入。周辺施設を含めて五百億円を超える追加投資でリピーター（再、

新規就農者5年ぶり増

栃木県

栃木県で、昨年五月から今年四月末までの一年間に新たに農業についた人が七十八人（前年同期比五人増）に達し、五年ぶ

1.75キロの地下街

富山市で基本構想案

【富　山】富山市地下街建設促進協議会（会長・原谷敬吾北陸電力取締役相談役）は29日の総会で、地下街の基本構想案の概要を明らかにした。同地下街は富山市のＪＲ富山駅北側から市のメーンストリートである城址（し）大通りの下を通る総延長1.75キロ、地方都市としてはかなり大規模な地下街となる。既に試算されている事業費は約450億円。このため、交差点の地下部分や駅前広場の地下開発などに適用される国の事業制度を活用、地下広場の建設など可能な部分から段階的に建設する手法の導入が必要としている。促進協では８月までに基本構想を固める。

「茶運び人形」を再現

【新　潟】高精度歯車の専門メーカーで「歯車文化」の保存にも熱心な長岡歯車製作所（本社長岡市、☎0258・23・3333）は、江戸時代の代表的な精密機械である「茶運び人形」を当時の設計図通り再現した＝写真。1796年刊の「機巧図彙（からくりずい）」に基づき１年がかりで製作した。鯨のひげだったゼンマイを鋼に、木製歯車を黄銅にした点以外は、当時の機構そのまま。時計技術を応用、茶わんを載せると自動的に動き茶わんを取ると停止、方向を変えて戻る。「立派な〝ロボット〟であり、技術水準の高さが確認できた」（内山弘社長）。合計３体製作、同社が昨年オープンした長岡歯車資料館などで公開する。

県が街づくりの景観指針

【岐　阜】県は街づくりの指針となる「景観形成ガイドプラ

（山梨県からも絶大なるご協力を賜りました）

ふるさとづくり基金のご案内

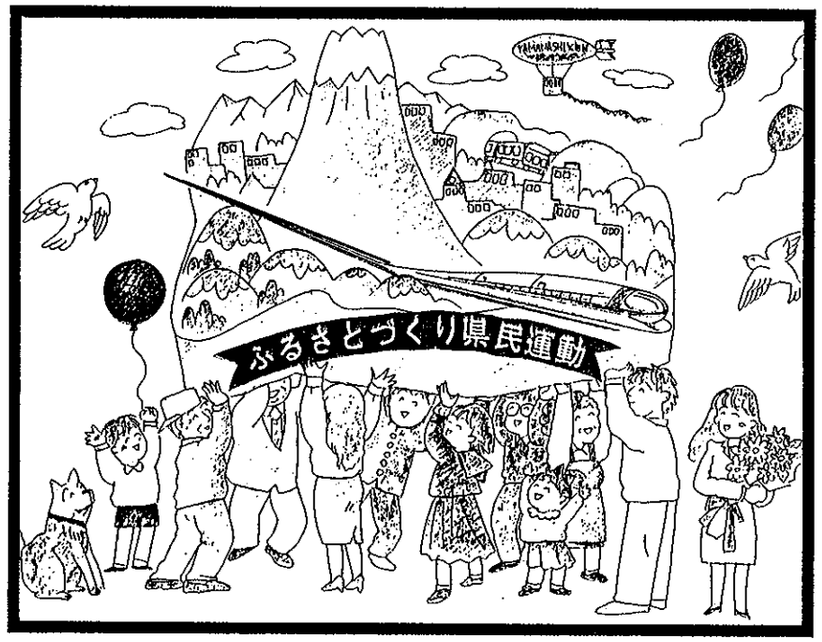
応援します！

あなたのまちのふるさとづくり

平成２年３月27日「山梨県ふるさとづくり基金条例」を制定し、15億円の基金を設けました。

この基金の運用益金は、毎年１億円ほどになりますが、これはすべて「ふるさとづくり県民運動」のために使っていきます。

市町村の事業に対する助成、民間の団体やグループの事業に対する助成もありますので、活用してください。



山梨県

▶東京
日時：6月25日（火）13：30〜17：00
会場：科学技術館サイエンスホール
▶名古屋
日時：6月27日（木）13：30〜17：00
会場：名古屋明治生命ホール
参加費：1万円
申込：各開催日の5日前までに往復ハガキで下記へ
〒105 東京都港区虎ノ門3-2-2 第30森ビル　日本建築センター情報交流会
☎03-3432-0716

KAWATETSU 建材フォーラム
日時：6月20日（木）13：30〜16：30
会場：川鉄デザインプラザ・幕張
（千葉市中瀬，幕張テクノガーデン西高層館B棟11階）
講師：細井祐三（名古屋大学教授）「ステンレス鋼の金属学」，神谷昭彦（川崎製鐵）「川崎製鐵のステンレス」
参加費：無料
定員：120人
申込：KAWATETSU建材フォーラム事務局，高吉
☎0472-96-6970
6／28まで（10：00〜17：00），同所にてステンレス製品特別展示会を開催

DRA-CAD ユーザーフォーラム
製図CAD「DRA-CAD 2」を対象にしたユーザーによる利用技術発表会
日時：6月20日（木）13：00〜18：00
会場：TEPIA
（東京都港区北青山2-8-44）
参加費：無料
定員：220人
申込：6／13（木）までに，ユーザーフォーラム事務局（構造システム内）／☎03-3235-5978へ

講演会「フランス人が見た同潤会アパートの役割」
日時：6月20日（木）10：00〜12：00
会場：建築会館ホール（東京・芝）
講師：マルク・ブルディエ（前東京大学工学部建築学科外国人研究員）「日本建築史における同潤会アパートメントの果たした役割」
対談者：安藤正雄（千葉大学講師）
参加費：2000円
申込：FAXで，積水ハウス　構法計画研究室，長原まで
FAX 03-3346-6994

都市と建築講座ー建築とこどもたちー
次世代を担う青少年に都市や建築についての仕組みを分かりやすく解説する
日時・講師・テーマ：
①6月22日（土）14：30〜16：30
清水慶一（国立科学博物館）「建築ってなあに・まちはどうやってできるの」
②9月28日（土）14：30〜16：30
延藤安弘（熊本大学教授）「美しいまちってどんなまち」
③12月14日（土）14：30〜16：30
茶谷正洋（東京工業大学教授）「住まいの大きさはどうきまるのー折り紙工作から学ぶ」
④92年2月29日（土）14：30〜16：30
稲葉武司（共立女子大学助教授）「より良い住まいはどうしたらいいの」
会場：国立科学博物館　講堂
（東京都台東区・上野公園内）
対象：中学生以上
参加費：無料
定員：100人
申込：往復ハガキで下記まで
〒108 東京都港区芝5-26-20
建築会館　日本建築学会事務局
☎03-3456-2051，鎌田

地域経営シンポジュウム
「市民による地域経営と国際化」
日時：6月28日（金）13：30〜16：30
会場：シティプラザ紫光苑
（甲府市飯田1-2-4）
講師：デビット・マーメン（ニューヨーク行政研究所），長谷川徳之輔（建設経済研究所），北村眞一（山梨大学助教授）ほか
コーディネーター：髙橋辰雄（美術家）
参加費：無料
問合：山梨県建築士会青年部
☎0552-33-5414

第8回　A+E　FORUM
日時：6月28日（金）18：30〜21：00
会場：エル・おおさか
（大阪市中央区北浜東3-14）
講師：黒川省二（竹中工務店設計部）「RING OF FIRE－海遊館の設計」（英語による講演）
参加費：4000円（会員）
5000円（一般）
申込：6/25（火）までにハガキで下記へ
〒565 大阪府吹田市山田丘2-1
大阪大学工学部環境工学科第一講座内
FESAE関西支部事務局／☎06-877-5111・内線5154，稲崎・三谷・久保

コープ住宅フォーラム1991
コープ住宅がきりひらくまちづくり
全国のコープ住宅の動向，神戸におけるコーポラティブ・ハウジングの展開などについて講演する
日時：6月29日（土）10：00〜17：30
会場：風月堂ホール
（神戸市中央区元町通3-3-10）

◆報道関係　ラジオ・テレビ◆

□YBSラジオ　6／14（金）　9：10〜9：20　10分間
話題の広場で放送PR
久保田　要
髙橋　辰雄　出演

□UTY
NHK
YBSTY
6／28　夕方
各社ニュース番組にて放映

□NHK　6／29
モーニングワイド　AM7：30　この人の顔
久保田　要

□YBS　8／3　AM10：00〜
甲府インナウ　事後報告
髙橋　辰雄

（日刊建設９１’７．３〈水〉）

山梨県建築士会青年部 まちづくり国際シンポ開く

―D・マーメン氏、長谷川氏ら講演―

山梨の将来都市像に グローバルな視点を

山梨県建築士会青年部（久保田要部長）は去る二十八日、甲府市の紫玉苑で「まちづくり国際シンポジウム」―市民による地域経営と国際化―を開いた＝写真。これは国際化の波の中で、首都東京の拡大と地方分権指向を側面に見ながら、市民・行政・専門分野の人々を広くとり込み、グローバルな視点で山梨のまちづくり地域ビジョンを模索しようというもの。シンポジウムには＝ニューヨーク行政研究所国際都市研究部長のデビット・マーメン氏、建設経済研究所常務理事の長谷川徳之輔氏らを招き踊り合ったが、「日米まちづくり構造協議」の交流の場としても意義深く、示唆に富む内容であった。

このシンポジウムは関東甲信越建築士ブロック会青年建築士協議会、山梨県建設業協会、同建築設計協会、同建築士事務所協会、日本建築学会山梨支所、IIA山梨クラブの協賛、山梨県、甲府市、甲府商工会議所らの後援により、約二〇〇人参加を得て開かれた。

基調講演はD・マーメン氏が「成長管理政策とグランドデザイン」について、長谷川氏が「建設・不動産市場の国際化のなかでの地元まちづくりについて行われた。

このあと▽北村真一氏（山梨大学工学部土木環境工学科助教授）＝甲府の都市形成史▽ヨーロッパ日本研究学会発表論文▽▽早田俊広氏（建設経済研究所研究員）＝都市政策と公共投資▽久保田要氏（山梨県建築士会青年部長）＝エメラルドシティーと市民建築士―の三氏がそれぞれのテーマで研究報告。さらに、美術家であり環境芸術ワークショップ代表の高橋辰雄氏をコーディネーターに、前出の五氏によるパネルディスカッションも行われ、会場は熱気にあふれた。

主催した士会青年部は〝市民としての建築士〟という視点から、ここ数年、地域に向けたまちづくりを数々提案し、景観形成と個々の活動を通じてメンバーの実践的な活動を通じて地元・山梨の将来像に夢を描いてきている。そこした実績をふまえ、ことし一月下旬には米・ニューヨーク研修を行った。そのさい、D・マーメン氏に会い、「都市問題及び成長管理政策を中心に東京に隣接する山梨について、これからどんなグランドデザインを考えたらいいか」（久保田氏）と、問題提起。

シンポジウムでは、D・マーメン氏は、山梨の将来について「長期的視点で、地元独自の発想により、成長管理していく能力が必要」、また建設・不動産市場の国際化について、長谷川氏は「日本の経済・文化に将来深刻な影響をもたらす」、さらに都市計画には個性と指導力が必要ではないかなどと語った。

一方、北村氏は甲府市街地の歴史的変せん、早田氏は公共投資のあり方、久保田氏はまちづくり実践事例と将来展開への意見を述べた（基調講演の要旨は別項）。

（山梨日日新聞　９１’６．２９〈土〉）

建築士会青年部が国際シンポ

まちづくりを論議

甲府

県建築士会青年部（久保田要部長）は二十八日、甲府・シティプラザ紫玉苑で「まちづくり国際シンポジウム」を開き、講演やパネルディスカッションを通して、市民がどのようにまちづくりにかかわっていくべきかを探った。

シンポジウムには同部員、行政担当者ら約二百人が出席した。基調講演では、デイビッド・マーメン・ニューヨーク行政研究所国際都市研究部長がアメリカでの実例を紹介しながら、「これからは行政や市民が土地利用を規制し、都市開発を制御する成長管理政策が必要」と指摘した。

長谷川徳之輔建設経済研究所常務理事は「建設、不動産市場の国際化」をテーマに、「西欧と違って日本の都市計画は、まち全体のビジョンがない」と、日本と外国を比較しながら都市計画の在り方を話した。

この後、美術家の高橋辰雄さんがコーディネーターとなり、基調講演者と、北村真一山梨大学助教授ら五人でパネルディスカッションを行った。①成長管理政策は日本では有効か②国際化が進むなか、地方はどうあるべきか③まちづくりへの市民参加の方法―などについて意見を交わした。

200人が出席した「まちづくり国際シンポジウム」＝甲府・シティプラザ紫玉苑で

会長に桜井氏

ユネスコ協会が総会

甲府ユネスコ協会は二十二日、湯村グランドホテルで平成三年度の定期総会を開いた。会員ら約三十人が出席し治（北巨摩）功刀敏光（甲府）鈴木忠二（都留）

珠算団体の部は吉田商Aが1位

県高校商業実務競技会

県高校商業教育研究会はこのほど、全国大会の予選を兼ねた県高校商業実務競技会を開いた。県内の商業科の生徒二百六十五人が参加。珠算、英文タイプ、ワープロ、プログラム、簿記の各種目に日ごろの学習の成果を競った。

成績は次の通り。

〈珠算〉◇団体 ①吉田商A②甲府商A、第一商A③吉田商B、甲府商B、湯田A◇個人総合 ①渡辺晃子（吉田商）②石川小夜子（吉田商）名取美穂（甲府商）③高宮玲奈（甲府商）永井昭子、吉都美紀（第一商）

◇種目別▽応用計算 ①高宮玲奈（甲府商）②永井昭子（甲府商）▽読上算 ①永井昭子（第一商）②名取美穂（甲府商）③渡辺晃子（吉田商）▽伝票算 ①高宮玲奈（甲府商）②渡辺晃子（吉田商）③天野聰子（吉田商）

〈英文タイプ〉◇団体 ①吉田商A②吉田商B③甲府商B◇個人 ①橋本亜紀②大石春美、小佐野環③太田さゆり、小林純、大石貴子（吉田商）

〈ワープロ〉◇団体 ①甲府商A②甲府商B、湯田B③湯田A、第一商A、須玉B◇個人 ①赤池純子②湯舟智恵、土橋珠美③市川輝美、新田知子、折井美香（甲府商）

〈プログラム〉◇団体 ①増穂商A②吉田商A、第一商A③塩山A、増穂商B、第一商B◇個人 ①望月公夫（増穂商）②赤尾恵（塩山）渡辺卓二（吉田商）③長田雅也、勝俣哲也（吉田商）大木健至（増穂商）

〈簿記〉◇団体 ①第一商A②塩山A、増穂商A③甲府商A、第一商B、甲府商B、湯田A◇個人 ①赤池純子（甲府商）②名取美穂（甲府商）③高宮玲奈（甲府商）④永井昭子（甲府商）⑤大石春美（甲府商）⑥橋本亜紀（甲府商）⑦太田さゆり（甲府商）⑧小林純（甲府商）⑨大石貴子（吉田商）⑩須玉B

きょうの当番医

◇諏訪地区【整形外科】信濃医療福祉センター（東山田、0266・27・8414）

献血

◇29日 県民会館献血ルーム（前10時半―後5時半）

千四百五十一円

まちづくり国際シンポジウム

〈市民による地域経営と国際化〉に参加して…

環境芸術ワークショップ代表　高橋辰雄

リニア実験線や中部横断自動車道の構想がより現実的なものになるにつれ、私たちの街も大きく変わろうとしています。そして、なにより身近な暮らしぶりの変化が、多くの人々にまちづくりへの関心を呼び起こしているのが、昨今の現状です。

㈱山梨県建築士会青年部（久保田要部長）では、県内各地でまちづくりへの具体的な提案やイベントを進めていて、去る6月28日にも"まちづくり国際シンポジウム"を開催しました。

来日されたD・マーメン氏（ニューヨーク行政研究所国際都市研究部長）は、基調講演で「山梨は、東京の発展の利益を受けつつ、個有の文化や豊かな自然を保全し、微妙なバランスを取ることが望まれる」と指摘しながら、都市の成長を必要に応じてコントロールする「成長管理政策」のアメリカでの事例を紹介しました。

また、長谷川徳之輔氏（㈶建築経済研究所）からは、国際化・流動化する社会状況の中での地方都市のあり方について提言をいただきました。

続くパネルディスカッションでは、地元まちづくりの実践が報告され、グローバルな視野で活発な議論がかわされました。単なる掛け声だけでは済まされない、それぞれの立場で解決しなければならない問題を抱えていることが、議論をより真剣なものにしたのだと思います。

「地域に住む人々の生活のクォリティーを大切にするまちづくりをめざして、まずは、自らの問題として考えることが重要である」と、ささやかながら着実なアピールを、会場の皆様と共に分かち合うことができました。

いろは

上野剛広くん
堀之内町
父・和広さん　母・稚佳子さん

新津奈波ちゃん
大里町
父・正夫さん　母・三田岐さん

スナップ

手塚祐太くん
下小河原町
父・美知男さん　母・宏美さん

長田尚美ちゃん
大里町
父・正彦さん　母・むつ美さん

あとがき

▼特集は、主要な施策の紹介です。就任して初めての6月議会を終え、いよいよ山本市政が本格始動です。よりよい甲府市の発展のために、「呼べば答える、打てば響く、やまびこ市政」の実現を目ざして、職員一丸となって努力してまいります。市民の皆さんの絶大なるご理解とご支援をよろしくお願い致します。

▼表紙は、キャンプファイヤーで、真夏の楽しい一夜を演出してみました。いかがでしょうか。

▼スナップコーナーへの応募が大変多く、すぐにたまってしまいます。お待たせしている方はごめんなさい。必ず載せますからもう少しお待ちください。楽しいお便りも待ってます。

▼暑さでちょっとバテ気味のところ、突然、首が動かなくなり、カメラを向けるにも、体ごと向きを変えなければならないはめになってしまいました。炎天下、首に包帯を巻かれるわ、痛さと暑さで汗びっしょりになるわで、やっとの思いで広報を仕上げるころ、ようやく元どおり復帰。夏の疲れはためないように、普段から健康には十分気をつけましょう。

■人口 202,073人　男 99,114人　女 102,959人　世帯数 74,120世帯（人口には、外国人登録者も含む）平成3年6月末日現在

独自の発想で 成長管理必要

建設市場国際化は〝やぶから棒〟

まちづくり国際シンポジウム 基調講演の要旨

D・マーメン氏

◇デビット・マーメン氏＝ペンシルベニア大学都市地域学科卒。都市計画が専門。一九八六年フルブライト研究員として十ヵ月間日本に滞在。一九八九年三月研究報告書「世界都市東京の創造」を発表。現在、ニューヨーク行政研究所国際都市研究部長。同研究所は「公共事業専門家日米交流計画」の米国側窓口である。

長谷川氏

◇長谷川徳之輔氏＝東北大学法学部卒。社会工学が専門。昭和三十四年建設省に入ったのち、経済企画庁、阪神高速道路公団、水資源開発公団、日本住宅公団等で調査企画を担当。昭和五十九年から㈶建設経済研究所で公共投資、住宅建設分野の調査研究を行う。現在、同研究所常務理事。

D・マーメン氏は山梨の今後の発展方向について「地理的に東京の外側にありながら、東京に組み込まれていく地域ではないか。東京の発展線が注がれており、大変革（奇跡）を期待する印象がある」。しかし第一に「二十～二十五年という長期的視点で考えることが大事ではないか」。第二に、「都市計画が国家的プロジェクトと結びつけられる傾向がある。東京・丸の内再開発が日本あるいは東京の国際化に必要というように…、リニア計画も視点が高いところにある」。「より低い視点、地元から見なければ山梨の本当の問題点が隠れ、地元独自の発想が摘みとられてしまう危険性がある」。

第三に、「リニアは両刃の剣でもある。地方分権化より東京集中を促進してしまうかも知れない」。「二十五年後の中府は、山梨はどうなっているか。未来を決めるのはここ数年の内である」と指摘した。

その上で、「山梨県と市町村に必要なのは成長管理政策である」とし、現在静かな改革が進行中といわれる米国の、特にオレゴン州での事例を説明しながら、「山梨県でも幅広く支持が得られるよう（都市の）成長を管理していく戦略を考えてはどうか」と、提案した。

長谷川氏はまず、「建設、不動産市場の国際化は（日本の経済、文化に）将来、深刻な影響を与えてくるはずである」とし、どういう問題が生じるのか、三つの視点で次のように捉えた。

第一は、建設市場の国際的位置について「日本のマーケティングが名目上、極めて巨大であるところにベーシックな問題がある」とした。これは日本の建設単価が非常に高く、非効率であり、「国際化後の勝負は価格であることが理解されていない」。

さらに「米国に次いでEC諸国でもオーバービルディング傾向（建設市場伸び率が経済成長率を下回る）が出てきた。日本の好況の基盤は極めて危ういものであり、低金利、財テク、低コストの三つがいま消え去ろうとしている。これまで建設マーケットを支えてきた動機が何であったか、ファンダメンタルな面からみると九〇年代は厳しい建設市場になる」と予測した。

第二に、「建設市場とはリージョナルなマーケット、土木・建築はその国の文化・社会体制そのものである。」と、国際化にあたっての諸問題を指摘した。

例えば、建築家・士に対してのアートとテクノロジーの視点、物の形状・基盤が文化の反映、社会体制がシステムを生んでいるなどの現状をふまえて、「やぶから棒の国際化」に危惧の念を示した。

第三に、都市のあり方について「（歴史的にみて）パトロンと都市計画家の独断と偏見の産物が（後に）評価されている」。「手続きや数字でわかる共通のコンセプトには哲学が欠落する。良いか悪いかの発想だけでなく、好きか嫌いかの感性の議論も必要。（今の時代）自治体はパトロンの思想をもっては…」と、大胆な個性と指導力を求めた。その上で、市民の公共意識高揚へ、建築家などの専門家の倫理観が問われているとした。

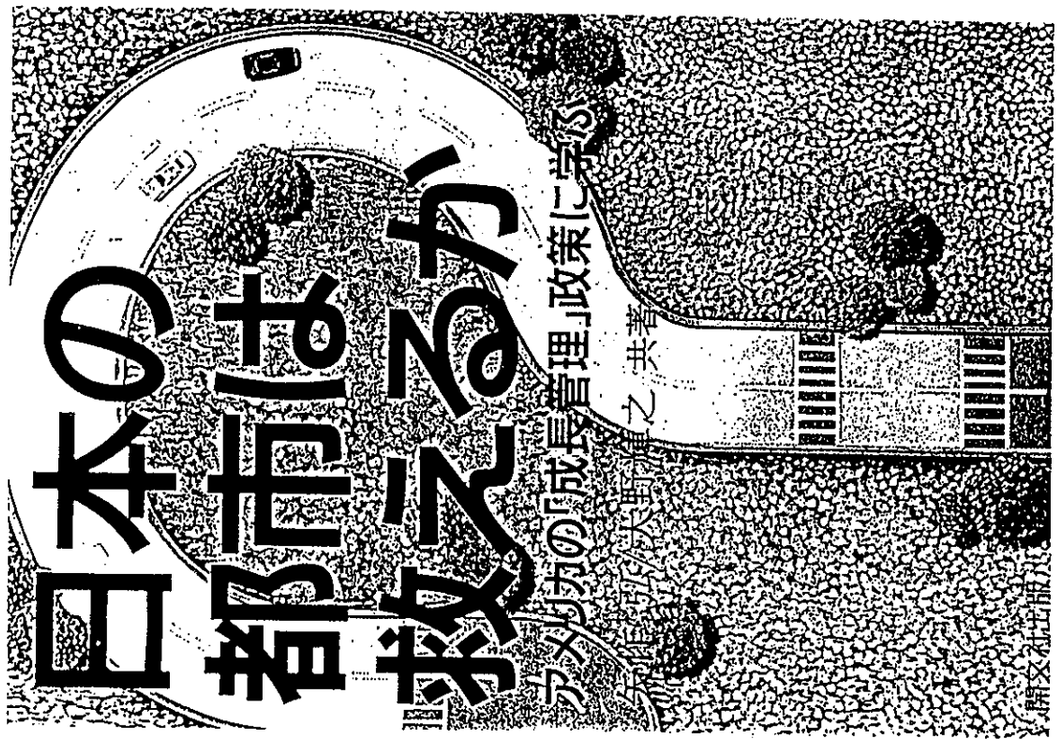
Dear Mrs. Kubota:

I wanted to thank you for your very kind hospitality while David and I were in Kofu. I really enjoyed my visit with you, Mrs. Shindo, and Mrs Osawa.

We had a really lovely day together - tea ceremony, Mount Fuji, the beautiful temple lunch - and it was so nice to get to know you. Thank you again.

Sincerely,

Kristin Nammen



成長管理政策について、より深く
知りたい方は、是非お手元に
そろえて下さい。

著者略歴

矢作　弘（やはぎ・ひろし）
1947年東京都生まれ。71年横浜市立大学商学部卒。同年日本経済新聞社入社。84～85年オハイオ州立大学経営大学院客員研究員。流通経済部次長兼編集委員、国際部次長の後、現在ロサンゼルス支局長。
著書に「町並み保存運動 in USA」（学芸出版社）、「日本の外食産業」（共著、日本経済新聞社）、「ニューメディア時代の流通戦略」（同）、「関西の挑戦」（編著、同）がある。

大野　輝之（おおの・てるゆき）
1953年神奈川県生まれ。78年東京大学経済学部卒。79年東京都庁に勤務。82～85年企画調整局計画部において東京都長期計画の策定などに参加。その後日本興業銀行（派遣研修）、港湾局主査などを経て、現在都市計画局都市整備流課長補佐。

〒160　東京都新宿区坂町26番地
発行所　開文社出版株式会社
電話(03)358-6288番　振替東京6-52864番

（「日本の都市は救えるか」より）

一　成長管理とは何か

「自由の国」の土地利用規制

「自由の国」という言葉は、いつでもアメリカのキャッチフレーズだったし、アメリカが民間企業の自由な利潤追求を行動原理とする市場経済システムの代表国家であることは間違いない。確かに、八〇年代に横行した強引な企業買収や乗取を見ていると、日本以上にダイナミックな民間企業の活躍ぶりが印象づけられる。しかし、このことからアメリカにおいては、土地・住宅政策の分野でも、日本以上に「自由な」民間企業の活動が認められていると思ったら、それは大きな誤解だ。

オフィスの総量規制、リンケージ、環境管理計画、歴史的建築物の保存、低所得者住宅の保護等々。本書が紹介してきたこれらの事例は、生活の質を高めるために必要な場合には、都市の成長、都市開発の進展を市場経済の論理だけにまかせないで、積極的な公的介入を行なうアメリカ都市計画の能動的な側面を示している。「自由の国」アメリカには、厳しい土地利用規制が存在しているのだ。

キイワードは「成長管理」

アメリカ都市計画の強力な土地利用規制という側面を追っていくと、「成長管理（Growth Management）」というキイワードに突き当たる。前章までに紹介してきたいくつかの都市の政策は、いずれも都市開発を適切に制御しようとする広い意味での成長管理政策の例だといってよいだろう。そしてこの成長管理政策は、八〇年代以降において一段と広がりを見せている。

成長管理とは何か。その定義については、まだアメリカでも定説はない。人口やオフィスの増加に直接の制限を加える政策だけを成長管理と呼ぶ論者もあれば、開発そのものは認め、開発にともなう弊害の是正をめざす政策も成長管理だとする議論もある。だがアメリカ都市計画の専門研究者でない本書で、この定義づけの議論にあまり立ち入る必要はないだろう。ここでは、八九年に出版された「成長管理を理解する（Understanding Growth Management）」という本に示された「成長管理とは、開発の速度、量、タイプ、場所、コストに影響を及ぼそうとする行政の意識的な政策である」という定義を引用するだけで十分だと思う。

都市計画の転換点

成長管理には、いろいろなバリエーションがあり具体的な内容は様々だが、その基本にある考え方は、「生活の質の向上は、ある時には、成長を促進することによってではなく、むしろ成長を制限することによってなされる」というものだ。この言葉は、ニューヨーク・タイムズの記者、ポール・ゴールドバーガーがサンフランシスコのダウンタウンプランとニューヨークのミッドタウン・ゾーニングに触れて書いたものである。ゴールドバーガーは都市成長に関するアメリカ都市計画のとらえ方には、重要な変化が起きたという。

「ダウンタウンプランとミッドタウン・ゾーニングは重要な転換点を意味している。すなわち、都市がより大きくなることが必ずしも良いことではないということを、市政府、都市計画プランナーが認識したということである。」

都市は大きくなればなるほどよい、というものではない。生活の質という面からも長期的な経済効率という面からも、適切な規模の限界というものがあるはずだ。同時に、都市成長の速度も速ければ速いほどよい、というものでない。高すぎる成長率は都市基盤能力の不足による渋滞、混雑を招く。また建設コストの急騰を招いて、住宅価格を引き上げるなど様々な弊害を生む。こうした場合には成長のテンポを引き下げることが都市政策の課題となる。

都市計画版「アメリカン・デモクラシー」

日本の都市における成長管理の実現を図るためには、アメリカでの様々な経験を参考にすることが必要だ。特に強調したいのは、政策の内容についての教訓を得ることと同時に、成長管理政策の採用を可能とした「都市計画における民主主義」という側面に着目する必要があるということだ。アメリカは自由の国であるとともに民主主義の国だ。アメリカン・デモクラシーの伝統がこの国の都市計画に流れている。

その一つは、アメリカにおける地方自治の強さだ。アメリカでは、市や町などが土地利用規制に関してどんな政策をとるべきかについて、連邦政府からいちいち干渉されるようなことはない。ニューヨークでもサンフランシスコでも、ダウンゾーニングが必要だと市が判断すれば、市の権限で行なうことができる。こうした自治体の権限の強さが、必要に応じた柔軟な都市政策の展開を可能としている。

これに対して日本では、他の分野と同様に都市計画においても国のコントロールが極めて強い。戦災からの復興期のような時代には、こうした中央集権的なシステムが必要だったかもしれない。しかし、今日のように各都市が個性を持ち、それぞれ異なった状況にある時に、どの都市にどのような政策がふさわしいかを中央集権で正しく判断することができるのだろうか。都市計画の分野でも大幅な地方分権が行なわれる必要がある。

アメリカン・デモクラシーのもうひとつの側面は、市民、住民がはたす積極的な役割という点だ。サンフランシスコやロサンゼルスの「緩やかな成長運動」、ニューヨークの「セーブ・ザ・シアター」の運動などなど、アメリカの都市には強力な市民運動がある。いや単に「強力」というだけでなく、

インタビュー

東京は本当に「世界都市」なのか

コスモポリタン化がもっと必要

D・マーメン

東京は今後どのような都市になってしまうのだろうか……。総合研究開発機構（NIRA）に委託されて「世界都市東京の創造」という、未来を示唆するユニークなリポートをこのほど発表したニューヨーク行政研究所のD・マーメン氏にインタビューした。

……

David Mermen
1938年生まれ。ペンシルベニア大学卒業。ニューヨーク行政研究所所長。専門は都市計画

偏った世界都市観

世界都市というと、日本では国際金融センターのイメージが先になっているが、世界都市になるのにはホーム・タウン的でなければならないこと、つまり人は住まいこそ、マーメンさんが多くの日本人とインタビューされた経験を含めて、世界都市観に残った日本人の世界都市観をまず伺いたい。

マーメン　行政関係者や学べコッパー、研究者と、皆さん、東京の現在、未来についていろいろな見方をしていたのですが、いわゆる「世界都市」という言葉を非常によく使われた。ニューヨークでもロンドンでも、これほど「世界都市」というフレーズは使われない、ということのわりに、深い意味を込めてはいないことに気が付いた。

NIRA（総合研究開発機構）のような機関が、なぜそういった課題を委託したのかを推測すると、世界都市の変容を外国人がどのように考えているかを知りたかったのではないでしょうか。しかし、外国人の視点にこうつながるのではなく、多くの日本の世界都市観のように、東京にもスラムができてしまうのではないかと心配する向きもありますが、ニューヨークのようにならないといっていいかと思う。

ニューヨークにあるようなスラムが誕生されたのは、それなりの歴史的背景があるわけですし、それはアメリカの歴史といったものにつながってくる。東京の今後を考えると、東京独自の発展、歴史を切り開いていくべきで、即ニューヨークのようにならないとは言えない。

だけでなく、もう少し広いところにとらえられるのではないか。

世界都市のほかの二つの特徴としてあげたコスモポリタン的、ホームタウン的な要素も必要だというのは、ニューヨーク、ロンドンから要素を導入したものではなくて、こちらでお会いした人々、不動産業者の方々別としてやはり述べていただいてです。

……コスモポリタン化、ホームタウン化ということで、いま東京が最非ともなければいけないことはどんなことでしょうか。

マーメン　この答えを知っていれば都知事に直接講演するのですが……（笑）。

しかし、東京の将来に関心を抱く人々は、この広い定義が可能だということを認識しておくべきでしょう。そして東京は世界都市化するプロセスにあることをしっかり認識したうえで、さまざまなプロジェクトを実施することが大切です。

ところが、現在のところは金融センターに力点が置かれすぎているきらいがあって、それを実現したプロジェクトがいろいろ行われている、三つの要素をそれぞれに等度に入れたプロジェクトをもっと多くの人々が考え、それを選択していくことが必要なのではないでしょうか。

どう国際化するか

……リポートでは、移民がニューヨークを活性化させているのだ、という指摘が多い。日本では外国人労働者を受け入れるかどうかが大きな問題になっています。それぞれの都市には固有の発展過程があり、日本にはニューヨークのケースがあてはまるのかどうか。

マーメン　インタビューを通じていえることは、日本あるいは東京の国際化について考慮されているという、ここに三つの性格に偏んではいけない、というのが多くの方々の意見だった。確かに東京がニューヨークのようになる、日本がアメリカになるようなことはありえないとは思います。

しかし、やはりそういった問題を実際に考えなければ東京の国際化あるいは世界都市化ははじまらない。ニューヨークでみられるように、日本でも移民が日本経済など、東京の発展に貢献することは可能ではないか。

外国からの影響は必ずしも外国人労働者や留学生に限らない。外国で仕事や勉強をしてきた博士号者、博士号女の意見をもっと反映する、そういう人たちがもっと、いきいきと活動できることも大切ではないか。それらの人々の経験や、東京についての新たな見方などの意見を吸い上げる方法が何かなければならない。

ニューヨークの状況と関連するが、世界のいろいろな都市の個別社会に関係しているマーメンさんには理解できないのは、高度成長期は陸の人口集中過程において東京に新しいスタムが生じなかったのはなぜかということです。

マーメン　確かに、山谷のような特殊な地域はありますが、ニューヨークでみられるようなスラムは私も目にしておりません。これは都市計画がうまくいったからではないと思う。

日本がよくいわれる協調社会であるということ、人々がみんな自分は中流だと思って同じようなライフスタイルをもち、所得の分布もそれほど政策の差がない、それが最大の理由としては、アメリカなどと比べると、人種間の緊張が、ないわけではないが、比べものにならないほど少ないということです。

リポートの中でも述べましたが、とくに住宅地をみると、一つの地区の中に高所得の人と低所得の人もいる。木賃アパートの隣に住居の程度も大きく異なっているのではないか。ニューヨーク、ロンドンのように、貧しい人々が都市の一角に追いやられてしまうということがないのは、外からみて非常に清潔らしいことです。

やがては、国際化が今後進むにつれて東京にもスラムができてしまうのではないかと心配する向きもありますが、ニューヨークのようにならないといっていいかと思う。

市やデベロッパーの計画に対抗する代替案を示す政策的能力を持った「知的な強さ」がある。そして、こうした市民の声を都市計画の中に取り込んでいく、コミュニティ委員会や市民諮問委員会などの参加制度がある。

市民運動の要求は、しばしば市の方針とぶつかりあう。しかし、結果的には、生活の質を求める市民の声と知恵が、地方自治体の努力とあいまって、土地利用規制の強化、成長管理政策の採用を実現してきたのだ。

成長神話を越えて

土地に関する私権の強い日本では、成長管理のような政策を実施することは不可能だという見方もある。確かに、アメリカ型のダウンゾーニングをそのまま提案しても、資産価値が下落するとして、土地所有者の猛烈な反発を受けることだろう。しかし、こうした土地所有権の強さを宿命のように考えて、土地利用規制強化の試みを放棄してしまうのは誤りだ。アメリカにおいても、土地利用の規制は最初から現在のような強力なものであったわけではない。成長管理政策だけに限っても、ペタルーマでの採用から二〇年の歴史を経て、現在のような大都市の成長管理が実現してきた。

「くたばれGNP」という言葉が新聞をかざったのは、もう二〇年近く前のことだ。国全体の経済に関しては、もっぱら成長率の高さを追い求めるGNP第一主義を語る人は、もはやいない。しかし、都市開発に関しては「成長神話」が強固に生き続けている。明らかに開発の行きすぎによる弊害が生じていても、その抑制を行なわないばかりか、成長促進の旗がふられることもある。

土地利用規制強化の試みに対しては、「規制をすれば経済が衰退する」というような説が、何ら論証もされずに語られる。高すぎる成長が住宅難や交通混雑を引き起こしてることは、日々の生活で実証されているというのに。

開発エネルギーのきわめて高い日本の都市で成長神話にピリオドを打つためには、単なる生活実感に依拠するだけでは不十分なのだ。都市開発を制御し、都市成長を積極的に管理しなければ生活の質の向上は望めないということを、そして成熟した風格のある都市は作れないということを、誰の目にもわかるように論証していく必要があるのだろう。これは、日本型の成長管理政策のあり方を具体化することと伴に、これからの都市プランナーや都市経済学者たちに課せられた重要な、しかも緊急の課題だと思う。

「生活の質の向上は、ある時には、成長を促進することによってではなく、むしろ成長を制限することによってなされる」という成長管理のメッセージが大多数の人に受けとめられた時、新しい都市づくりを開始することができるのだ。

なるということはいえないのではないか。

特色あるビジネス手法

……リポートでは、東京の都心を経済・金融界だけに引き渡すべきだと考えているのは宿命論者だけだろうという指摘がある。ビジネスセンターとしての丸の内の再開発計画と絡んで話題となった。

マーメン　宿命論者というのは、とくに三菱（地所）の計画を強く批判しようというのではなくて、どちらかというと、一般的な警告というのでしょうか。そういった意味を含んでいた。

日本のあまりにも多くの方々に、東京の将来はもう変えられない、たとえば都心部においては、オフィス街化によって住民が追い出される、あるいはオフィスの賃借料が上昇する状況は変えられないという、あきらめがある。もっとほかの方向や方法を選択することも可能なのではないか、そうしたことをいいたかった。

宿命論者というのは、そうしたあきらめ、もうこうなるしかないという考えを指していったわけです。

……東京の特質として、都心へのオフィス集中にはフェース・ツー・フェースの接触が日本ではとくに必要なのだ、ということがいわれている。欧米と比較して、それが際立っているのかどうか。

マーメン　私の観察したところによると、日本でのビジネスのやり方は、トップから下に至るまで、会って名刺をやりとりし、情報を交換し合って決定に至る、ということが非常に重要なようです。たとえばニューヨークなどでは電話でことを済ませてしまうし、直接会う必要はそれほどない。

アメリカの都市計画家のなかには、情報技術が発達すればするほど出会う必要がなくなるし、都市機能の分散も可能になるという見方があるが、それは日本の場合には必ずしもあてはまらない。確かに日本は、情報技術はある面では発達しているが、その実際の応用となると、アメリカとは違って、今後も依然直接会うことが重要であり続けるでしょう。

アメリカと日本の違いは、アメリカでは、たとえば会社をマンハッタンの真ん中から、社長の住むような郊外へ移してしまう、ということが行われる。それは日本ではありえない。日本では社長は都心の会社に通勤するということが続くだろう。

……シティには六〇〇〇人ぐらい住民がいる、といわれる。ウォール街にも住民がいると思うのですが、日本では丸の内、大手町といったビジネスセンターだけでなく、都心三区ではオフィス街化に伴って住民がいなくなってしまう。その違いはどこにあるのか。都市計画の面で日本のやり方に欠陥があるのでしょうか。

マーメン　都市計画だけを非難するわけにはいかない。問題は複合的なものだと思うが、ウォール街の場合にいえるのは、単にオフィス街ではなく、いまだにホームタウン的な要素も持ち合わせているということです。

ウォール街に隣接してバッテリーパークの開発が行われたが、それも単なる金融センターだけでなく、人々が住むホームタウンとして開発された。丸の内や兜町にもっと人を住まわせるべきだとはいいきれませんが、東京の場合も完全にオフィス街化するのではなく、住むのではなくいが、人々が夜、遊べるようなレストランを残したり、そうしたホームタウン的な側面を残すことができるのではないか。

オフィス分散は可能か

……東京の都心三区では、いま定住（夜間）人口を増やす対策をとっている。しかし、現実にはいままでの住民は外へ出て行く、都心には三菱地所が建設中のビジネスマン、いわば新しい住民が住むような所づくりを進めているように思われますが……。

マーメン　いまいわれたことは、ニューヨーク、ロンドンでも起こっていることです。新しい住宅を建てると、そこの家賃は高くなって、どうしても古い住民は追い出されてしまう。古い住民をつなぎとめるのは難しいことですが、ニューヨークのバッテリーパーク・プロジェクトでは興味ある実験をしています。

再開発によるオフィスは高い家賃がとれるので収益があがる。そこに利益を求めてニューヨークの他の地域、とくにハーレムなど、非常に住

環境の貧しいところの再開発に振り向ける、補助金の一つの型である。クロス・サブシディという方式をとっている。こうしたことは都心三区の場合にも何らかの参考になるのではないか。

リポート『世界都市東京の創造』

ニューヨーク行政研究所が総合研究開発機構（NIRA）の求めに応じて作成されたのがこのリポートである。ニューヨーク行政研究所は創立八二年の民間の研究機関であり、本拠をニューヨーク市に置き、世界的活動を展開している。一九一八（大正七）年から二一年まで所長を務めていたチャールズ・ビアード博士は関東大震災前後に東京の行政に関して当時の後藤新平・市長に助言し、東京市政調査会の設立にも寄与している。

「世界都市東京」が声高に叫ばれている今日、外国人が東京の現状をどう観察し、将来に対してどのような示唆をしているか――。興味深い内容になっている。そのリポートの概要を紹介しよう。

リポートは世界経済のコマンドポストあるいはコントロールセンターとしては、東京はすでに世界都市であるという。東京はすでに巨大な世界的市場であり、海外からも人間、モノ、資金、そして情報が流れ込んでいるからである。

しかし――とリポートはいう。国際金融センターとしてのみの世界都市東京のイメージが拡大されているが、ニューヨークやロンドンの経験は世界都市はそれがもっと広く深い意味をもっていることを教えているのだと指摘するのである。世界都市が国際金融センターだけでなく、コスモポリタン都市を意味するならば、東京はまだ世界都市ではないといえよう。

さらに、いま必要なのはオフィス需要を都心においてみたすのではなく、都心はホームタウンの環境を含むものにしなければならないと主張する。そこでは東京の新都心、東京大都市圏における業務核都市構想を支持する立場をとっている。開発を分散させることは首都機能を東京から移転させるという論議に密接にかかわるとしたうえで、行政および政治機能は日本では相互に経済力と密接に結びついているので首都を移転する前に経済界と政府の関係を見直すべきだという。

これらリポートの内容を踏まえたうえで、リポートの作成にあたったダビッド・マーメン氏にインタビューした。リポートはマーメン氏を中心とする担当者が一九八八年以降三回にわたって来日し、精力的な調査をおこなった。マーメン氏は八六年、フルブライト研究員として東京に滞在、中央区の新川地区の急速なオフィス街化の状況や多摩ニュータウンなどの開発状況もつぶさに観察している。

たとえばリポートでは、東京のビジネス社会におけるフェース・ツー・フェースが重視されている状況を述べる際に、丸の内から新宿へ移った会社もいくつかあったが、彼らはこれが「世界で最も長い五㌔……」であることを学んだだけだったと記述する。東京のビジネス社会の機微に触れているという点でも興味深いリポートである。

（佐藤　正之）

このことは、「世界都市とは何か」ということにまた戻るわけです。世界都市のイメージが、オフィスビルと、それを取り囲むホテルなりレストランなりということだったら、確かに都心から住民がいなくなってしまって、オフィスビルが林立するということになる。

それに住民が実際に住むというイメージがプラスされたならば、それに即した意思決定もされるでしょうし、それに沿うような政策も生まれるのではないかと思います。

……先ほどの話では、アメリカの企業は郊外に分散する傾向をみせている。リポートでは、日本では都心部の拡大にすぎなくて分散という動きとはいえないと書かれている。東京湾のウオーターフロントではいま、横浜や千葉などでは業務機能の分散をめざして、いろいろなプロジェクトが進んでいるのですが……。横浜・川崎、八王子・立川、千葉、土浦・筑波研究学園都市が業務核都市ということになっている。

マーメン　いま東京は、都市の構造の中で都心三区に業務機能が集中している半面、多心型、つまり、周辺に核となる地域をつくるという、両方の動きが非常な緊張をはらんで進んでいるのではないかと見受けら

MEMO

れる。リポートでは、あとのほうの複合的な動きをもっと進めるべきではないかということをいっているわけです。

フェース・ツー・フェースを必要とする部分の業務機能の集中はとまらないが、一方、バックオフィス（第二本社）的な機能とか、フェース・ツー・フェースのコミュニケーションが必要でない機能はより分散、あるいは首都圏の核都市に広げることが可能ではないかと思う。世界都市というものを、たとえば関東全域というようにとらえると、多核化もより可能になるのではないか。

東京の都心部以外のさまざまな動きをみますと、そうした芽がすでに現れている。具体的に今後どうなるかはわからないが、長期的には、そうした核都市がもっと独立して機能するようになり、東京の都心部との緩やかな連係を保ちながら自立することが可能ではないか。

アメリカでも現在そのような動きが起こっています。そうした自立した核都市が中央政府や地方自治体の政策と真っ向から衝突するのではなく、そうした政策を支援していく、なにかそうしたよい動きが出ればいいと思う。

おかしな遷都論議

―― 一時期、話題となった首都移転についてはいかがですか。

マーメン　遷都論議が盛んにあるわけですが、率直にいって、考え方がどこかおかしいのではないか。見方が近視眼的なのではないかと思う。現在の東京の問題と真っ向から取り組んで、それを解決しようというのではなく、東京における問題点を抽出して、じゃあ、首都を移そう、それで解決するだろう、というような安易な見方がみられるような気がします。

確かに日本には技術力も資金力もあって、遷都は可能かと思いますが、新首都に行った政府の役人が新幹線で東京に戻ってきて、仕事は東京でするようになるのではないか。東京をどうするかということをもう少し考えるべきではないかと思います。

日本の場合はとくに行政と経済界の結びつきが非常に強いと、リポートの中でも指摘しましたが、それを人工的に断ち切って、非生産的な行政部分は外に出してしまうということは不可能ではないでしょうか。いろいろな遷都論議を聞いていると、東京以外の他都市をもう少し開発したいというのが裏にある本音のようです。

政府の省庁との関係をどうしようとか、そうしたところまで思いが至っていないような気がする。

……マーメンさんは東京に滞在された経験があるうえに、リポートを作るにあたって東京だけでなく仙台、京都、神戸、大阪でもインタビューされていますね。東京一極集中といわれる日本の状況の下で、地方都市がどのように発展していったらいいのかを最後に伺いたい。

マーメン　結論としては、どの都市もそれぞれ独自の解決策を見いだすしかない。東京をまねしてそれぞれがリトル東京になろうというのは間違いだし、不可能であろうということです。

短期的には、経済の東京圏集中は進むでしょうし、これらの都市は非常な困難な時期を迎えると思う。

中長期的には、なんらかの手を打つべきだし、そのためには、いま地方都市がどういう状況にあって、どういう方法をもって目標に向かっていくかを見極めることが必要でしょう。それには、地方自治体だけでなく、地元の産業界や周辺の人々が協力してことに当たらないとうまくはいかない。

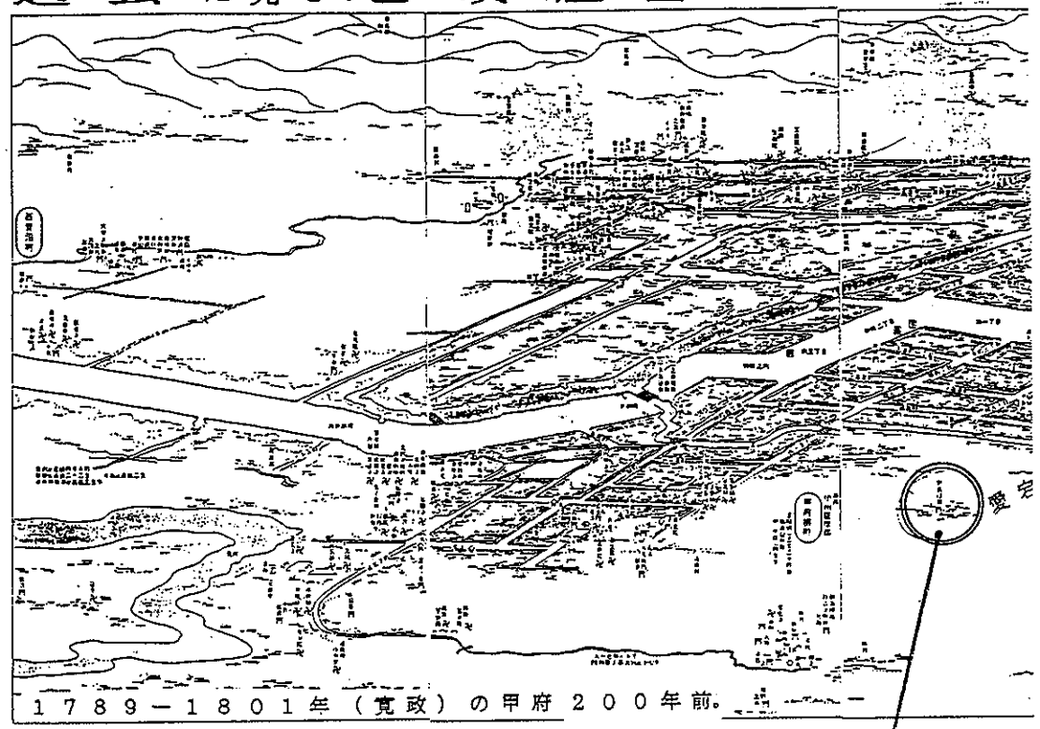
中長期的にみて、国際化はどこの都市も経験することです。日本の経済がますます世界の経済に組み込まれるということは、地方もまた国際化をしなければならないということを意味する。いま、多くの都市が国際化に向けて、というのは間違った選択ではない。

どこの都市とはいいませんが、遷都によって問題をすべて解決しようという都市もあって、遷都が経済的苦境を救う万能薬のようにとられている。それはちょっとやめたほうがいいのではないか。問題の解決策にはならない。万が一、失敗した場合には、代替策はないし、遷都が実現するかどうか、私は非常に懐疑的です。

それよりも、現在自らにどういった力があるのかを見極めて、地元の協力を得て発展させていくということのほうが正しい道ではないかと思う。

（聞き手　編集部　佐藤正之）

過去に見る地域経営



１７８９－１８０１年（寛政）の甲府２００年前。

４００年前の地域経営原風景。

検地１５８９（天正１７）年、伊奈熊蔵検地。

甲府の地割のルーツ。野良浅間神社から縄打ち。

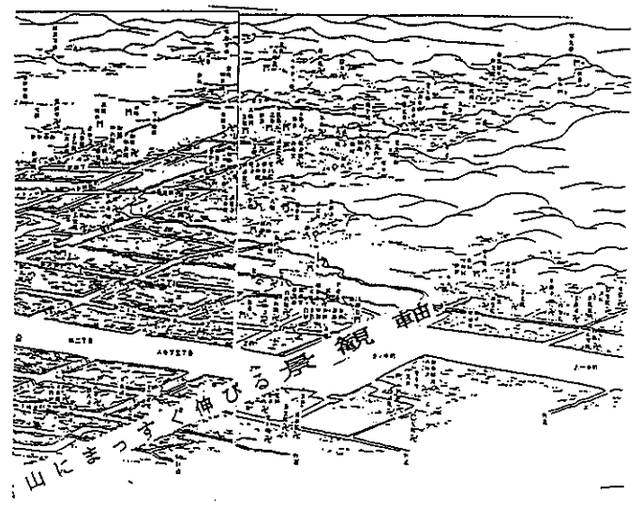
土地と税の始まり。太閤秀吉による地域経営。

野良浅間神社（のらせんげんじんじゃ）　甲府市青沼三丁目。野良は俗称で、神号はあさまである。付近は東青沼と言ったが、「甲斐国志」村里部蔵田村の項

によると1589（天正17）年、伊奈熊蔵検地の時、蔵田村の野良浅間の古神し（祠）ある所から縄（なわ）打ちを始めた、とある。蔵田村は中央三丁目の甲斐奈神社を祭る所あたりまであった細長い村であって、西は緑町（若松町）、東は東青沼（青沼一丁目）の西に接していた。人家は少なく農耕地が多く、野良浅間といわれてきたものだが、甲府城築城の文禄時代(1592—1595)、寺社の移動や町区画を整備した際、蔵田村も分割されて境内地も東青沼分になったものと推定される。浅間神社の木花開耶姫命（このはなさくやひめのみこと）を合祭する甲斐奈神社も蔵田村の時代があり、野良浅間は甲斐奈神社の浅間祭神の分けみたま（分霊）ともいい、南深町（城東二丁目）の湧川を境に、両者の氏子区域が現在に及んでいる。浅間社殿は1945（昭和20）年の空襲で焼失後、1957（昭和32）年に復興、新社殿が完成したが、東向きで、富士山を拝する浅間社の形はなく、また甲斐奈神社の形でもなくなっている。

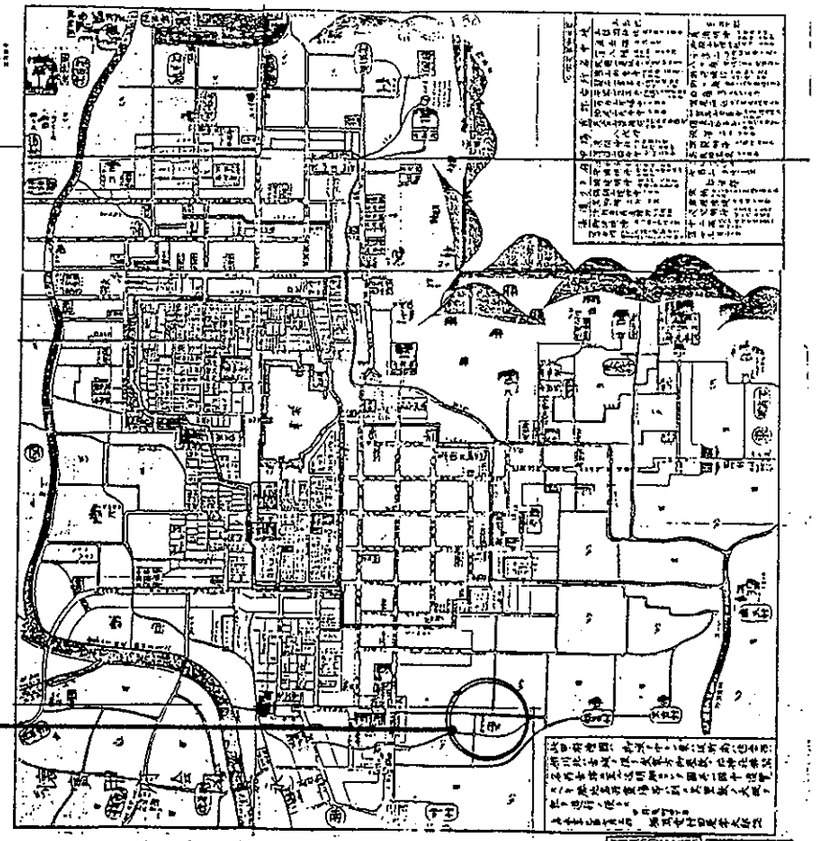
〈小沢　秀之〉

検地ー田畑を測量して、面積、境界、石高（こくだか）等を検定すること



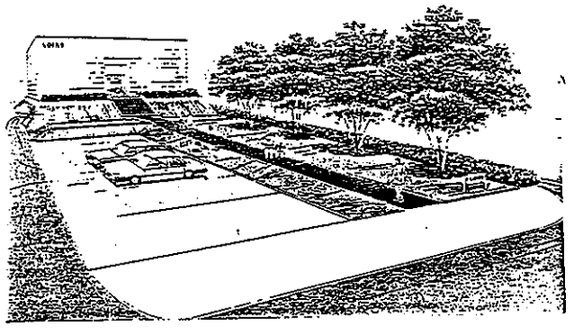
八日町（ようかまち）　甲府市の旧町名。1964（昭和39）年中央2、3、4、5丁目となる。甲府城の築城により成立した新城下町の１つ。町名は古府中時代にあった八日市場の名を移したことによるという。柳町、三日町、山田町とともに商業街の中心地で「裏見寒話」には「此町へ入ると向うに八日町見付見ゆ。呉服屋、薬種屋、合羽屋などがあり、府中第一のよき所也」と記され、大商店が多かった。1686（貞享3）年には穀問屋、綿問屋、さかな問屋各１人が見え、元禄年間には両替屋１人があった。中期以降の商人には24人の大物商人が目立ったほか、各種商店でにぎわった。戸数は1836（天保７）年61戸、1889（明治22）年114戸。この間、1872（明治５）年内藤伝右衛門が峡中新聞（山梨日日新聞の前身）を創刊、1878（明治11）年には甲府郵便局が移転してきている。また1905（明治38）年、若尾銀行と若尾貯蓄銀行が町内へ新築移転、豪壮なれんが造りの建物は若尾財閥の象徴として有名であった。中央線甲府駅の開設により大正期以降市内の繁華街がしだいに西進するが、しにせが多く、昭和初期から諸会社の設立も見られた。1951（昭和26）年の世帯数81、人口423。

〈坂田　文弥〉



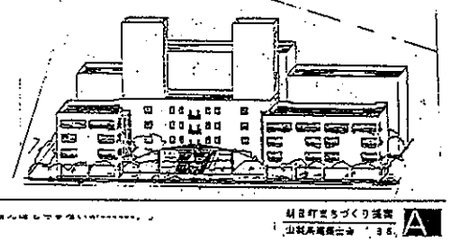
１８５０年（嘉永三年）の甲府１４０年前。

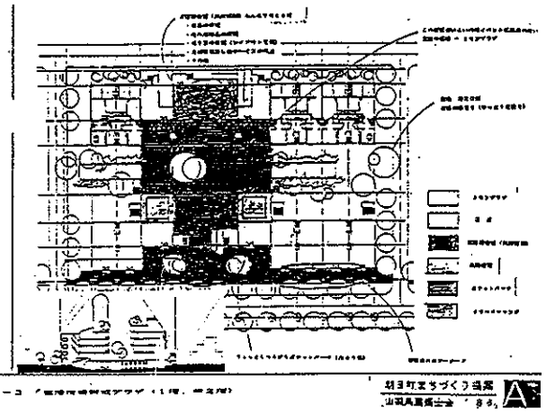
いま見る地域経営

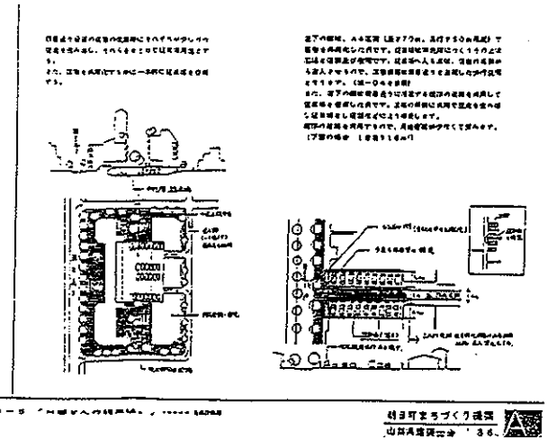


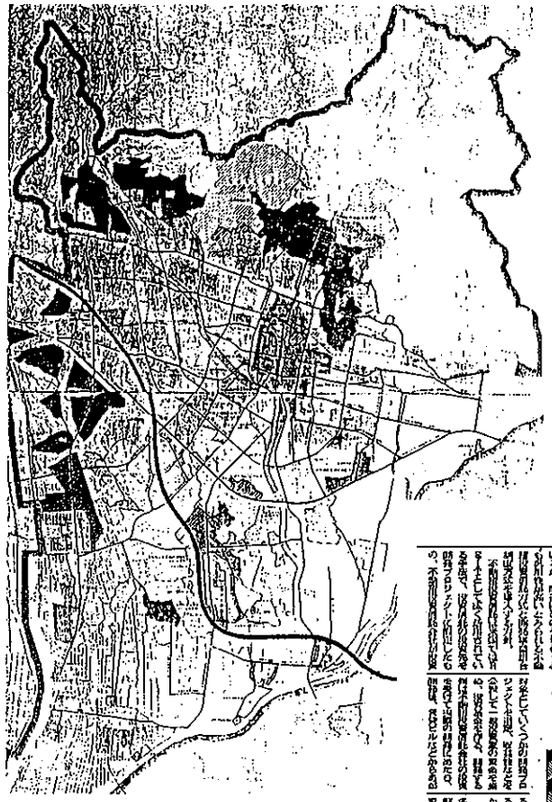
町中の空洞化 どうするの?

土地は売らないで地域経営。









日経産業新聞 1991年(平成3年)4月27

大規模都市開発推進へ

地価が高けりゃ証券化

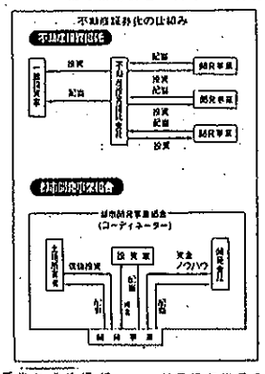
建設省、来年度から2制度

広範囲に資金を調達

出資に応じ利益分配

不動産投資信託

都市開発事業組合



先に見る地域経営。

Chapter X.
The Guardian
of the Gate.

『やまなしい心地良さ』

近ごろ「やまなしい」＝山梨らしさと評する意味で、あちこちで聞こえてきます。元来、地元で使われていた言葉ではなく、山梨に生活する心地良さを感覚的に表現した新しい言葉だそうです。それと似た言いまわしに「あすましい風景」というのもあります。

山梨の生活者としてこの場所の特性を言いますと、まず高い山並みと盆地特有の豊かさに恵まれた景観を真っ先に挙げます。山並みはご存知の三、000m級の南アルプス等に囲まれ、そのふもとに甲府盆地がそびえ立ち、そのスケールと形状は比類ないものであります。また、盆地環境的な規模でも評価される豊富な歴史が残されている場所でもあります。

甲府盆地の鳥瞰から見渡すと、大きな山の彼方への希望及び期待感と山の内側での安心できる領域感が相互にはたらく、盆地特有の心理的バランスのとれた場所に思えます。過去、山の彼方に夢を抱き、天下人になるべく邸宅したのもこの盆地であり、突然時代を動かす人々が育つのもこの盆地土からくるものでしょう。また、山の辺（斜面地）では、山を背に母親の胸に抱かれた様な安心さを感じ、眼下に拡がる都市の光景を手中に納める心地良さと、明日への不安と希望が入り交じるスカイラインを四方共有できるロマンチックな場所でもあります。

このように地形のふくよかさや厳しさが、人々に希望ややすらぎを与えてくれます。これが「やまなしい心地良さ」と言えるのでしょう。

『エメラルドシティ
地域経営術』
＝山梨の役割＝心の
浄化の場づくり＝

建築士会青年部のこと故年来の活動の中で、「山梨の景観とは」というテーマがあります。自然、観光、まちづくり等の視点で石和町、清里、富士山（河口湖）の景観ガイドプランの提案をしてまいりました。その過程で痛感する東京は無視する訳にはいかず、山梨は首都圏の向を担うのか、そのための地域正義をどう取り付けるのかという論議に終始しました。

東京マネーの不安と期待で迷っている山梨ではありますが、その東京マネーのルーツを作ったのはこの地の人々だったんだよと、要術家の高橋辰雄氏は言う。「旧武田の家臣から家康に仕え、甲州金をベースにした特別の経済論をバックに、江戸幕府の金づくりを担った大久保長安等の甲州縁金術師たちは、甲州、佐渡等全国の金山採掘により、江戸幕府貨幣経済の源を作ったのだ」と、今日世界を駆け回る東京マネーがこの甲州から出たのだとわかれば、東京マネーを恐れずにはっきり使い分けが出来るはずで、先のやまなしい心地良さのために必要かどうか、地域のためになるか否かのメジャーづくりは出来得ると思います。

◇

今、グランドデザインづくりが急がれております。あちこちで待に若者間でこんな地域にしたいという声が聞かれます。リニアモーターカーに対するある種の期待感の影響を受けてはならないのは、この地域を自分達で経営し、運営していくのだという意識であります。地域経営に責任を持てるプランニングをして行かねばなりません。国家的事業の高速交通網の体系化の中、地域はそれを呼び水に大きく飛躍を願うことと同時に、既存の社会システムの再考や検討を要し、それが何よりも市民の発意と合意であることが大切であります。

さて、日頃私達青年層の中で呼ばれている山梨の21世紀ビジョンの一部をご紹介します。

◎世界若口会議の開催◎三古共和国（ジュエリーキングダム）の設立◎自然と生活による特別地域構想（ふるさと等・成田＝糸魚川論）◎北村眞一〉◎県都の新しい都市軸、景観軸の策定◎建築士会青年部〉◎新都市交通システムの中間駅地下乗り入れ◎大店法対策による地下街の拠点づくり◎鶴川ニュータウン計画（自然浄化都市構想）◎若松町駅土計画◎高橋辰雄〉◎県甲府ハイパフォーマンス（経済的機能温水）タウン構想◎世界ミュージカルコンベンション＝宝塚歌劇団誘致（石和）◎農業、果樹の市場経済から観光経済への移行◎北村眞一〉◎休耕田及び都市農地のクライムガルデン（市民農園）化◎新野仁志〉◎共同幻想的都市論の構築◎進藤哲雄〉◎Mt富士州立大学構想◎手塚元康〉◎スポーツファームの促進◎猪沢博次〉◎ワインパーク構想（勝沼）――など。

あちこちで元気の良い国際的地域経営構想の部分を担う人々のネットワークが徐々に地域にインパクトを与え出し、いずれ来るべき山梨を創りしめることでしょう。

◇

山間の森の切れ間から、美しく緑に輝く都市が浮かび上がる。あのオズの魔法使いのドロシーが行き着いた夢の都市エメラルドシティ。幾多の謎解きに挑戦し、途中挫けそうになったことも多々あり、最後に愛と勇気がすべてを解決してくれた、あのエメラルドシティは、人々の心の中にある都市像なのかも知れません。まこは住まい手、自らが輝いて、自然の光景に映し出されると妖都市夢の最頂点に達します。それぞれのエメラルドシティを見つけようではありませんか。エメラルドシティは地域経営ワークショップの手引書なのです。

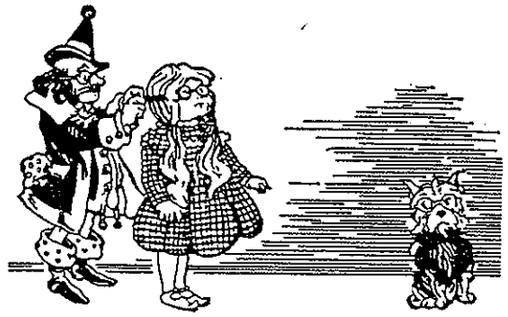
（社）山梨県建築士会
青年部長　久保田　要

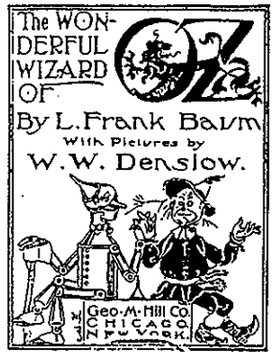
市民の発意と合意が大切

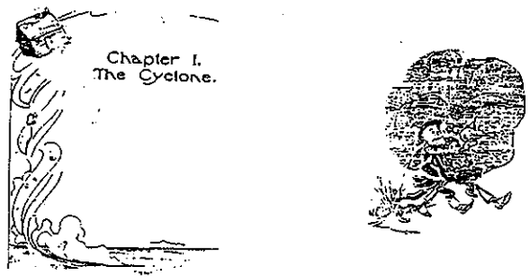
人と地域経営構想をネットワーク
――夢の都市・エメラルドシティをめざして――

山梨ドリーム！

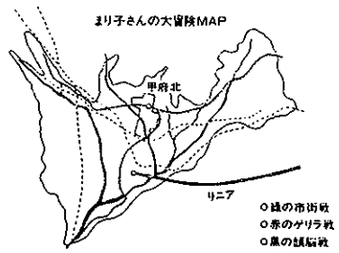
The Wonderful
Emerald City of OZ.







まり子さんの大冒険　進藤哲雄



● 緑の市街戦では、地域生活を保証するパブリックな空間づくりをこれから先20年、30年あるいは100年の単位で提案したいと思います。例えば市民レベルで河川の公園のことが出てきてこういうものが都市計画課の中ではどのように評価されているかなどと逆に問いかけるのです。公共空間の中では河川面積はとても大きいわけです。地域の生活を保証するということで、甲府盆地そのものが全部開発されたときでも、この地域にほむ人たちがちょっとした緑地であるとか自然であるとか享受できるものをこちらで提案しなければならないのです。

● 赤のゲリラ戦ですが、甲府盆地の残存農地がほとんどなくなるほど開発されるかも知れない時によりよい形で何を残していくのかということです。民有地をできるだけ先行取得して公園化したり、商業共育地として残していくことが出来れば一番いいわけですが、市街地をどのようにすれば快適に生活でき、生産出来る様な場所として遺り残すことが出来るかこれが赤のゲリラ戦のテーマです。

● 黒の頭脳戦は上記の2つの作戦を進めるにあたり人材をどの様に育て、集めるかという戦略です。地域のグランドデザインを提案し実行していくために、選択出来るコミュニティをどう作ったら良いかということを考える部分です。

（その他事例）・産業を基盤とする地域経済・まり子さんの空中戦、情報発信の都市づくり・エメラルドシティーに人が集むとき

エメラルドシティーは地域経営ワークショップの手引書です。

開催主旨

私たち、山梨県建築士会青年部は、"市民としての建築士"という視点から、ここ数年来、地域に向けたまちづくりの提案を数々してまいりました。私たちの活動は、まちづくり、景観づくりのための報告書による提案と、もう一歩踏み込んだ実践的な展開であります。従来の活動をふまえ、昨年より、全県の青年部メンバーと地域の実状等を話り合い、まちづくり実践を模索してきました。そして今年の1月末、私たちの地域をより客観的に捉えるべく、メンバー20名近くでニューヨークを訪れ、数々の貴重な体験をしてまいりました。この度、その折の訪問先のひとつであるニューヨーク行政研究所の国際都市研究部長D・マーメン氏にご来県していただく機会に恵まれました。

このシンポジウムは、"都市の成長管理政策Growth Management"を提唱されているD・マーメン氏と日本の土地政策の専門家である長谷川徳之輔氏らを囲んで、この地域のビジョンを市民の立場から話り合う場にしたいと思います。

世界情勢が刻々と変わりつつある今、"日米まちづくり構造協議"の交流の場として、関係諸団体、諸機関はもちろん、広く一般の皆様と共に、グローバルな視点で地元のまちづくりを考え、創造していくために、企画いたしました。

会場案内図

主催●㈳山梨県建築士会青年部
Young People's Department Yamanashi Prefecture Association of Architects

協賛●㈳関東甲信越建築士会ブロック会青年建築士部協会
㈳山梨県建設業協会
㈳山梨県建築設計協会
㈳山梨県建築士事務所協会
㈳日本建築学会山梨支所
㈳JIA山梨クラブ

後援●山梨県
甲府市
甲府商工会議所
山梨日日新聞社
YBS山梨放送
UTYテレビ山梨
NHK日本放送協会甲府放送局

〈お問い合わせ先〉

㈳山梨県建築士会事務局青年部
甲府市丸の内1-14-19 TEL0552(33)5414

SYMPOSIUM

いま見る、先見る! ヤマナシドリーム

まちづくり国際シンポジウム

〈市民による地域経営と国際化〉

日時/1991年6月28日㈮
PM1:30〜PM4:30
PM4:40〜 パネラーを囲んでの交流会
(となたでも参加できます)

場所/甲府・シティプラザ紫玉苑
甲府市飯田1-2-4 TEL0552(24)4422

PROGRAM

PM1:00▶受付開始(鳳凰の間)

1:20▶開会挨拶
㈳山梨県建築士会青年部長 久保田要

1:30▶基調講演①
「成長管理政策とグランドデザイン」
ディビット・マーメン氏(ニューヨーク行政研究所・国際都市研究部長)
基調講演②
「建設、不動産市場の国際化のなかでの
地元まちづくりのかかわりあいについて」
長谷川徳之輔氏(財建設経済研究所常務理事)

2:40▶――休　憩――

2:50▶研究報告①
「甲府の都市形成史」〈ヨーロッパ日本研究学会発表論文―ベルリン〉
北村真一氏(山梨大学工学部土木環境工学科教授)
研究報告②
「都市政策と公共投資」
早田俊広氏(財建設経済研究所研究員)
研究報告③
「エメラルドシティーと市民建築士」
久保田要氏(㈳山梨県建築士会青年部長)

3:20▶パネルディスカッション(被験応答)
パネラー●上記講演者、報告者各氏
コーディネイター●高橋辰雄氏
(美術家・環境芸術ワークショップ代表)

4:20▶全体のまとめ
㈳山梨県建築士会理事(前青年部長)進藤哲雄

4:30▶閉会

4:40〜6:00▶パネラーを囲んでの楽しい交流会(孔雀の間)

PROFILE

◆パネラー

ディビット・マーメン●David Mammen
(ニューヨーク行政研究所国際都市研究部長)

1952年生まれ、ペンシルベニア大学都市地域学科卒業。
都市計画を専門とする同氏は、1986年、フルブライト研究員として、10ヶ月間日本に滞在した。
1989年3月には数多くの来日経験を基に、研究報告書「世界都市東京の創造」を発表している。
ニューヨーク行政研究所は、「公共事業専門家日米交流計画」の米国側の窓口である。

長谷川徳之輔●はせがわ とくのすけ
(財建設経済研究所常務理事)

1936年、静岡県沼津市生まれ、東北大学法学部卒業。
社会工学を専門とする同氏は、昭和34年建設省入省以来、同省都市局、道路局、経済企画庁、阪神高速道路公団水資源開発公団、日本住宅公団などで調査企画を担当。昭和59年より財建設経済研究所主任調査員として、公共投資、住宅建設産業などの調査研究に従事。現在、同研究所常務理事である。名古屋大学工学部非常勤講師。
主な著書　「土地神話の崩壊」、「新聞にみる社会資本整備の歴史的変遷」、「東京の宅地形成史」

北村真一●きたむら しんいち
(山梨大学工学部助教授)

1950年、東京都生まれ、東京工業大学大学院卒業。
同大助手を経て現在、山梨大学工学部土木環境工学科助教授。
専門は景観工学、県景観審議会の委員などを務める。

早田俊広●はやた としひろ
(財建設経済研究所研究員)

1959年、福岡県福岡市生まれ、東京大学法学部卒業。
昭和58年建設省入省。河川局、経済局、都市局などで調査企画を担当。昭和62年より経済協力開発機構(OECD、在パリ)に出向、世界の都市問題について調査研究に従事。平成2年より財建設経済研究所に出向。都市政策、公共投資政策の国際比較を担当。
主な論文　「社会資本の再生」、「Public Investment in Japan」

久保田要●くぼた かなめ
(㈳山梨県建築士会青年部長)

1951年、大阪生まれ甲府市育ち。東京電機大学工学部建築学科卒業。
同大(阿久井研究室)の研究員として、軍艦島調査隊に参加。
現在、久保田一級建築士事務所主宰。県景観審議会委員、県まちづくりアドバイザーとして活躍中。

◆コーディネイター

高橋辰雄●たかはし たつお
(美術家・
環境芸術ワークショップ代表)

1952年、甲府市生まれ。山梨大学工学部卒業、後日ゼミSchool等に学ぶ。
東京、山梨を中心に、個展やグループ展で作品を発表する。'88年夏、太田町にて、建築士会青年部と共に、住民参加の野外イベントを行なう。

結　　び

思い起こせば、『いま見る、先見る！ヤマナシドリーム』のキャッチコピーは、山梨の時代を大切に価値付け、チョット、ライト感覚で落し込んだのである。が、このキャッチの隠しコピーはそれのアイロニー（反語）としての重い現実感と、過去からのフィールド（地域）をしっかり見つめ直し、サーベイ（探究）することの大切さを含んでいるのである。

私達、山梨県建築士会青年部は、『建築を通して、この地域に何ができるか』というテーマで、ここ数年来まちづくり、景観づくりを進めて来たように思う。この地域に生活しているという視点から、過去を分析したり、現実をフィールドワークして、我々の未来への指針や行動エネルギーになるべく活動をして来た。また、私達の２０代、３０代の今を、それぞれに貴重な時間を裂いて仕上げた、愛する地域へのメッセージや報告書を、少なくとも机の上に積んで置かれるものだけにはしたくないと、市民と共に実践でき得るものにしたいと考え、創りあげてきたつもりである。

今回の『まちづくり国際シンポジウム』は、この流れを踏襲するものであるが、今までにちょっと欠けていたグローバルに、世界とこの地域を同時限的にとらえ直すことであった。単なるローカリズム（地域主義）に止まることなく、また地球や宇宙の動きがグローバルな関係として、メディアにより実感でき得る時代であるからこそ、この視点に立脚できたのである。

東欧の民主化、湾岸戦争、地球環境問題及び経済大国日本等を身に感じながらの今年１月のニューヨーク研修会。本音は息抜きであったはずが、今回のシンポジウムの下準備になろうとは思いもかけない事柄の進み具合であった。Ｍｒ．デビット・マーメンに出会ったのもこの時であった。ニューヨークの建築を単に見るだけでなく、目に見えない建築の、都市のシステムを見るために、世界的な都市問題の専門家であるニューヨーク行政研究所の国際都市研究部長である彼のところを訪問したわけであった。基本的に世界各地

の建築が、ロビーストのような今までの日本の建築家達によるビジュアル（視覚的）な紹介や、小理屈にあきあきしているのは私だけではないはずであろう。そんな表に見える建築のデザインや事柄だけでなく、その国の国民の民族性や宗教、及び経済問題等と都市、建築のつくられ方の評価や、市民の民主主義とコミュニティー（地域社会）を実感することが大切であり、自分自身に還元でき得る研修旅行であった。

手当たり次第に出会った人々や、事柄を結び付けていくことが少々乱雑な行動に移った人々もあったようだ。行動と思考、論理と感性をいつも冷ややかに客観視しながら創るコードを、私は必要としない。動きや論理、感性はいつも同時限的であり、より生き物的でありたいからである。未来が暗いというイメージは不条理を了解するあまり、決断の内容が空白のまま放置されて、時が流れていくために生じてくる。問いかけをやめる時未来はふさがれる。要領の良いバランス感で生き抜く術や、世に言う行動の選択肢のバリエーションを建築と結び付けることはできない。が、しかしとはいえ、その客体化した自分に酔う現代人の生き方に否定の念を下すことは私にはできない。今、建築に何ができるかという問いに関して、どうせ建築単体で頑張ってもという諦めや、住宅設計に熱き想いを寄せることを軽く受け流し、こんなのもあると先の豊富な選択肢をイージーにセレクトしてしまう創り手自らのジレンマや、スケールメリットを追う社会性が、逆にまちづくりを通して建築の部分としての都市性をアピールする動きに移行して来たように思われる。それがある地域ではマスタープラン化して全体論になり、手続き合意論で、あたかも市民が納得したかのような条例づくりや規制になっってしまっているのはなぜなのか、考えさせられる部分がたくさんある。基本的な個人の責任やリスク（危険）負担を公に委ねてしまう国民性や、その中で上手に継いで来た国のコントロール術が巧みに噛み合って今が、地域があるのは事実であり大方の幸せ感に浸っている。建築の最大の武器である秩序を保守的に術化する由に、倫理は失われ欲望は閉鎖的になり、行動できなくなる。

エルンスト・フィッシャーは（私には東洋的に思えるのだが）『もっともありそうな常体というのは混沌（カオス）であり、もっともありそうでないのは、意識をもって生きる物質である』といって人間を解釈しているという。さらに人間はありそうもないことどもを実現するために生きたいと彼は言う。彼にとってありそうもないということは、現実の否定の中にあらわになっている存在であり、彼の隠絵的表現に理解できる。が、時代を科学に見つめるアーチストの立場であったり、評論の域での語りでは建築に対抗できない。生身の人間の空間を、クライアント（依頼主）がはっきり見える建築をするのが私の仕事である。先のエッシャーの『意識をもって生きる物質』を乗り越えて、逆に混沌の中に自分

を位置付け、人間は動物であり、生き物であって、メディアに映る戦いや愛の虚構ではない、痛みもわかり、毒もきく元物としての人間であるはずだ。建築が不毛時代だとか、ポスト〇〇だとか、つくられた建築論（デザイン化された）に振り回されるのはもういい。この場に暮し、もっとストレートに言えば、今生きているという実体空間を創ること、そこの地域と共有するための建築でありたい。一過性の商業主義ファッションや利便性追及の機能手法論及び政策としてのまちづくりのお手伝いではないはずだ。『もっともありそうな状態の混沌』の諸ベクトルの総和としての方向性をもつ因果律をつくるためでなく、つまり全体的な合意手法は合法的であるが、むしろ諸ベクトルの個人が勝手に合力を構成して表現する方法に地域コミュニティーの本音としてのまちづくりがあるのではないだろうか。地域市民及び企業のデモクラシーの世代交代の時代性や参加型の地域経営の方向に期待したいものである。（オレゴン州のまちづくりネットワークの１，０００人の友の例にみる）

今日、我々は建築士会青年部活動以前に市民であり、個人はいろいろな団体組織に入っている。より多元的な集団ネットワーク（無尽講に代表される小さなコミュニティー）が存在している、この山梨の場で、東京という世界都市をいつも客観的に見ながら、または取り込まれていく過程の中（長谷川徳之輔氏の言）で我々は建築を問う中、日常の行為を全体化させてきた。様々な不条理を了解する過程で、私達は希望にあふれてきた。組織化し、それが硬直化しつつある社会において、個人の存在を確かめ、個人の力（パワー）を認め合いながら、連合（ローカルネットワーク化）していく理想郷にこの場が位置していることも理解し合いたい。

次に、今回のまとめ役としてのコーディネーターの役割について一言。環境芸術ワークショップの代表である美術家高橋辰雄氏にお願いした。市民はアーチストとしての都市及び地域観を踏まえての立場から適任者だと理解した所以である。インタスタレーション（仮設造形）と言語で時代を斬る彼の一連の手法に建築をみたからにほかならない。かつて８８年夏の太田町風景パフォーマンスで、空洞化する町と風景の共有論で全国的にも我々のまちづくりが知られることとなったのを思い出してもらいたい。そもそも彼の基本コンセプト『風景の呪縛から』を共有できたからであった。新しく躍動するパリ、再生を期待するニューヨークにおいてもアーチストが重要なポストで参画しているのは周知のとおりである。その世界の流れの中で日本においても昨今、表面的なメセナ活動（文化支援政策）が景観経済改策等と結び付き、相変わらずの方法論輸入だけでビジネス展開している。また、その作品群も市民に地域に見えないところで運営されているところに、日本の

構造的な陰部がある。場の歴史を踏まえ、借りてきた手法でなく、都市の見えない部分を見える様にするのが私達建築をするものと共通するデザイン手法が彼にはある。軽やかな世代感と移行及び消えゆく美学から、ちょっと重い、より主体的（実体的）な生れ出づる美学への足音が彼に聞こえるのである。彼一連の創作行為（文壇、コピーライター、造形作家、教育家、芸能家ｅｔｃ）を通して、この地域へのこだわりと我々との共通因子をまちづくりの中に見つけた所以に、一般的に無難にシンポジウムをまとめあげる門切型のコーディネーターでは意味がなかったのである。こうしたいという意志のないコーディネーターにあきあきしてきたのと、これから我々の活動のバネとしてシンポジウムを実りあるものにしたいと願いを込め、先の『混沌とした場』での個人個人の豊かな表情ができ得る場づくりの仕掛けを、場の救世主としての模索があったのである。手続き論や、広義での合意手法だけでは、まちづくりはできないほど、行き詰まっている。市民一人一人が自信を持って生きる喜びを分かち合える都市であったり、建築でありたい。この場所に生活している市民という前提と、どこからか来て、かりそめの言葉で仮の宿的にまるめられるのではなく、くり返すが、個人個人の表現手法を彼から素直に学びたいという素朴な念から、全国でもあまり例を見ないコーディネーターとして期待したのであった。

山梨のグランドデザイン（総合計画）をどうしたいかは、つまるところ県民一人一人が考え、先の個人個人の諸ベクトルのローカルネットワーク化をより市民に見える部分でコントロールするシステムづくりとするということになるのかも知れない。その一つにＭｒ．デビット・マーメンのいう成長管理手法（グロウスマネージメント）があるのであろう。真のデモクラシーを追及する姿勢の違いがあるこの場において、すぐ役立つ手法とは言い難い。しかし２０～３０年先を射程に入れた地域づくりには、大いに学ばさせるものがあり、今回のシンポジウムを継起として熱き討議のたたき台にしていただきたいと思うのである。

これからの地域経営には、市民一人一人の家づくりの信頼を得ている市民建築士の部分から町をシステムを共有していく発想が重要で、大きなマスタープラン、グランドデザインをより生き生きとした中身のあるプランに変えていく使命が、私達市民建築士一人一人に要求されているのは時代の要請であろう。小さな家の小さな心（財産）は、山梨の大きな財である。

なぜなら、そこから生れた小さな芽はいずれ大樹となる可能性がいつもはらんでいるから。

山梨県建築士会青年部長　　久保田　要

まちづくり国際シンポジウム報告書

平成３年９月１５日発行

編　集：山梨県建築士会青年部
編集人：穂　坂　　真
発　行：山梨県建築士会青年部
山梨県甲府市丸の内1-14-19
山梨県建設会館4F
TEL 0552(33)5414
FAX 0552(33)5415

SYMPOSIUM

報告書

まちづくり国際シンポジウム

〈市民による地域経営と国際化〉

(社)山梨県建築士会 青年部
甲府市丸の内1-14-19 TEL0552(33)5414